田野町文化財調査報告書　第39集

元野河内遺跡

県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	もと の かわ ち い せき
書名	元 野 河 内 遺 跡
副書名	県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	田野町文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	田野町教育委員会　文化財調査事務所　金丸武司
編集機関	田野町教育委員会
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲２８１８番地
発行年月日	2001年３月
ふりがな	もと の かわ ち い せき
所収遺跡名	元 野 河 内 遺 跡
ふりがな	た のちょうこうもとの あざもと のかわ ち
遺跡所在地	田 野 町 甲 元 野 字 元 野 河 内
調査期間	1996年８月21日～1997年１月31日
調査面積	約12.000㎡
調査原因	農業関連
主な時代	旧石器時代　縄文時代　古代
主な遺跡	ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、細石刃核、槍先形尖頭器、爪形文土器、円筒貝殻文土器、押型文土器、手向山式土器、天道ヶ尾式土器、妙見式土器、平栫式土器、塞ノ神式土器、轟Ｉ式土器、曾畑式土器、春日式土器、石鏃、スクレイパー、石匙、石斧、礫器、原石、石核、須恵器、布痕土器
主な遺構	集石遺構、土坑

例　　言

1．本書は平成８年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けて実施した「元野河内遺跡」の調査結果を報告するものである。

2．本遺跡の現地調査及び室内整理は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業を文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下の通りである。

3．平成８年度の調査は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会	教　育　長		鍋倉　政信
調査担当	社会教育課	社会教育課長		前田　久育
同		社会教育課長補佐兼係長		川口　博文
調査・庶務担当		社会教育課	主任	森田　浩史
調査担当		同	主事	金丸　武司

4．平成12年度の室内整理及び資料整理作業は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会	教　育　長		堀内　侃
調整担当		社会教育課	主査	森田　浩史
庶務担当		同	主査	森田　浩史
調査担当		同	主査	森田　浩史
		同	主任主事	金丸　武司

5．現地の作業員として、田野町内からの方から多数の参加をいただいた。

6．本書で用いた方位は磁北、標高は海抜絶対高である。

7．本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

集石遺構：ＳＩ　　土坑：ＳＣ

8．本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」による。

9．本書に用いたスクリーントーン番号は、ＬＥＴＲＡＳＥＴ　ＪＡＰＡＮの規格に基づく。

10．本書の執筆及び編集は金丸が行った。

11．出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務所に保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　説
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の結果
　第１節　調査全体の概要 …… 3
　第２節　層　　序 …… 3
　第３節　各調査区の概要 …… 5
　第４節　検出遺構 …… 11
　第５節　出土遺物 …… 49
第Ⅲ章　まとめ …… 91

図 版 目 次

第１図　元野河内遺跡周辺地形図 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　調査区土層柱状模式図 …… 4
第４図　Ａ区遺構配置図 …… 6
第５図　Ｂ区遺構配置図（１）Ｖ層上面 …… 7
第６図　Ｂ区遺構配置図（２）Ｖ層中位 …… 7
第７図　Ｃ区遺構配置図 …… 9
第８図　Ｅ区遺構配置図 …… 10
第９図　Ｆ区遺構配置図 …… 12
第10図　Ａ区集石遺構実測図 …… 14
第11図　Ａ区集石遺構実測図 …… 15
第12図　Ａ区集石遺構実測図 …… 16
第13図　Ａ区集石遺構実測図 …… 18
第14図　Ａ区集石遺構実測図 …… 19
第15図　Ａ区集石遺構実測図 …… 21
第16図　Ａ区集石遺構実測図 …… 22
第17図　Ｂ区集石遺構実測図 …… 24
第18図　Ｂ区集石遺構実測図 …… 26
第19図　Ｂ区集石遺構実測図 …… 28
第20図　Ｂ区集石遺構実測図 …… 29
第21図　Ｂ区集石遺構実測図 …… 30

第22図　C区集石遺構実測図 …… 32
第23図　E区集石遺構実測図 …… 34
第24図　E区集石遺構実測図 …… 36
第25図　E区集石遺構実測図 …… 38
第26図　F区集石遺構実測図 …… 40
第27図　F区集石遺構実測図 …… 42
第28図　土坑実測図 …… 43
第29図　土坑実測図 …… 45
第30図　土坑実測図 …… 47
第31図　遺構内出土遺物実測図 …… 48
第32図　出土石器実測図 …… 50
第33図　出土石器実測図 …… 51
第34図　出土石器実測図 …… 53
第35図　出土土器実測図 …… 55
第36図　出土土器実測図 …… 56
第37図　出土土器実測図 …… 58
第38図　出土土器実測図 …… 59
第39図　出土土器実測図 …… 60
第40図　出土土器実測図 …… 62
第41図　出土土器実測図 …… 63
第42図　出土土器実測図 …… 64
第43図　出土土器実測図 …… 65
第44図　出土土器実測図 …… 67
第45図　出土土器実測図 …… 69
第46図　出土土器実測図 …… 70
第47図　出土石器実測図 …… 72
第48図　出土石器実測図 …… 74
第49図　出土石器実測図 …… 75
第50図　出土石器実測図 …… 76
第51図　出土石器実測図 …… 77
第52図　出土石器実測図 …… 78
第53図　出土石器実測図 …… 80
第54図　出土石器実測図 …… 81

表　目　次

表１　調査区別石鏃利用石材表 …… 71
表２　出土石器観察表（１） …… 82
表３　出土土器観察表（１） …… 83
表４　出土土器観察表（２） …… 84
表５　出土土器観察表（３） …… 85
表６　出土土器観察表（４） …… 86
表７　出土土器観察表（５） …… 87
表８　出土石器観察表（２） …… 88
表９　出土石器観察表（３） …… 89
表10　出土石器観察表（４） …… 90

写　真　図　版　目　次

図版１　（元野河内遺跡調査前遠景） …… 97
図版２　（Ａ区近景、遺構検出状況、ＳＩ―01検出状況） …… 98
図版３　（Ａ区ＳＩ－01完掘状況、ＳＩ－02検出状況、ＳＩ－02完掘状況） …… 99
図版４　（Ａ区ＳＩ－03検出状況、ＳＩ－04検出状況、ＳＩ－05検出状況） …… 100
図版５　（Ａ区ＳＩ－06検出状況、ＳＩ－06完掘状況、ＳＩ－07検出状況） …… 101
図版６　（Ａ区ＳＩ－08検出状況、ＳＩ－08完掘状況、ＳＩ－11検出状況） …… 102
図版７　（Ａ区ＳＩ－11完掘状況、ＳＩ－12検出状況、ＳＩ－14検出状況） …… 103
図版８　（Ａ区ＳＩ－14完掘状況、ＳＩ－16検出状況、ＳＩ－17検出状況） …… 104
図版９　（Ａ区ＳＩ－17完掘状況、ＳＩ－18検出状況、ＳＩ－19検出状況） …… 105
図版10　（Ａ区ＳＩ－20検出状況、ＳＩ－21検出状況、ＳＩ－22検出状況） …… 106
図版11　（Ａ区ＳＩ－23検出状況、ＳＩ－23完掘状況、ＳＩ－24検出状況） …… 107
図版12　（Ａ区ＳＩ－25検出状況、ＳＩ－26検出状況、ＳＩ－27検出状況） …… 108
図版13　（Ａ区ＳＩ－27完掘状況、ＳＩ－28検出状況、ＳＩ－29検出状況） …… 109
図版14　（Ａ区ＳＩ－29完掘状況、ＳＩ－30検出状況、ＳＩ－31検出状況） …… 110
図版15　（Ａ区ＳＩ－31完掘状況、ＳＩ－32検出状況、ＳＩ－33検出状況） …… 111
図版16　（Ａ区ＳＩ－34検出状況、ＳＩ－35検出状況、ＳＣ－01検出状況） …… 112
図版17　（Ａ区ＳＣ－02検出状況、ＳＣ－03検出状況、Ｂ区遺構検出状況） …… 113
図版18　（Ｂ区Ｖ層上面遺構検出状況、土坑検出状況、土坑断面） …… 114
図版19　（Ｂ区礫群検出状況、ＳＩ－01検出状況、ＳＩ－02検出状況） …… 115
図版20　（Ｂ区ＳＩ－03検出状況、ＳＩ－04検出状況、ＳＩ－05検出状況） …… 116
図版21　（Ｂ区ＳＩ－05完掘状況、ＳＩ－06検出状況、ＳＩ－06完掘状況） …… 117

図版22　（Ｂ区ＳＩ－07検出状況、ＳＩ－07完掘状況、ＳＩ－08検出状況）　……　118
図版23　（Ｂ区ＳＩ－08完掘状況、ＳＩ－09検出状況、ＳＩ－11検出状況）　……　119
図版24　（Ｂ区ＳＩ－13検出状況、ＳＩ－17検出状況、ＳＩ－17完掘状況）　……　120
図版25　（Ｂ区ＳＩ－19検出状況、ＳＩ－20検出状況、ＳＩ－21検出状況）　……　121
図版26　（Ｂ区ＳＩ－22検出状況、ＳＩ－24検出状況、ＳＩ－25検出状況）　……　122
図版27　（Ｂ区ＳＩ－27検出状況、ＳＩ－28検出状況、ＳＩ－29検出状況）　……　123
図版28　（Ｂ区ＳＩ－30検出状況、ＳＩ－31検出状況、ＳＩ－32検出状況）　……　124
図版29　（Ｂ区ＳＩ－34検出状況、ＳＩ－35検出状況、ＳＩ－36検出状況）　……　125
図版30　（Ｃ区ＳＩ－01検出状況、ＳＩ－03検出状況、ＳＩ－04検出状況）　……　126
図版31　（Ｃ区ＳＩ－05検出状況、ＳＩ－06検出状況、ＳＣ－01検出状況）　……　127
図版32　（Ｃ区ＳＣ－03検出状況、土器出土状況、Ｄ区近景）　……　128
図版33　（Ｅ区遺構検出状況、礫群検出状況、集石遺構検出状況）　……　129
図版34　（Ｅ区ＳＩ－01検出状況、ＳＩ－02検出状況、ＳＩ－03検出状況）　……　130
図版35　（Ｅ区ＳＩ－04検出状況、ＳＩ－05検出状況、ＳＩ－05完掘状況）　……　131
図版36　（Ｅ区ＳＩ－06検出状況、ＳＩ－07検出状況、ＳＩ－08検出状況）　……　132
図版37　（Ｅ区ＳＩ－09検出状況、ＳＩ－10検出状況、ＳＩ－11検出状況）　……　133
図版38　（Ｅ区ＳＩ－12検出状況、ＳＩ－13検出状況、ＳＩ－14検出状況）　……　134
図版39　（Ｅ区ＳＩ－15検出状況、ＳＩ－16検出状況、ＳＩ－17検出状況）　……　135
図版40　（Ｅ区ＳＩ－18検出状況、ＳＩ－19検出状況、ＳＩ－20検出状況）　……　136
図版41　（Ｅ区ＳＩ－21検出状況、ＳＩ－22検出状況、ＳＩ－23検出状況）　……　137
図版42　（Ｅ区ＳＩ－24検出状況、ＳＩ－24完掘状況、ＳＩ－25検出状況）　……　138
図版43　（Ｅ区ＳＩ－26検出状況、ＳＣ－01検出状況、ＳＣ－02検出状況）　……　139
図版44　（Ｅ区ＳＣ－04検出状況、ＳＣ－05検出状況、ＳＣ－06検出状況）　……　140
図版45　（Ｆ区遺構検出状況、ＳＩ－01検出状況、ＳＩ－01完掘状況）　……　141
図版46　（Ｆ区ＳＩ－02検出状況、ＳＩ－02完掘状況、ＳＩ－03検出状況）　……　142
図版47　（Ｆ区ＳＩ－04検出状況、ＳＩ－04完掘状況、ＳＩ－05検出状況）　……　143
図版48　（Ｆ区ＳＩ－05完掘状況、ＳＩ－06検出状況、ＳＩ－06完掘状況）　……　144
図版49　（Ｆ区ＳＩ－07検出状況、ＳＩ－07完掘状況、ＳＩ－08検出状況）　……　145
図版50　（Ｆ区ＳＩ－08完掘状況、ＳＣ－01検出状況、ＳＣ－02検出状況）　……　146
図版51　遺構内出土遺物（１）　……　147
図版52　遺構内出土遺物（２）　……　148
図版53　出土遺物（１）　……　149
図版54　出土遺物（２）　……　150
図版55　出土遺物（３）　……　151
図版56　出土遺物（４）　……　152
図版57　出土遺物（５）　……　153

図版58　出土遺物（６）…… 154
図版59　出土遺物（７）…… 155
図版60　出土遺物（８）…… 156
図版61　出土遺物（９）…… 157
図版62　出土遺物（10）…… 158
図版63　出土遺物（11）…… 159
図版64　出土遺物（12）…… 160
図版65　出土遺物（13）…… 161
図版66　出土遺物（14）…… 162
図版67　出土遺物（15）…… 163
図版68　出土遺物（16）…… 164
図版69　出土遺物（17）…… 165
図版70　出土遺物（18）…… 166
図版71　出土遺物（19）…… 167
図版72　出土遺物（20）…… 168
図版73　出土遺物（21）…… 169
図版74　出土遺物（22）…… 170

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査に至る経緯

田野町は宮崎市から西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鰐塚山をはじめとする山々からなり、１市（宮崎市）及び５町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）と接している。主な産業は大根やタバコなどを主体とする農業であったが、近年は高速道路や国県道の整備によって交通の要衝の地となり、更に工業団地の整備と企業や専門学校の誘致、宅地開発の進行により、徐々にではあるが発展しつつある。しかし、その一方で農業基盤整備事業や各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となり、町教育委員会でも調整や調査体制の整備充実を図ってきたが、これらにかかる遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅している。

平成８年度は県営農地保全整備事業元野地区が実施されることとなり、事業地内に元野河内遺跡が所在したので、県文化課が分布範囲等を確認するために試掘調査を実施したところ、低湿地を除く全域に遺物が散布していることが明らかとなった。平成８年４月23日には町教育委員会、県文化課と原因者である宮崎県中部農林振興局の間で遺跡の保存について協議を行い、工事施工上消滅を免れない部分についてのみ、発掘調査による記録保存の措置を講じることで合意に至った。その後平成８年８月21日に同振興局と委託契約を締結し、同年８月22日より発掘調査に着手した。調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら平成９年１月31日に終了した。同遺跡の調査面積は約12,000㎡に至った。

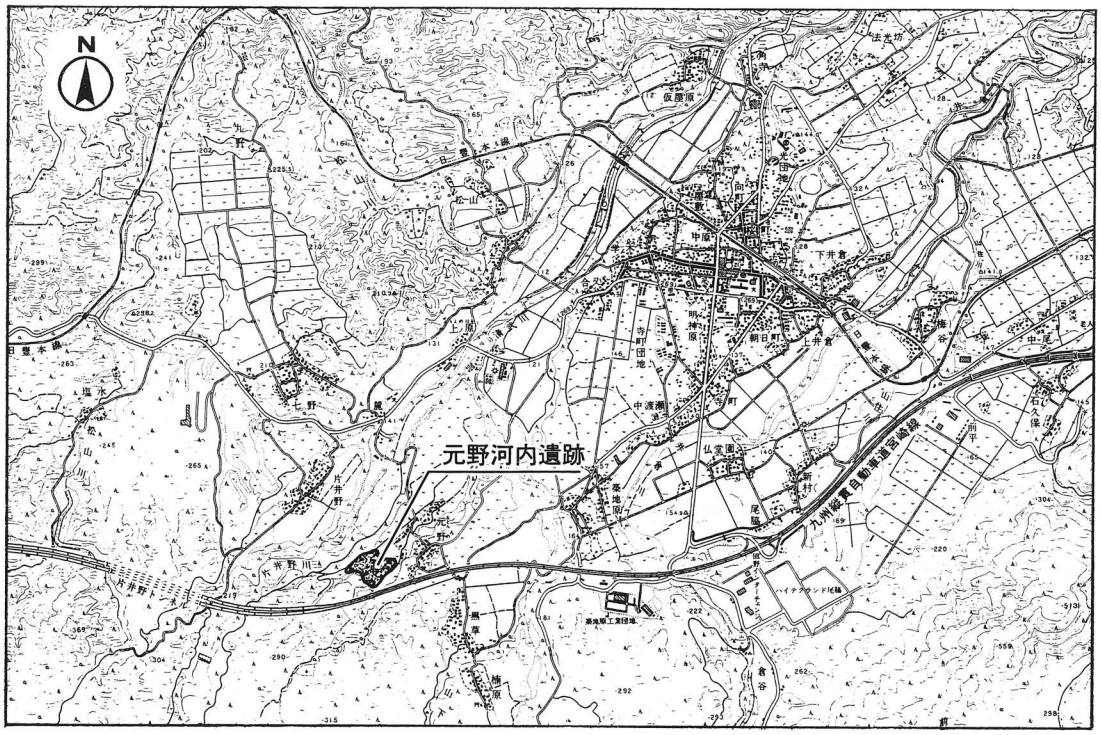
第２節　遺跡の位地と歴史的環境

元野河内遺跡は田野町の中心部から南南西の、鰐塚山系から続く台地部に立地する元野地区の西部、左岸の片井野川へ注ぐ少河川が深い谷を刻みながら横断する複雑な地形上に立地する。同地区は昭和46年に宮崎大学史学研究部考古学班による調査で縄文時代後期の遺物が確認された黒草遺跡が近接するほか、Ｅ区、Ｆ区の所在する台地の東端には平成４年～７年に調査が行われた高野原遺跡が立地しており、縄文時代早期の集石遺構や前・中期の土器、晩期の掘立柱建物群、弥生時代の花弁状住居を含む集落や古墳時代の地下式横穴などが検出された。

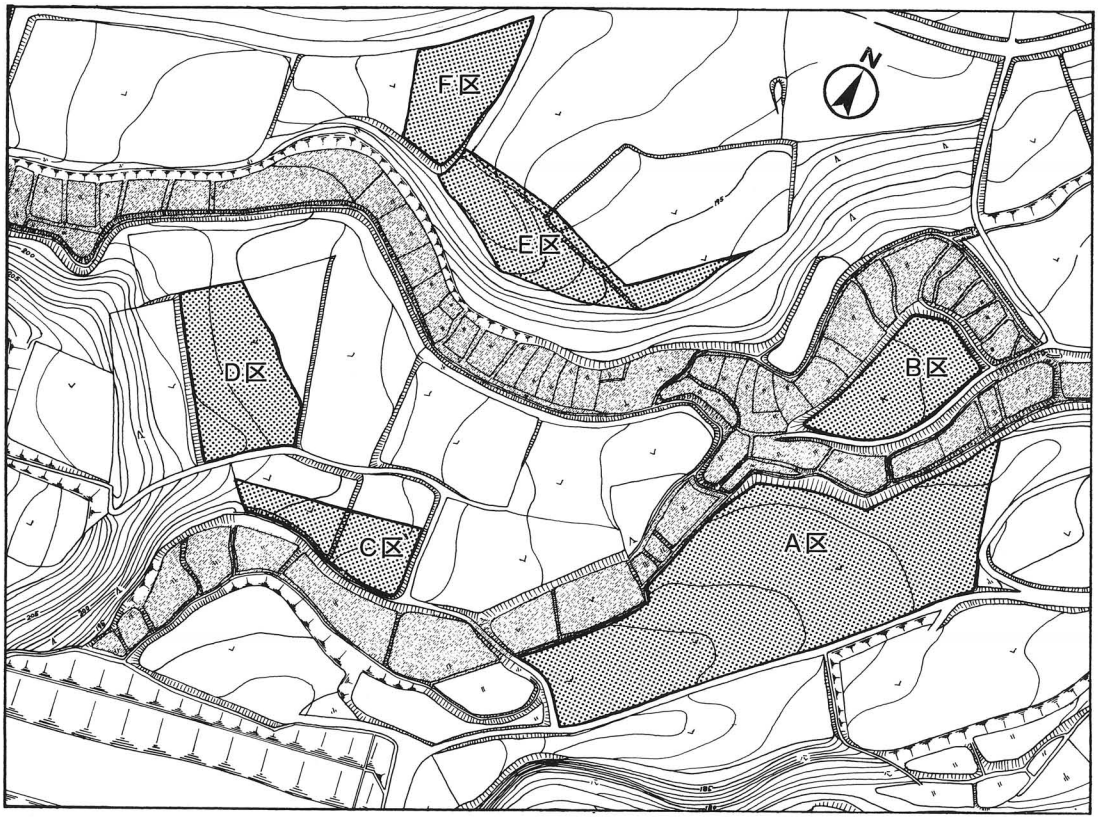
以上のように、当地域一帯は幾度かの断絶期を経ながらもかなり長期にわたって集落が営まれていたことがわかる。なお、前述の遺跡が河川に接した台地縁辺部に立地するのに対し、元野河内遺跡は鰐塚山系を起源とする少河川の影響により、凹凸の激しい地形上にある点が特徴として挙げられる。

（参考文献）

「本野遺跡（縄文時代遺物編）」田野町文化財調査報告書第32集　田野町教育委員会　1999
「本野遺跡（弥生時代の調査）」田野町文化財調査報告書第33集　田野町教育委員会　2000
「高野原遺跡Ｂ・Ｃ区」　田野町文化財調査報告書第35集　田野町教育委員会　2000
「高野原遺跡（Ｅ～Ｇ区）」　田野町文化財調査報告書第36集　田野町教育委員会　2000



第１図　元野河内遺跡周辺地形図（１：30,000）



第２図　調査区位置図（１：4,000）
調査区：スクリーントーン101番、旧河川スクリリーントーン787番

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　調査全体の概要

調査は設計上で切り土となり遺跡が消滅する部分のみを対象とし、南東部をＡ区、少河川の浸食による中州となった東部をＢ区、西側の高地から続く傾斜部の南側をＣ区、北側をＤ区とし、谷を隔てた北部の台地縁辺部にＥ区、Ｆ区をそれぞれ設定して実施した。

調査は表土と共にアカホヤ火山灰層の堆積部も含め機械により掘削を行った後、手掘りによる遺物包含層並びに遺構検出作業を行った。調査の手順はどの調査区に於いても共通しているが、確認された層序や出土した遺物、遺構は調査区ごとに変化が見られた。

第２節　層　序

Ⅰ層：10ＹＲ４／３

耕作土層。土色は区により若干の変化が見られる。

攪乱層：10ＹＲ２／１

Ｂ区、Ｃ区東部の傾斜地上、Ｄ区において確認された層である。層中に混入物を見ることはほとんどなく、耕作土よりも固く締まっており、粘性も若干ある。東側の高地の崩落により堆積した層であると考えられる。

Ⅱ層：10ＹＲ７／８

層中に半透明のガラス質粒子を少量含み、粘性は全くない。層は極めて軟質であり、乾燥すると粉状に砕ける。アカホヤ火山灰の二次堆積層であると考えられる。この層は全ての調査区で確認された。Ｄ～Ｆ区からは、この層の上面より縄文時代前・中期の遺物が出土している。

Ⅲ層：10ＹＲ７／６

Ⅱ層と比較し固く締まっており、粘性は全くない。層中には半透明のガラス質粒子が多量に含まれるほか、白色粒子を少量、黒色粒子を微量混入する。一般的に言われるアカホヤ火山灰層であるが、こちらは一時堆積層であると考えられる。この層は調査区内ではＥ区、Ｆ区で確認されたのみである。

Ⅳ層：2，5Ｙ４／４

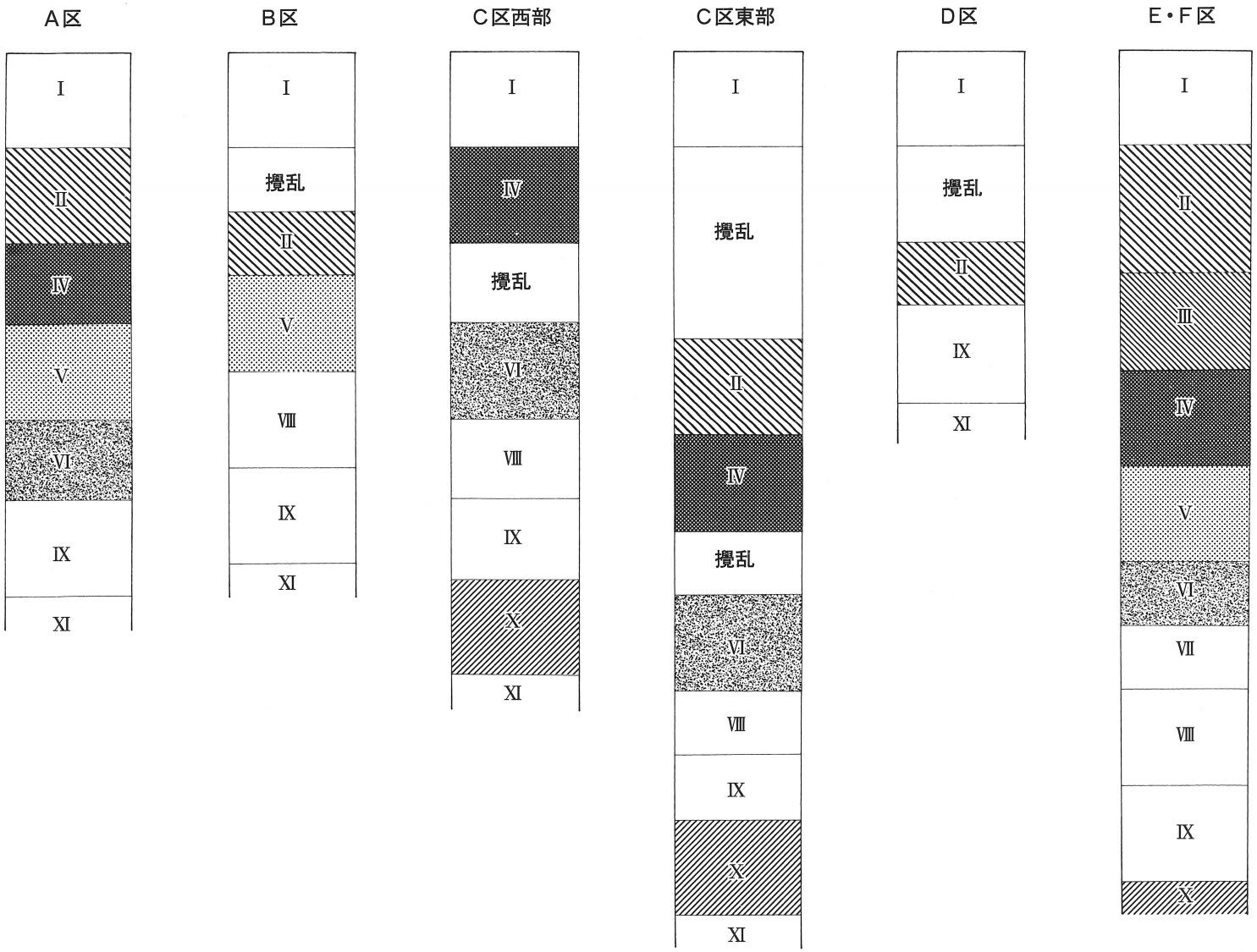
固く締まった層。粘性があり、層中には白色の粒子が数多く認められ、オレンジ色や赤褐色の軟質粒子も少量ではあるが混入する。俗に言う牛の脛ロームと呼ばれる層である。Ｂ区とＤ区を除く調査区の全てから確認された。また、この層は遺物・遺構が多く出土している。

攪乱層：2，5Ｙ８／８

Ｃ区にのみ認められた層。色調や粒子の大きさはＶ層に近いが、粘性は殆どなく、ガラス質粒子を含む等の特徴はⅡ層のアカホヤ二次堆積層に近い。両者とＶ層が混入したものと考えられる。

Ⅴ層：2，5Ｙ４／２

Ⅳ層よりも軟質であるが、粘性に富む層である。Ⅳ層で見られる白色粒子やオレンジ色の軟質粒子が僅かに確認できる。遺物の出土はこの層が最も多く、また集石遺構の多くが、若干の差を持ちなが



第３図　調査区土層柱状摸式図

らもこの層中を検出面としていた。河川の作用により流出したと考えられるD区を除く全ての調査区から確認された。

Ⅵ層：10ＹＲ３／１

小林降下軽石層と考えられる。大変固く締まった黒褐色の層であり、粘性に富み、黒色粒子、白色粒子を少量含む。遺物等は確認されなかった。B区とD区でこの層が確認されなかったのは、河川の浸食によるものと思われる。

Ⅶ層：10ＹＲ４／２

小林降下軽石層の下位のローム層。色調や粘性に富む点はⅤ層に近いと判断される。但し混入物の類は皆無であった。堆積の良好なE、F区以外では確認されない。文化層である可能性を考慮して調査区内に部分的に深堀を行ったが、遺物・遺構等は認められなかった。

Ⅷ層：10ＹＲ５／３

固く締まった粘性に富む層であり、削ると斑紋が見られる。この層もⅦ層と同様にE、F区以外では堆積が確認されていない。

Ⅸ層：10ＹＲ４／３

非常に固く締まった粘土層である。粘性はⅧ層に比べ若干劣る。層中には白色粒子が高密に混入するほか、オレンジ色の軟質粒子も微量認められる。これらの混入物は更に下位の×層からのものと考えられる。なお、この層はA区を除く全ての調査区より確認された。

Ｘ層：2，5Ｙ７／８

姶良丹沢火山灰層である。層中にはおびただしい量のガラス質粒子が含まれるほか、少量ではあるが指頭大の軽石も認められる。層は固く締まっているものの、乾燥すると砂状に崩れ落ちる。C区とE、F区において確認された。

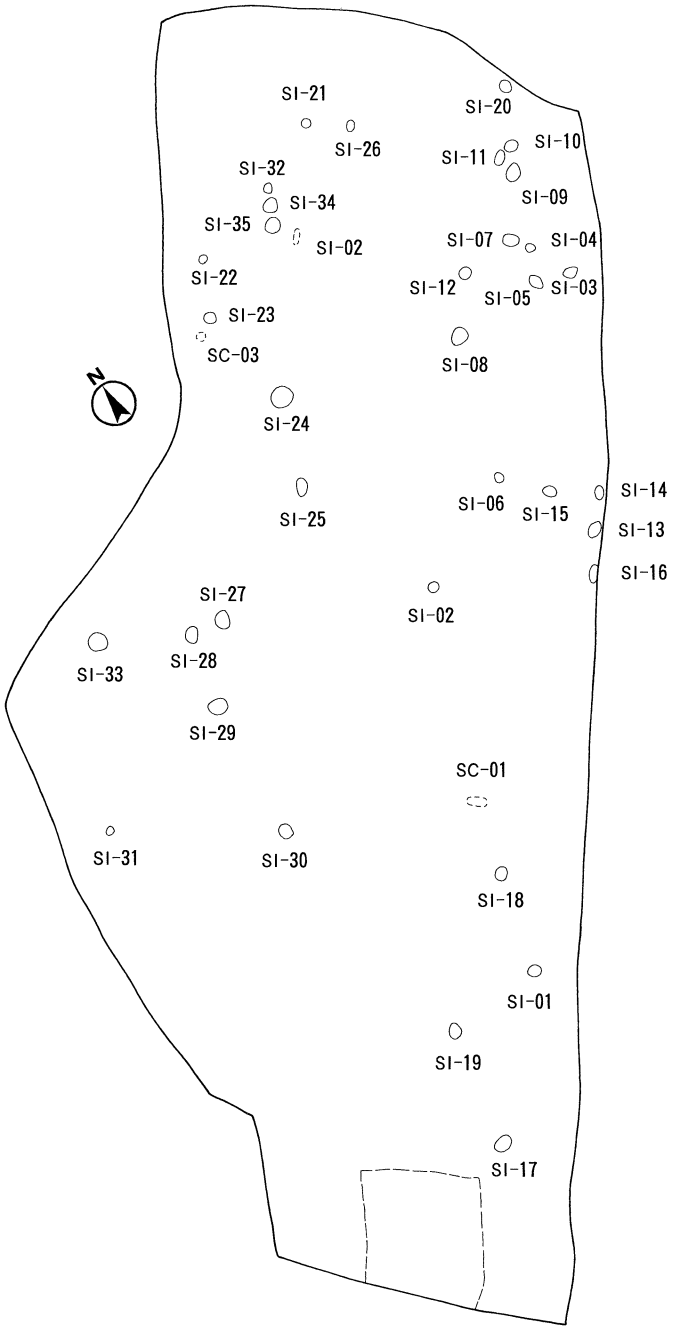
Ⅺ層：礫層

親指大の礫が密集する層。礫と礫の間は粘質に富む粘土と大粒の砂利より成り、下位に行くほど礫は大きさを増す。これまでの調査より、元野地区ではＡＴの下位に礫層が堆積する傾向があるが、今回この調査区からも同様の堆積が認められた。

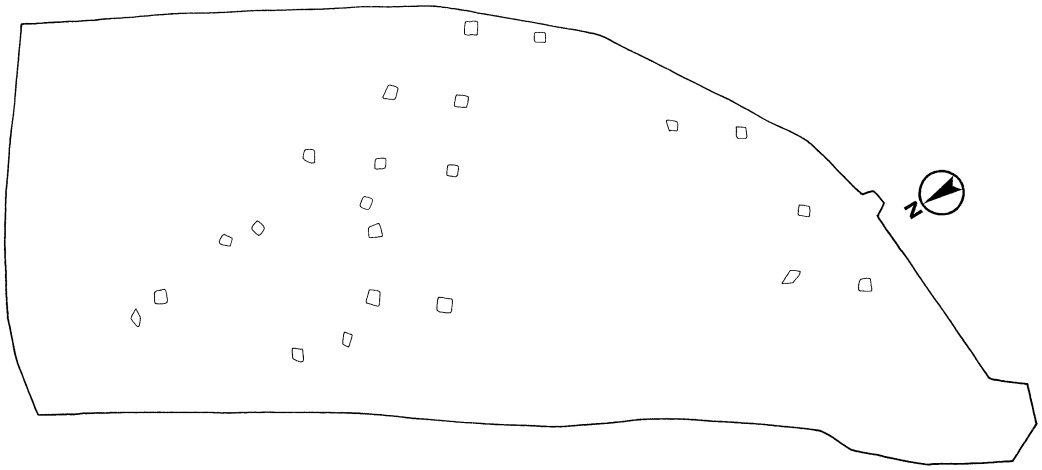
第３節　各調査区の概要

Ａ区（第４図）

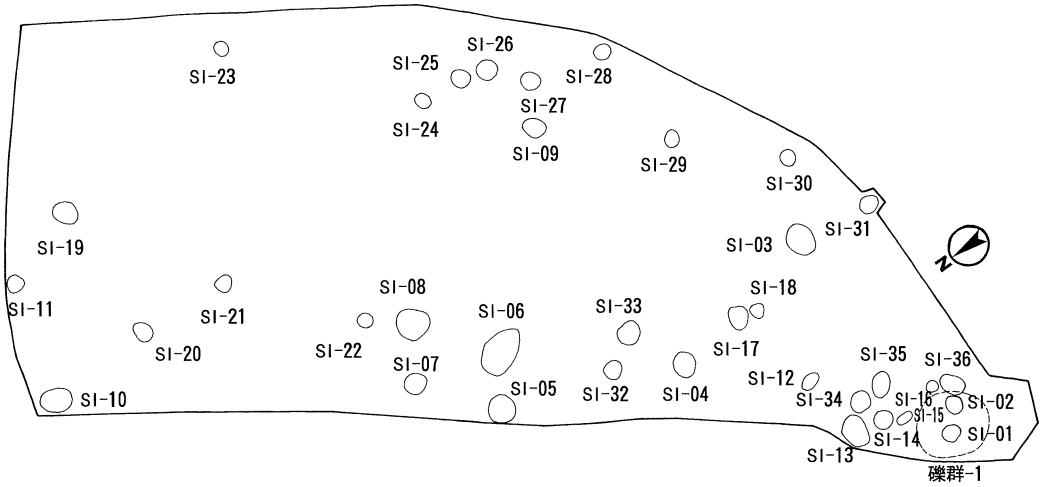
河川に接した南岸に位置する。調査区は東側に緩やかに傾斜しており、河川との高低差が５ｍ前後であることから、氾濫を度々受けていたと考えられ、その為調査区南部はⅣ層が厚く堆積しているのに対し、北部の河川沿いにⅣ層は認められず、Ⅴ層の堆積も薄かった。アカホヤ火山灰層の下面まで機械による掘削を行ったところ、集石遺構と思われる礫の集合を数ヶ所確認したため、これより下位を縄文時代早期の文化層と判断し手堀りにより調査したところ、調査区内の全域に遺構、遺物が確認されるに至った。検出された遺構は集石遺構35基、土坑３基、土器は草創期の土器数点を除き全て早期であった。遺物は主に南側に集中が見られた。特に石器類の出土が多く、中でも石鏃は元野河内遺跡全体の約半数に及んだ。このうち張質安山岩製や姫島産黒曜石の石鏃が多かったのは特徴といえる。



第４図　Ａ区遺構配置図（１：1,600）



第５図　Ｂ区遺構配置図(1)Ｖ層上面（１：800）



第６図　Ｂ区遺構配置図(2)Ｖ層中面（１：800）

他に、石匙や石斧、原石等、石製品の出土も豊富である。なお、調査区西端の破線部は近代の粘土採取所及び瓦の廃棄所であり、Ⅸ層の上層まで完全に破壊されていた。

B区（第５図・第６図）

この地点は、かつて河川の影響により形成された中州であったと思われ、四方を湿地に囲まれる。アカホヤ火山灰層を取り除いたところ、調査区の至る所に30㎝×30㎝の、黒色の埋土を持つ掘り込みを多数確認した（第５図）そのため、文化層の調査に入る前にこの遺構検出作業を行う。結果、埋土中に石灰やアカホヤのブロックが確認された。地元の古老が訪れた際にこのことを質問すると、この地はかつて赤痢病患者を隔離した施設であるという答えが返ってきた。また、Ａ区東側に隣接する畑の一角には墓石が山積みされているが、地元の作業員によると、ここには以前小さな寺が建てられており、そこに住む僧が患者を看取っていた伝承があるという。見える部分の墓石を見ると、微かではあるが明和、寛政等の年号を確認することができ、この墓が建てられた前後、この寺を営む僧の手で河川により周囲とは隔絶されたＢ区を施設としたと考えられる。患者は個別の小屋に収容されていたと伝えられており、正方形の土坑は小屋に設けられた便所穴であったと考えられる。ただし、それに伴う柱穴等は検出されなかった。また、土坑の覆土より検出された石灰は消毒の為、アカホヤのブロックはその代替品であったと思われる。

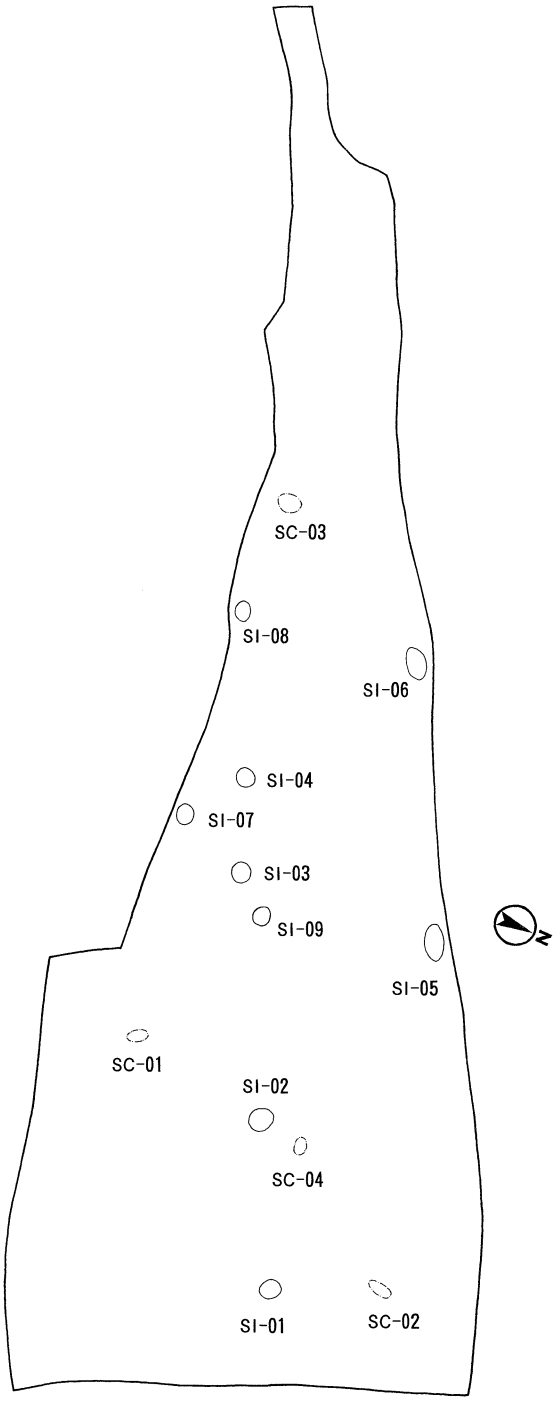
アカホヤ火山灰の下位からは36基の集石遺構と１基の礫群を確認することが出来た（第６図）。集石遺構は調査区内で最も標高が低くなる西端に密集していたが、北部に隣接したＳＩ―05～08を除くと全体的に小振りのものが多い。遺物は土器石器共に、ごく少量の出土に留まった。

C区（第７図）

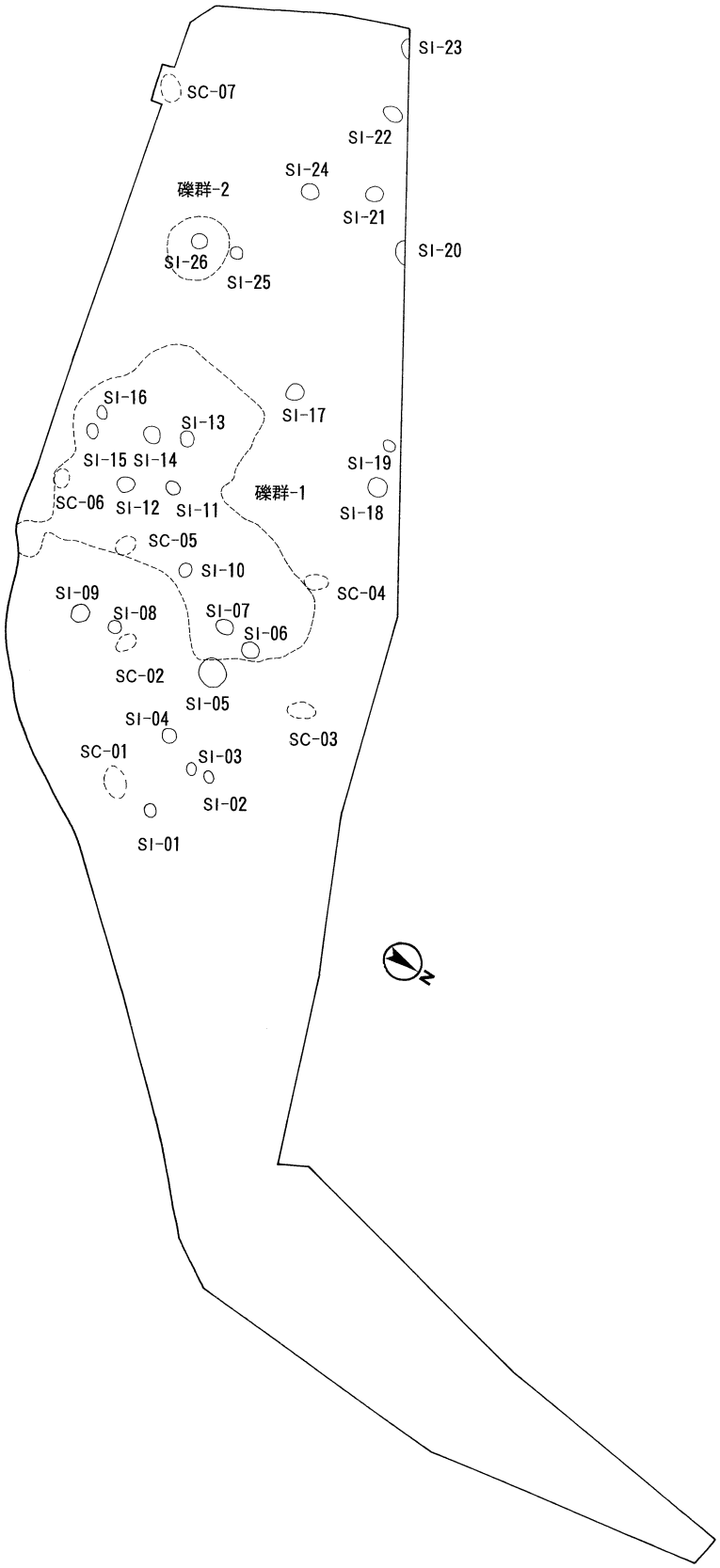
西部の高地から東側に急に傾斜する地点である。この調査区は牛の脛ローム層の上部に攪乱層が確認され、層中より旧石器時代の遺物が多数出土したため、手堀り作業に入る。恐らく西部の高台に旧石器時代の遺跡が形成され、そこから流れ込み調査区内に残存したものと考えられる。この地点はこれ以外にも近接する少河川の浸食の影響もあり、早期の遺物包含層は確認されなかった。しかし、牛の脛ローム上部からは縄文時代早期末の土器が良好な状態で出土しているほか、攪乱層の上面より集石遺構８基、土坑３基が検出された。

D区

西部にある高地の段丘下にあり、東側に緩やかに傾斜する。このＤ区は河川による幾度もの浸食を受けたと考えられ、縄文時代早期の遺物包含層は全く確認されなかったが、大規模な削平を受けていた西側を除く耕作土下の攪乱層からⅡ層の上面にかけて、縄文時代早期～中期の遺物が少量ながら確認された。調査はⅡ層上面までを機械により掘削し、部分的に残存しているⅡ層の遺物を手堀りにより確認した。これらはＣ区の攪乱層と同様、段丘が崩落したために調査区内に流入したものと考えられる。なお、旧石器時代や縄文時代早～中期の遺跡であったと考えられる高台は公園として既に整備が行われており、その際の削平によって文化層は完全に消滅していた。



第７図　Ｃ区遺構配置図（１：800）



第８図　Ｅ区遺構配置図（１：800）

E区（第８図）

旧河川の北岸にあたり、河川からの高低差は１５ｍと、他の調査区に比べ標高が高い。東側に緩傾斜する地形を呈している。E区は良好な土層の堆積が認められ、地形的にも河川の浸食作用を全く受けなかったものと考えられる。耕作土を機械により除去したⅣ層の上面より大規模な礫群が検出され、更に礫を取り除くと下層より大形のもの１基を含む集石遺構が26基検出されたほか、縄文時代中期前後と思われる土坑も７基検出された。土器は押型文土器や下剥峰タイプが多かったものの、早期全般にわたる遺物を見ることが出来る。石器としては石鏃や尖頭状石器が多かった。また、Ⅴ層よりナイフ形石器等の旧石器時代の遺物や爪形文土器、槍先形尖頭器といった縄文時代草創期の遺物も出土している。なお、耕作土中ながら須恵器や布痕土器が採集されたのもこの調査区からである。

F区（第９図）

調査区は西側に緩傾斜しており、土層の堆積は良好であった。文化層は削平されていたものの、Ⅱ層上面に縄文時代前・中期の土器が出土したため、機械による掘削を一時中断し、遺物の採集を行った。その後Ⅳ層上面まで機械により掘削を行った後、手堀りにより包含層の調査を行ったところ、Ⅳ層からⅤ層にかけて旧石器時代～縄文時代早期にかけての遺物が多数確認された。検出された遺構は礫群１基、集石遺構８基、土坑３基である。

第４節　検出遺構

集石遺構

A区（第10～16図）

（ＳＩ－01）

A区南西部のⅣ層上面より検出された。72㎝×58㎝の範囲内に角礫がやや集合した遺構である。礫を取り上げると、長軸78㎝、短軸70㎝、深さ33ｃｍの楕円形を呈する土坑を確認することが出来る。土坑中には炭が少量確認されたが、礫は殆ど見られない。

（ＳＩ－02）

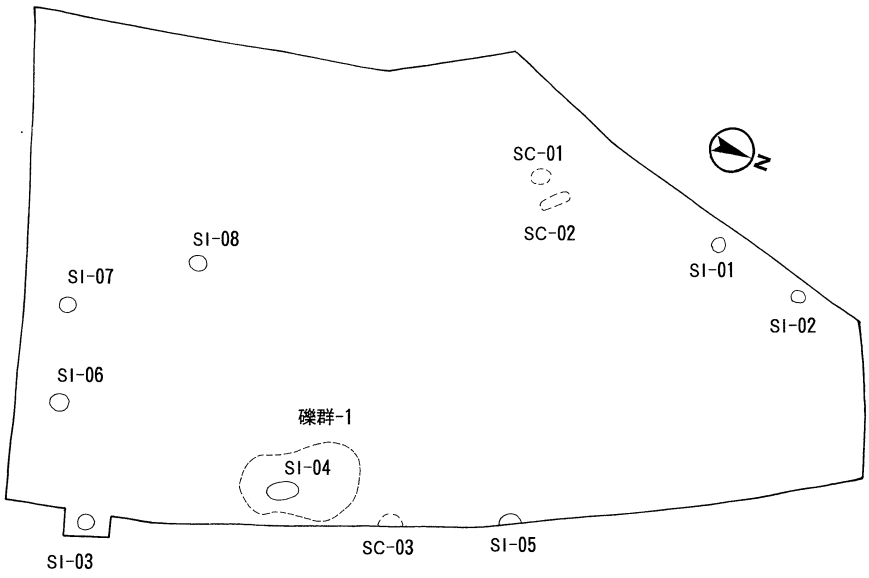
調査区中央部のⅣ層上部より検出された。132㎝×140㎝の範囲内に大ぶりの角礫が密集しており、長軸122㎝、短軸100㎝、深さ15㎝の土坑を伴う。土坑は浅いものの、埋土中より大量の炭が確認された。

（ＳＩ－03）

南東部の道路際、Ⅳ層上部より検出された。165㎝×125㎝の範囲内に小ぶりの角礫がやや集合する。下位に長軸148㎝、短軸122㎝、深さ17㎝の楕円形を呈する土坑を伴う。

（ＳＩ－04）

南東部のⅣ層上部より検出された。76㎝×66㎝の範囲内に少数の角礫が疎らながらも集合しており、径約72㎝、最深部の深さ13㎝の不定形な土坑を伴う。



第９図　Ｆ区遺構配置図（１：800）

（ＳＩ－05）

調査区の南東部、Ⅳ層上部より検出された。171㎝×100㎝の範囲内に大ぶりの角礫の集合が認められる。下部に土坑等は伴わない。

（ＳＩ－06）

調査区の南部にあり、Ⅳ層上面から検出された。90㎝×50㎝の範囲内に少数の角礫が若干間隔を持ちながらも集合する。下位には110㎝×100㎝、深さ10㎝の歪な楕円形の土坑を伴う。

（ＳＩ－07）

調査区の南東側に位置し、Ⅳ層上面より検出された。145㎝×95㎝の範囲内に小ぶりの角礫ばかりが疎らながらややまとまる。下位にはごく浅い土坑が見られるものの、輪郭等は判然としなかった。

（ＳＩ－08）

調査区の南東に位置し、Ⅳ層上部より検出された。115㎝×132㎝の範囲内に大小の角礫が密集する。傾向として、外側にある礫ほど大ぶりのものが多く、内側には小ぶりの破砕した礫が目立つ。集石の下からは径約110㎝、深さ25㎝の土坑が確認され、土坑上部からは礫が多数確認された。また、土坑の底面付近からは多量の炭も検出されている。

（ＳＩ－09）

調査区の南東部、Ⅳ層上部より検出された。底辺66㎝、高さ82㎝の二等辺三角形状を呈しており、大ぶりの角礫が集合する。下部には径約110㎝、深さ10㎝前後の卵形の土坑を伴う。

（ＳＩ－10）

調査区の南東部にあり、Ⅳ層上面より検出された。125㎝×100㎝の範囲内に少量ながら礫が集合する。これらは板状の礫や大ぶりのものが目立つ。下部には長軸120㎝、短軸89㎝の土坑が確認された。深さは10㎝未満と極めて浅いが、これは耕作時に検出面が削平されていた可能性が高い。

（ＳＩ－11）

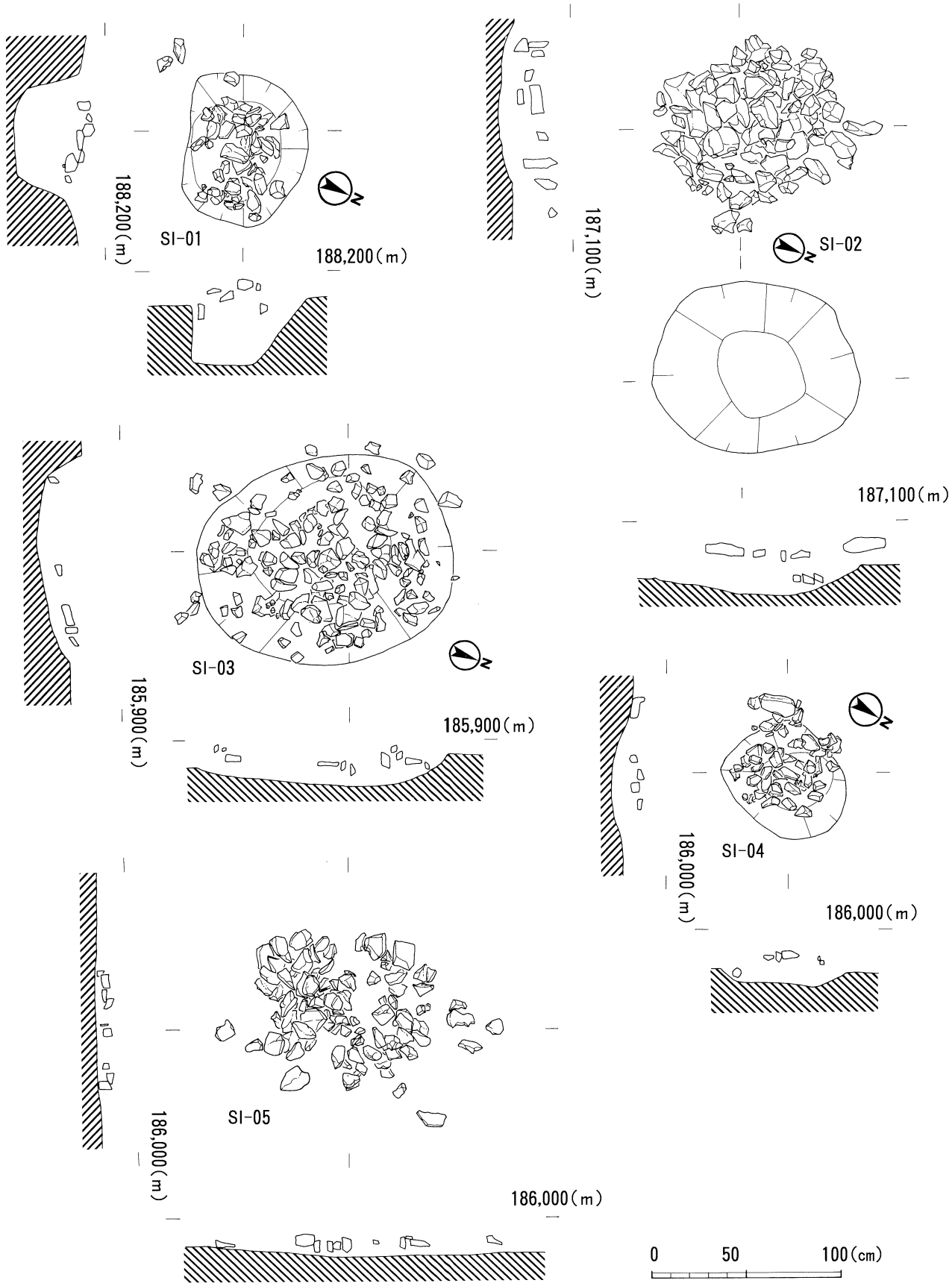
調査区の南東部、ＳＩ－09、ＳＩ－10等の集石遺構が隣接する地点で、Ⅳ層上部より検出された。径115㎝の範囲内に大小の礫の密集が見られる。ＳＩ－08と同じく、これも外側に大ぶりの石が多く、内側には小ぶりの、熱により破砕したと思われる礫が多い。遺構の下部に径約115㎝の土坑が確認されたが、この中は礫が密集しており、覆土からは多量の炭が検出された。また、遺構近くに三角形を呈する板状の礫も確認されている。

（ＳＩ－12）

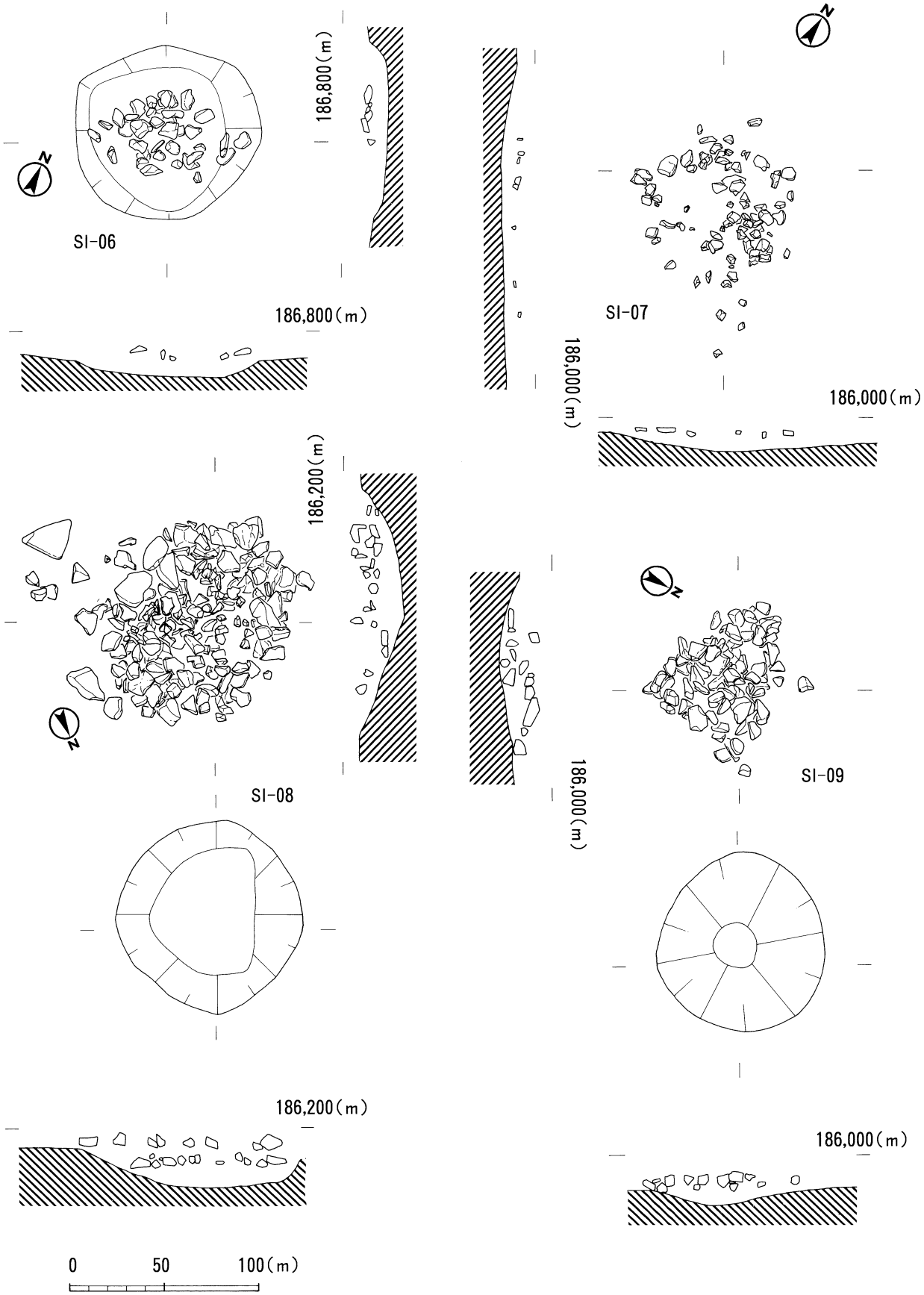
調査区の南東部にて、Ⅳ層中より検出された。径約140㎝の範囲内に角礫の不規則な集合が見られる。特徴的なのは、この礫の上に扁平な大型の礫が２個並んで配置されている点である。下部には径約138㎝の、卵形の土坑があり、土坑中には礫の密集が確認された。なお、この遺構の埋土からも、若干ながら炭が検出された。

（ＳＩ－13）

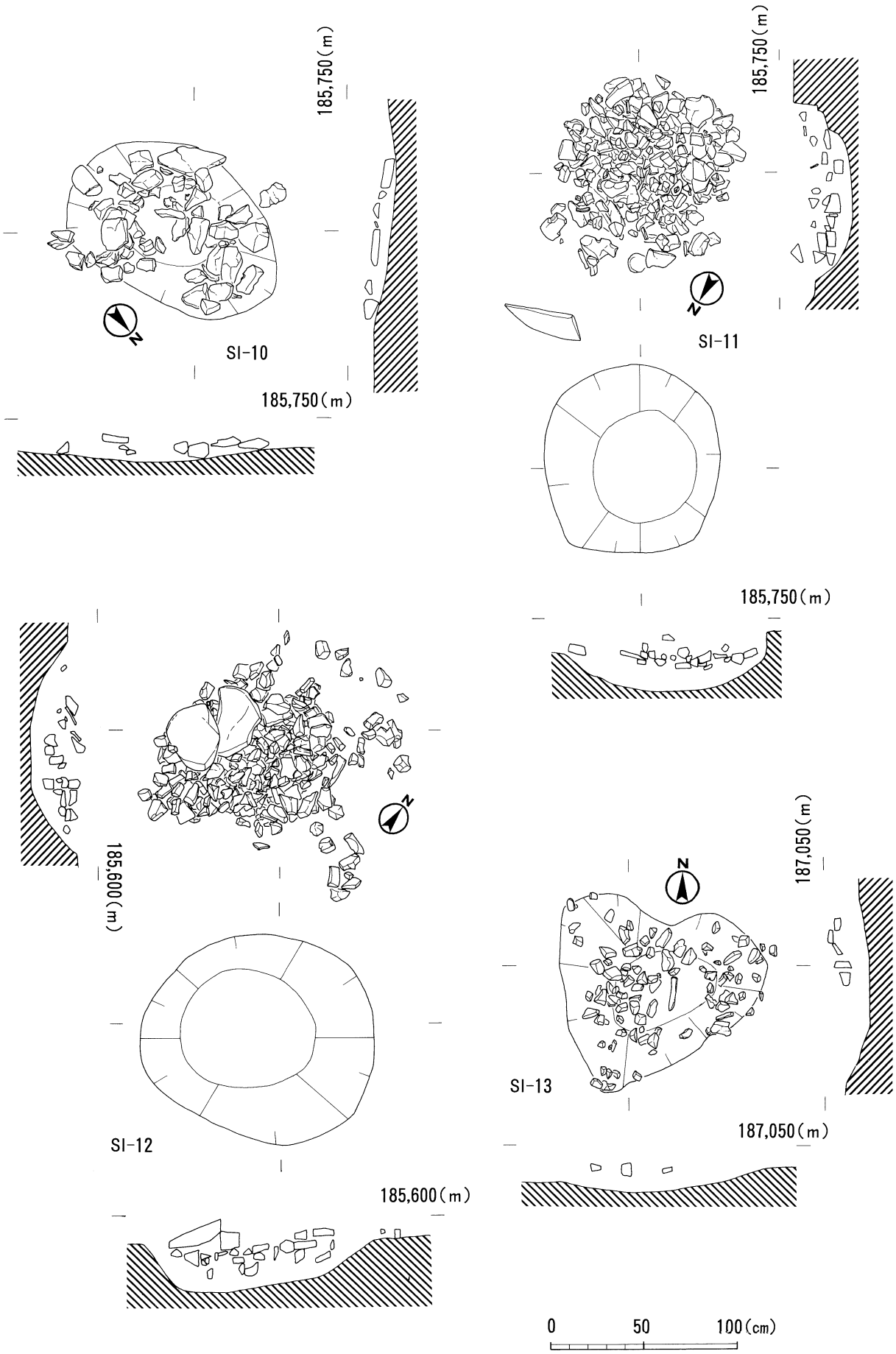
調査区南部の道路に接する地点より確認された。検出面はⅣ層中部である。132㎝の範囲内に間隔を置きながらも小ぶりの角礫が集まる。土坑を伴うが、不定形であり、土坑中に礫や炭等は確認されなかった。



第10図　A区集石遺構実測図（1：30）



第11図　A区集石遺構実測図（1：30）



第12図　A区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－14）

調査区南部の道路に接する地点にあり、Ⅳ層中部より検出された。115㎝の範囲内に、疎らながら若干の礫のまとまりを見ることが出来る。礫はどれも小ぶりである。また、下部に115㎝×82，5㎝、深さ15㎝の卵形を呈するの土坑が見られる。

（ＳＩ－15）

調査区南部、Ⅳ層中部より検出された。約70㎝の範囲内に、少量ながら礫が集合する。下部に68㎝×60㎝、深さ約30㎝の土坑を伴うことが確認された。土坑中に礫は混入されなかったものの、炭が多量に検出された。

（ＳＩ－16）

調査区南部の、道路に接する地点にあり、Ⅳ層下部より検出された。150㎝程の範囲内に、少量の角礫がややまとまる。中央部には径約50㎝、深さ15㎝の円形の土坑を伴うことが確認され、埋土より多量の炭が検出された。また、遺構からは楕円文を縦位に施文する押型文土器の口縁部～胴部片が出土した。

（ＳＩ－17）

調査区の最も南西部より、Ⅳ層下部より検出された。90㎝の範囲内に大小の礫が密集する。遺構に伴う径65㎝、深さ15㎝の土坑からは、大ぶりの礫が配置されていた。

（ＳＩ－18）

調査区南西部、Ⅳ層下部より検出された。150㎝程の範囲内に大小の角礫が集合する。遺構の下部からは深さ10㎝前後と浅い不定型な土坑が確認された。

（ＳＩ－19）

南西部、Ⅳ層下部より検出された。少量の礫が120㎝の範囲内に集合する。礫の下部には長軸93㎝、短軸75㎝の長円形の土坑が確認され、土坑中にも礫が少量ながらも混入することが確認された。

（ＳＩ－20）

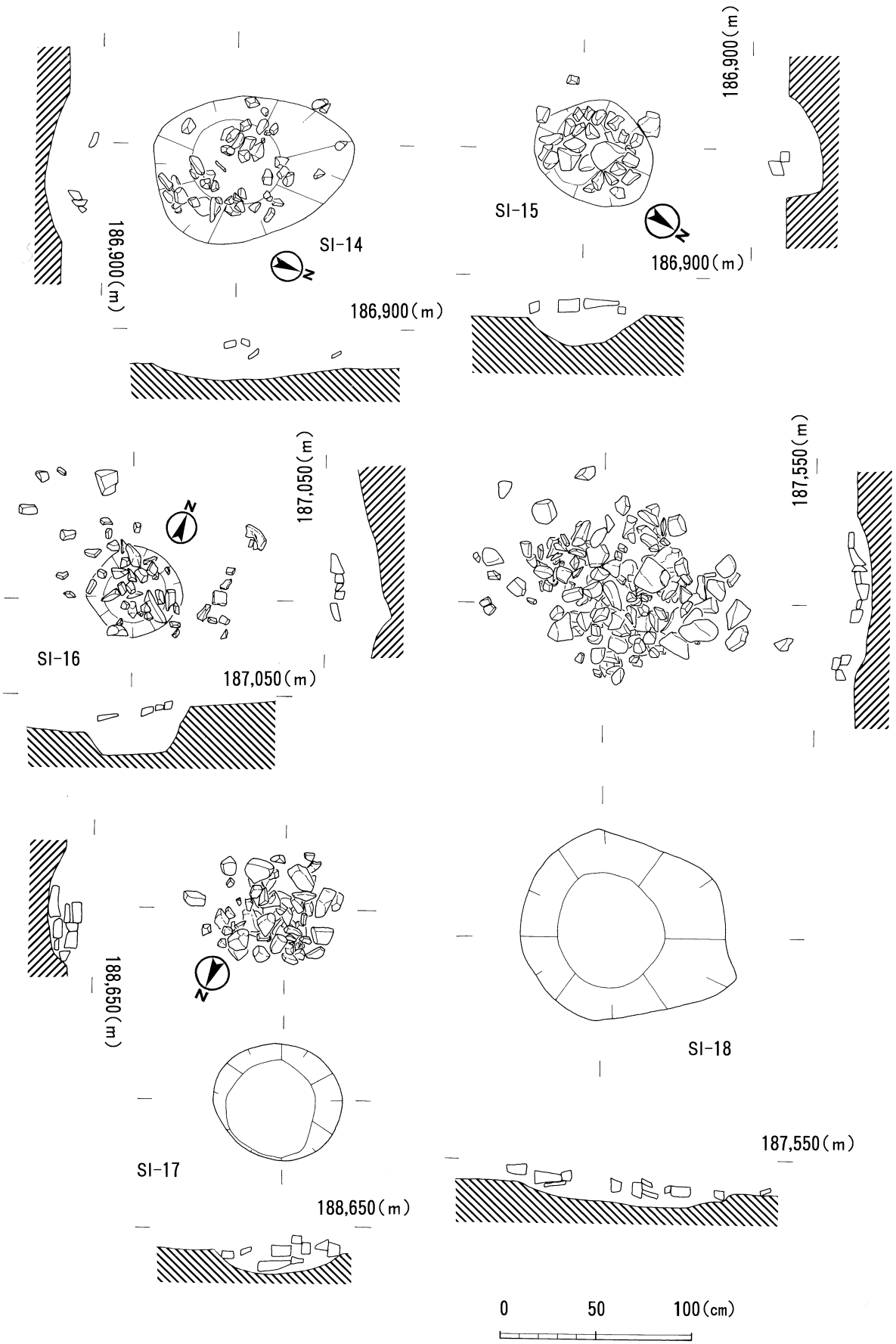
南東部の隅、Ⅳ層上部より検出された。礫は散らばっており、まとまりに乏しい。約60㎝の範囲内に少量の礫が僅かに集まっているものの、下部に土坑を伴わない。

（ＳＩ－21）

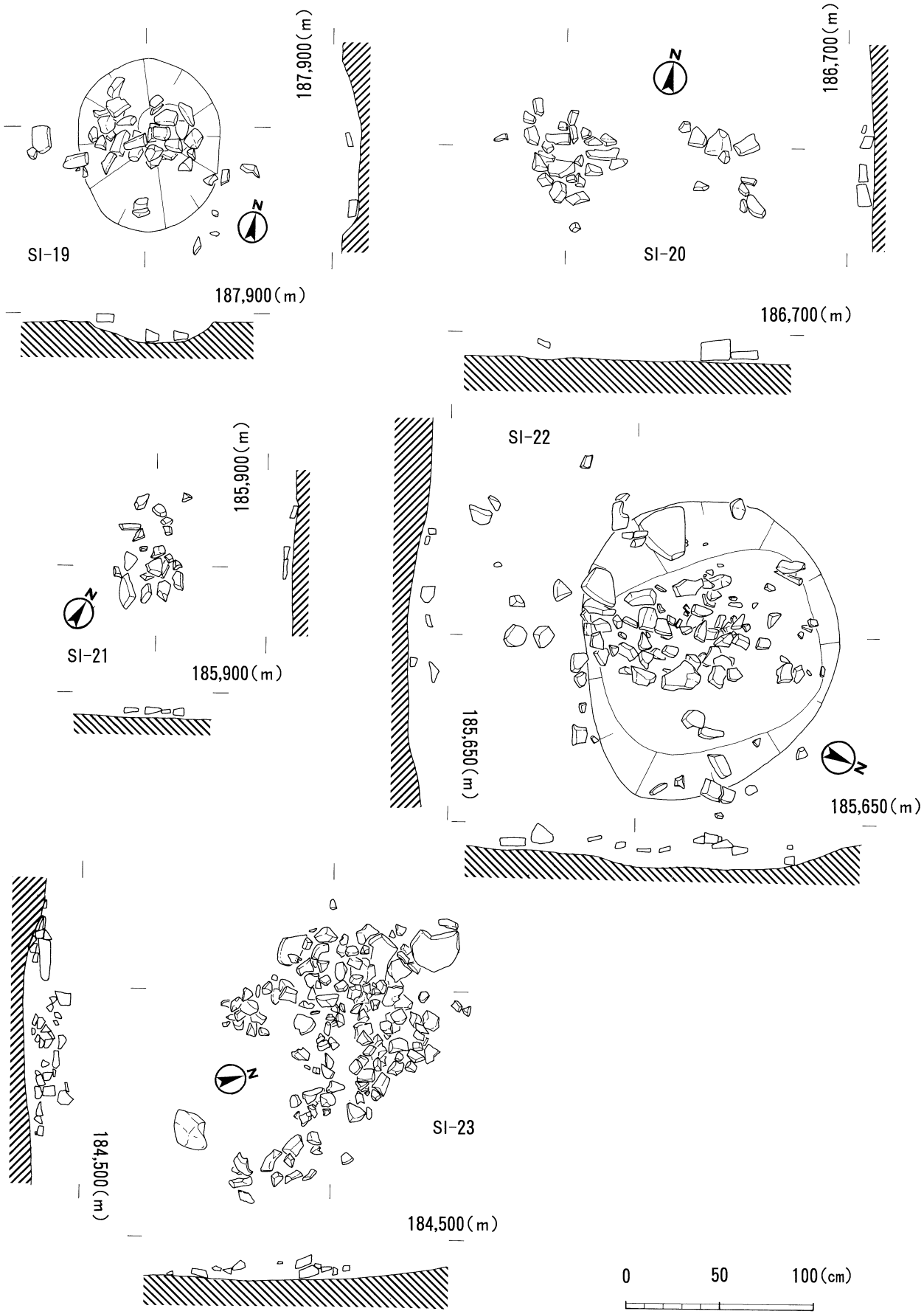
調査区の北東部より、Ⅴ層上部より検出された。ごく少数の角礫が僅かにまとまったのみの遺構であり、下部に土坑は伴わない。

（ＳＩ－22）

調査区の北東部、河川に接する地点付近より確認された遺構である。検出面はⅤ層上部であり、180㎝と広い範囲内に疎らながらもまとまりを見ることが出来る。構成する礫の大きさはまちまちである。礫を取り除くと、径約135㎝、深さ10㎝前後の不定型な土坑を確認することが出来るが、炭等の混入は認められなかった。



第13図　A区集石遺構実測図（1：30）



第14図　A区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－23）

北西部の、河川に接する地点よりＶ層上部にて検出された。この遺構もＳＩ－22と同じく大小の礫を用いた不定型なまとまりであるが、こちらの方がより密接している。礫の下部には浅い掘り込みを微かに見ることが出来るものの、輪郭が判然としなかった。

（ＳＩ－24）

調査区の北西寄りに位置し、Ｖ層上部にて検出が確認された。60㎝の範囲内に角礫の集中が見られるが、その周囲に大型の扁平な礫が散らばる点が特徴である。土坑は伴わない。

（ＳＩ－25）

調査区の中央部やや北部のＶ層中部を検出面とする遺構である。80㎝の範囲内に角礫の密集が見られ、礫の下部には不定型な土坑を伴うことが確認できる。土坑中に炭は確認されなかった。

（ＳＩ－26）

調査区の北東に当たる部分より検出された。検出面はＶ層中部である。約１ｍの円形を呈し、その範囲内に高密に角礫が存在する。遺構は90㎝×110㎝の土坑を伴うが、土坑中に礫は少なく、炭が多量に確認された。

（ＳＩ－27）

中央部よりやや北部にあり、Ｖ層中部を検出面とする。約２ｍの範囲内に角礫の密集があるが、周辺部は礫が散乱する。遺構は下部に径90㎝の土坑を伴う。礫の密集は土坑中からも確認された。

（ＳＩ－28）

調査区のやや北部にあたり、Ｖ層中部にて検出された。礫はまとまりこそ見られるものの、ほかのものに共通してみられる熱による赤変は見られず、土坑も伴わない。

（ＳＩ－29）

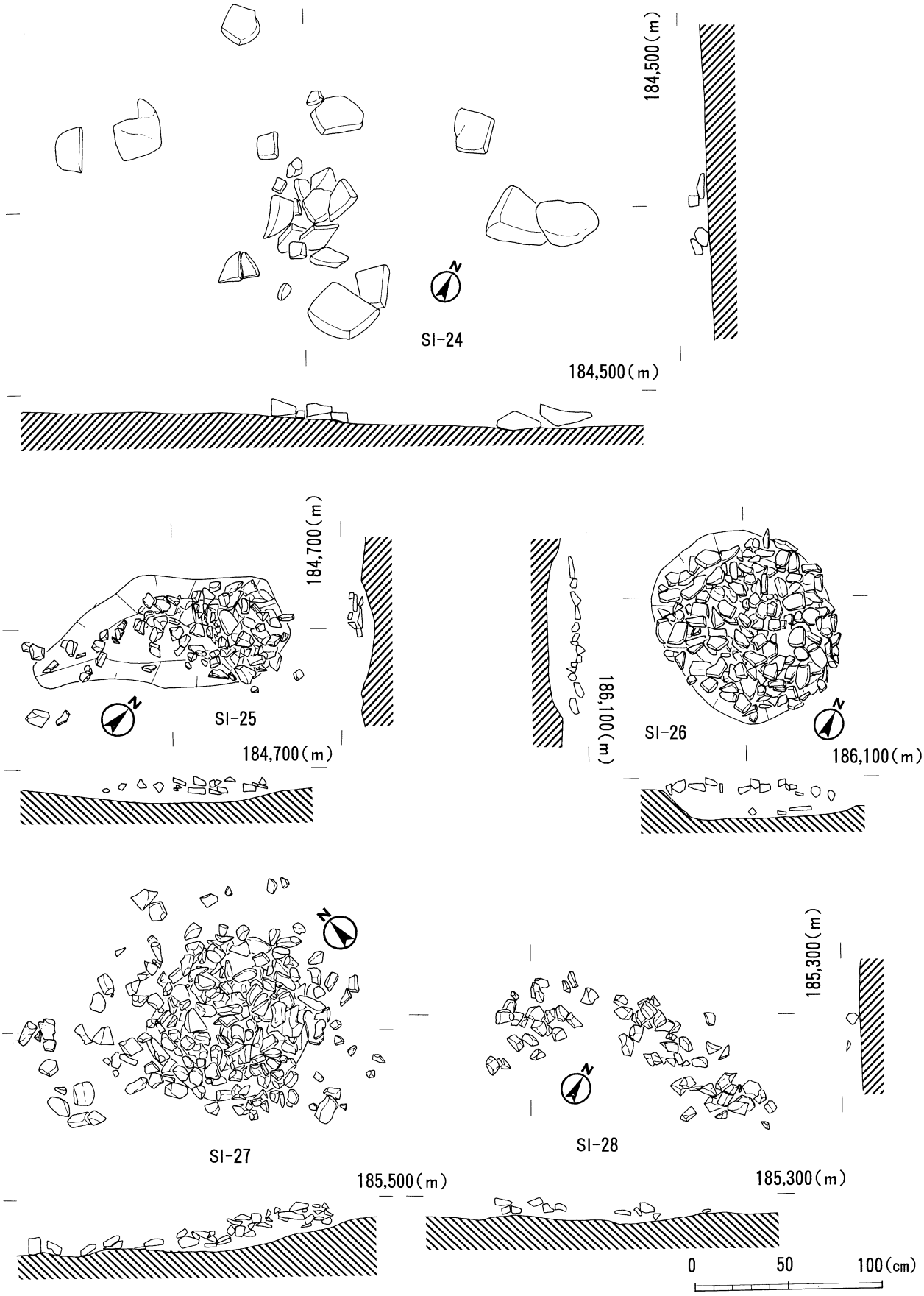
やや北部、Ｖ層中部にて検出された。礫は少量であり、まとまりに欠ける。深さ10㎝前後、径約60㎝の土坑を伴う。

（ＳＩ－30）

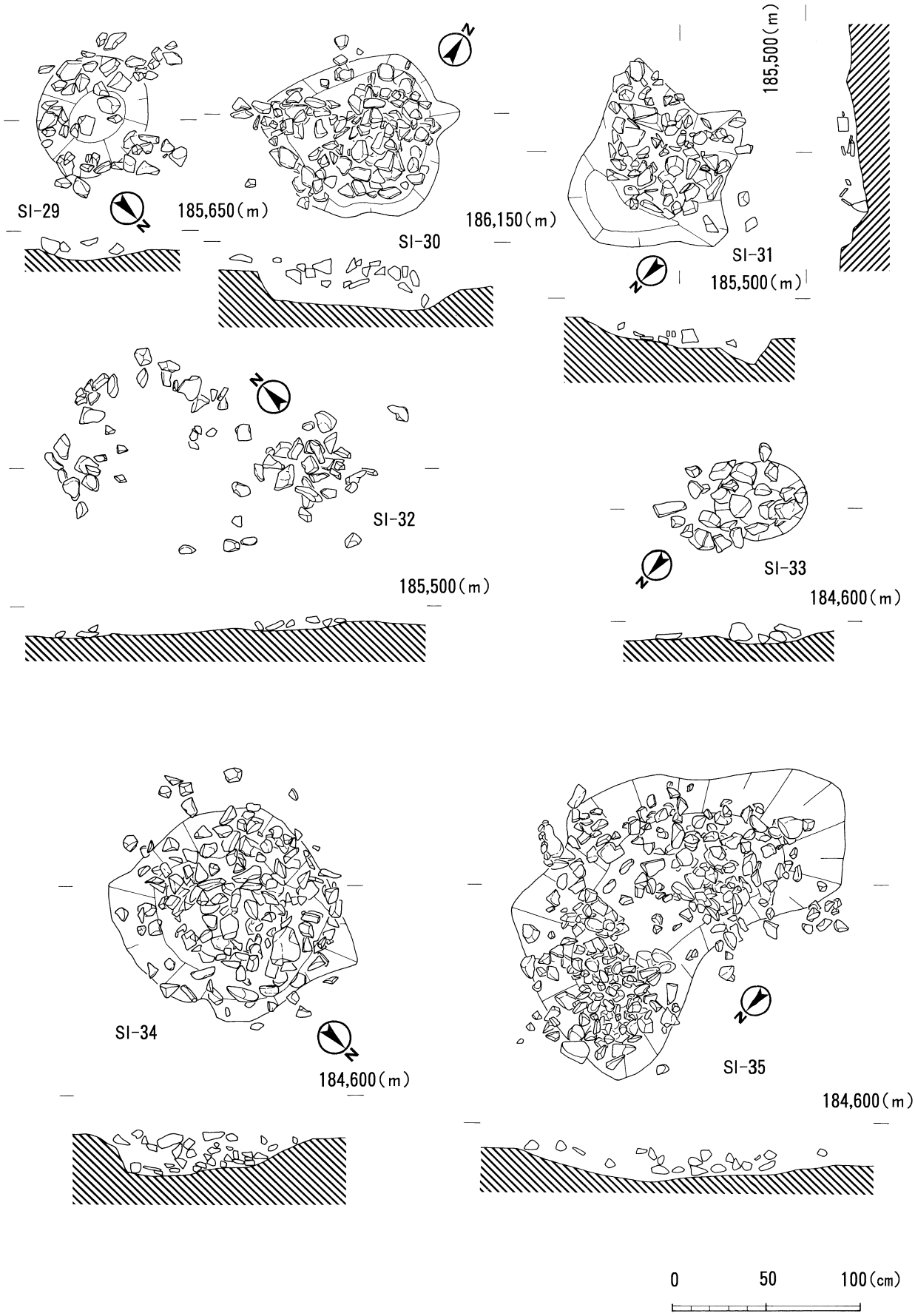
調査区の中央部より北西部に位置し、他の集石より大きく離れた地点に構築されている。110㎝の範囲内に角礫の集合があり、下部からも礫が多量に検出された。土坑もその際に確認された。不定形ながら径１ｍ前後、深さ約20㎝である。

（ＳＩ－31）

調査区の北西部、他の集石と大きく離れた地点でＶ層下部より検出された。礫の集合は土坑の検出面とほぼ同一であり、土坑の埋土中には角礫が多数混入していた。土坑の形態は不定形である。



第15図　A区集石遺構実測図（1：30）



第16図　A区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－32）

北東部の、Ｖ層中部にて検出された。遺構は東部70㎝の範囲で少数ながら礫の集合が認められ、そこから西に礫が散乱する。礫を取り除くと微かな落ち込みが見られたものの、土坑と呼ぶ程明確なものではなかった。

（ＳＩ－33）

調査区の北端より確認された遺構である。検出面はＶ層下部であり、115㎝×50㎝の範囲内に礫が集まる。礫は大ぶりの角礫が多く、50㎝×40㎝、深さ15㎝の土坑を伴うが、礫の集合は土坑中にも続いていた。

（ＳＩ－34）

調査区の北東部、Ｖ層中部より検出された遺構である。径150㎝の範囲内に礫が高密に配置される。遺構の下部には径約110㎝のやや歪な土坑が確認されたが、その内部にも夥しい量の角礫が検出された。また、埋土中からは炭も多く混入する。

（ＳＩ－35）

調査区の北東部のＶ層中部より検出された。この周辺からはこのほかにも集石遺構が多数検出された。不定型ながら、200㎝の範囲内に角礫が多く集合する。下部にはこれも不定型な土坑を伴い、埋土より礫が多く検出された。

Ｂ区（第17～21図）

（ＳＩ－01）

調査区の南西端部より検出された大型の礫群を取り除いた後に確認された。遺構検出面はＶ層下部である。径約60㎝に小ぶりの礫が密集して分布しており、径約40㎝、深さ10㎝の土坑を伴う。また、礫は土坑中からも確認されている。

（ＳＩ－02）

ＳＩ－01と同じく礫群の下位に構築されたものである。径約100㎝の範囲内に大ぶりの礫が散乱している。礫を除くと、遺構の中央部に落ち込みが見られるものの、輪郭が明瞭でない。

（ＳＩ－03）

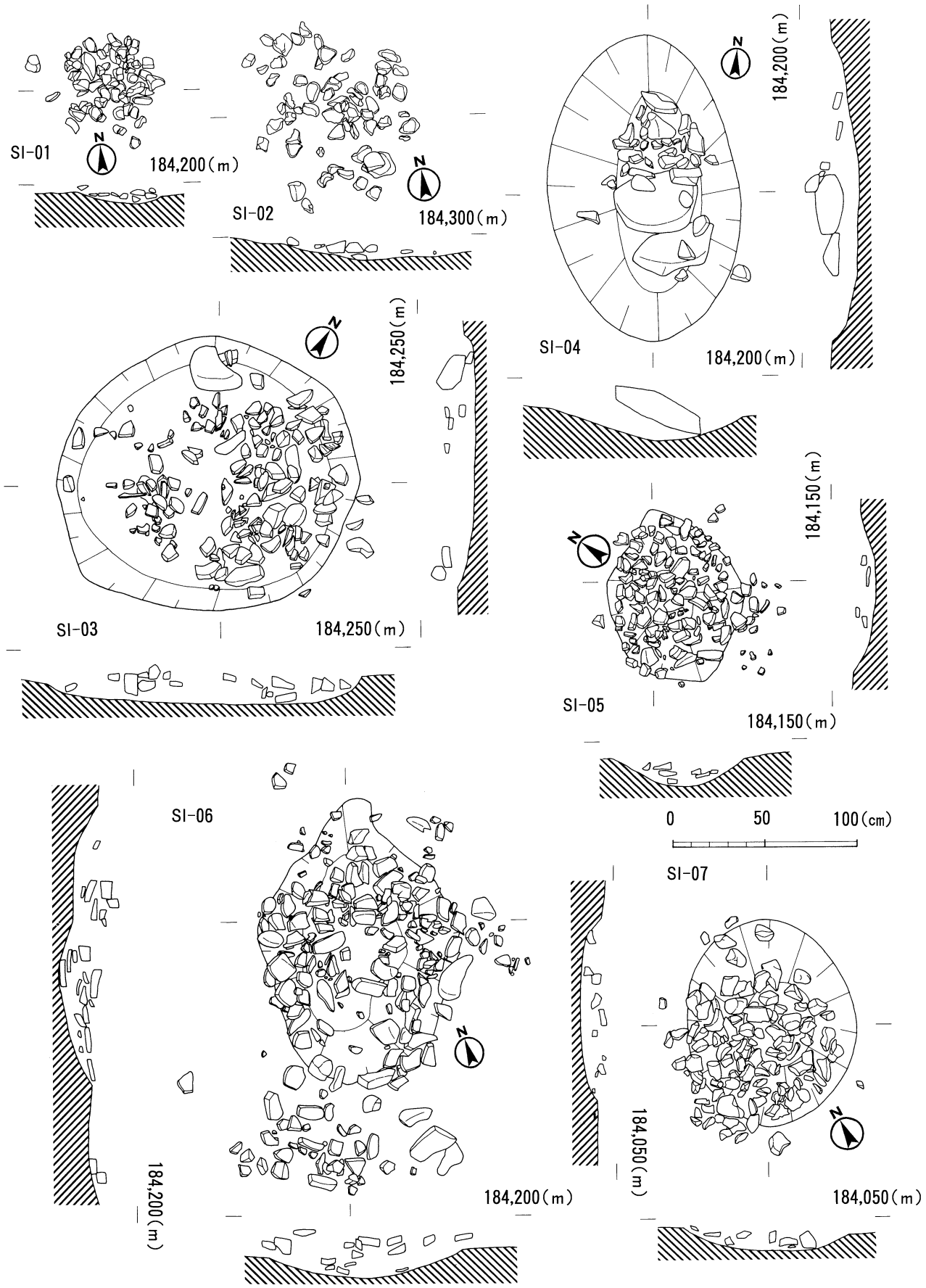
調査区南西部のＶ層上部より確認された。径約135㎝の範囲内に大小の角礫が分布する。径165㎝、深さ15㎝の土坑を伴い、土坑中にも礫の混入が見られた。

（ＳＩ－04）

調査区の西部、Ｖ層上部より確認された。100㎝×60㎝の範囲内に礫が分布する。特徴的なのは、遺構の南部にひときわ大きい扁平な礫が２個配置される点である。長軸170㎝、短軸100㎝、深さ20㎝の土坑を伴い、土坑中からは炭が少量確認された。

（ＳＩ－05）

調査区の西部より確認された遺構である。検出面はＶ層上部であり、径約90㎝の範囲内に小ぶりの破砕した礫が分布する。100㎝×75㎝、深さ15㎝の、やや歪な長円形の土坑を伴う。土坑中から礫が多く検出された。



第17図　B区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－06）

調査区の西部にて検出が確認された。遺構検出面はＶ層上部である。200㎝×150㎝の範囲内に大小の礫が分布する。Ｂ区は共通して、Ａ区と比較して角礫の割合が少なく、この遺構からも扁平な円礫が多く用いられる。150㎝×100㎝、深さ20㎝の土坑を伴い、土坑内にも礫の密集が認められる。また、炭も少量検出された。

（ＳＩ－07）

調査区西部より、Ｖ層上部を検出面として確認された。径100.㎝の範囲内より礫の集合が認められる。また、114㎝×90㎝、深さの長円形を呈する土坑を伴う。土坑中には礫が認められたが、炭の検出は微量であった。

（ＳＩ－08）

調査区のやや西よりの地点から確認された。検出面はＶ層上部である。礫の分布は径約240㎝と広汎であるが、高密な集合が認められるのはその中央150㎝である。

（ＳＩ－09）

調査区東部より確認された。検出面はＶ層上部である。径約115㎝の範囲に大小さまざまな礫が集合する。115㎝×80㎝、深さ20㎝の土坑を伴う。土坑の上部からは集石より続く礫が確認されたが、下部には炭が少量混入していたものの、礫は検出されなかった。

（ＳＩ－10）

調査区の北端、Ｖ層中部より確認された。径約90㎝の範囲内に小ぶりの角礫が分布しており、更にその周囲250㎝×150㎝の範囲に大ぶりの扁平な礫が散乱する。210㎝×110㎝、深さ15㎝の楕円形を呈する土坑を伴う。

（ＳＩ－11）

調査区北東の縁辺部より、Ｖ層中部を検出面として確認された。径約120㎝の範囲に礫が分布する。遺構下部からは66㎝の土坑が確認された。

（ＳＩ－12）

調査区南西部のＶ層下部より検出された。径約160㎝の範囲内に礫が分布する。面的に敷き詰められた状態であり、土坑等は伴わない。

（ＳＩ－13）

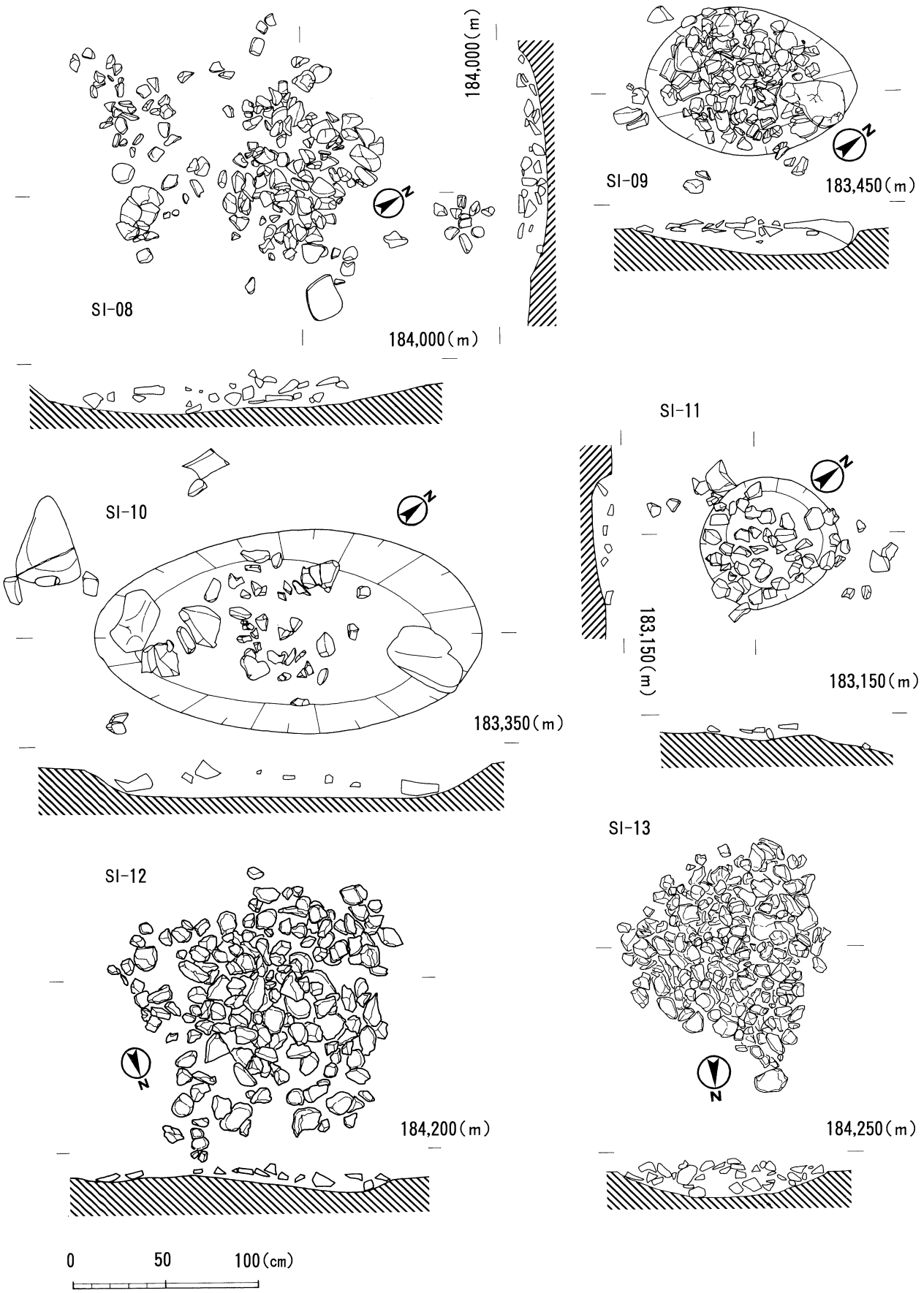
調査区南西の縁辺部にて、Ｖ層下部より検出された遺構である。底辺100㎝、高さ115㎝のに等辺三角形状の範囲に小ぶりの礫が密集しており、深さ20㎝の土坑を伴うが、その内部からも多くの礫を見ることが出来た。

（ＳＩ－14）

南西部のＶ層下部より検出された。径約100㎝の範囲内に少数の礫が分布する。土坑等は伴わない。

（ＳＩ－15）

調査区南西部、Ｖ層下部より検出された遺構であり、径60㎝と狭い範囲内に礫が密集する。径約40㎝、深さ10㎝の土坑内にも礫が密集していた。



第18図　B区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－16）

調査区南西部、Ｖ層下部より、付近の礫群を取り除いた時点で検出された。160㎝×80㎝の範囲内に礫が見られるが、礫の分布は中央部では疎らであり、周辺部にドーナツ状に固まって分布する。なお、僅かな落ち込みはあるものの、土坑としての明確な落ち込みは見られなかった。

（ＳＩ－17）

調査区のやや西寄りにて、Ｖ層より検出された。130㎝×100㎝の範囲に分布が確認できる。下部には深さ15㎝の土坑を伴う。

（ＳＩ－18）

調査区のやや西寄り、ＳＩ－17に隣り合うように検出された。130㎝×80㎝の範囲に礫が分布する。遺構下部には深さ10㎝ほどの土坑が確認されたが、覆土からも礫が多数検出された。

（ＳＩ－19）

調査区北東部、Ｖ層下部より検出された。径約100㎝の範囲内に礫の分布が見られるが、遺構周辺にも礫が散乱しており、輪郭が判然としない。また、深さ10㎝の土坑を伴う。

（ＳＩ－20）

調査区北部より、Ｖ層下部を検出面として確認された。径約90㎝の範囲に礫が分布している。礫はに面的に拡がっており、また明確な土坑に乏しい。

（ＳＩ－21）

調査区のやや北部より検出された。径約84㎝に大ぶりの礫が分布する。深さ10㎝足らずの土坑を伴うが、土坑中は礫が殆どを占める。

（ＳＩ－22）

調査区中央部よりやや北寄りあり、検出面はＶ層下部である。径約60㎝の範囲中に礫が集中する。深さ20㎝の土坑を伴い、土坑中は礫が多く入り込む。

（ＳＩ－23）

調査区北東部、他の集石遺構より大きく離れた位置にある。検出面はＶ層下部である。約70㎝の範囲内に礫が集中する。遺構下部に土坑は認められない。

（ＳＩ－24）

調査区東部より、Ｖ層下部にて検出された。径85㎝の範囲に礫が集合する。深さ15㎝の土坑を伴い、覆土中にも礫が検出される。

（ＳＩ－25）

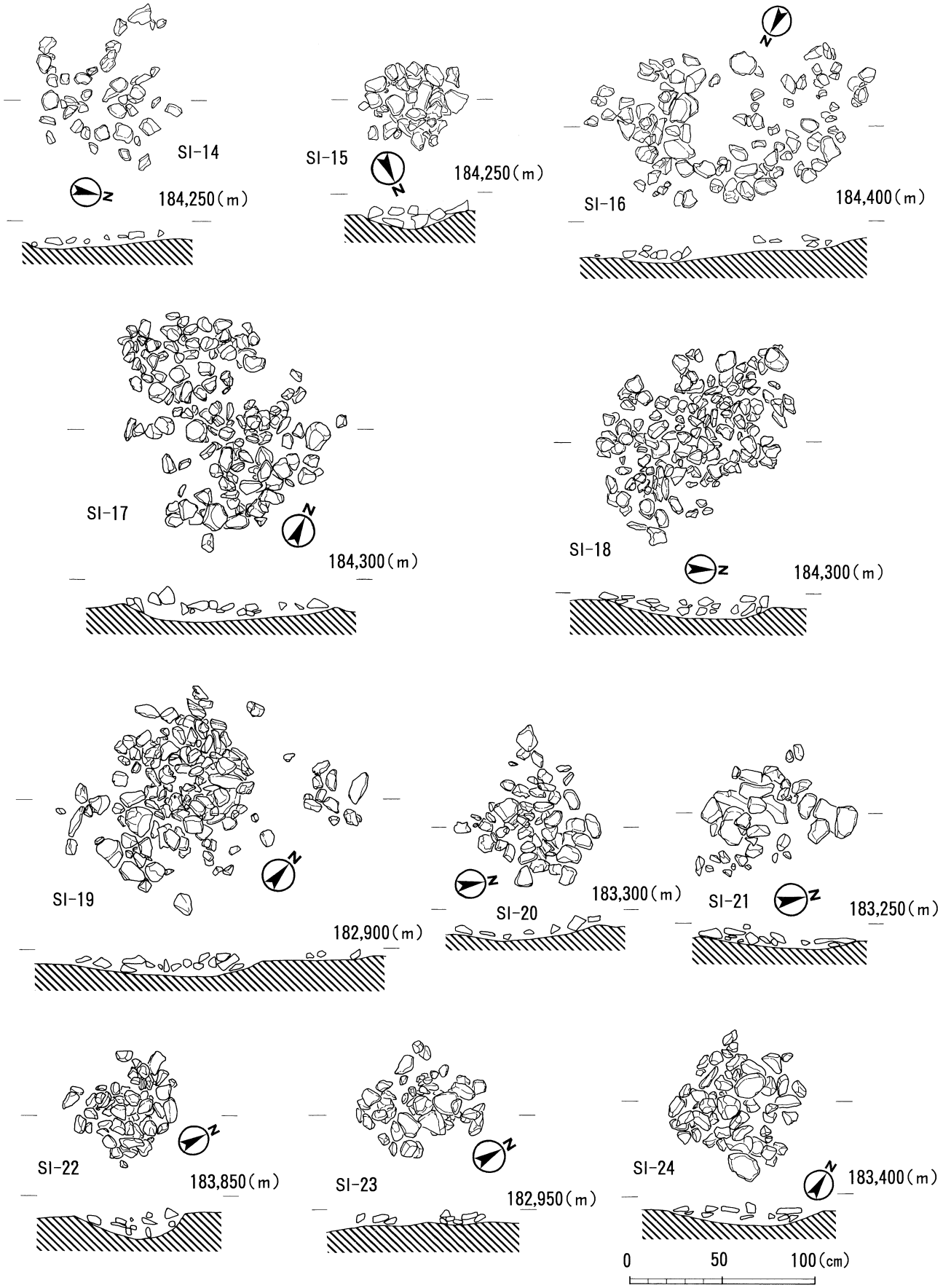
東部のＶ層下部より検出された。径約100㎝の範囲に礫が分布する。下部には僅かな落ち込みが見られるが、輪郭が明瞭でない。

（ＳＩ－26）

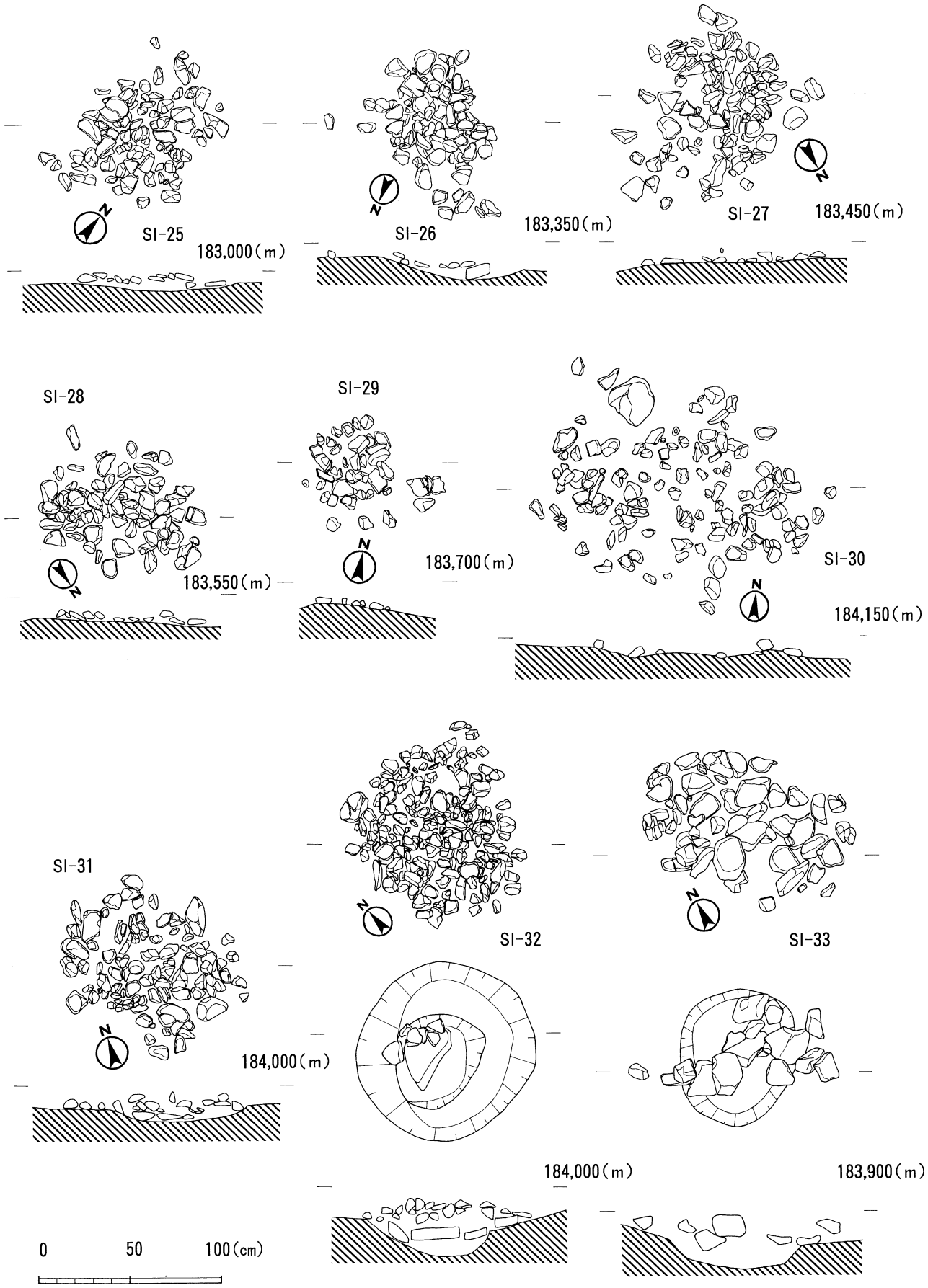
東部より、Ｖ層下部を検出面として確認された。100㎝×80㎝の範囲に礫の密集を見ることが出来る。下部には10㎝前後の土坑を伴う。

（ＳＩ－27）

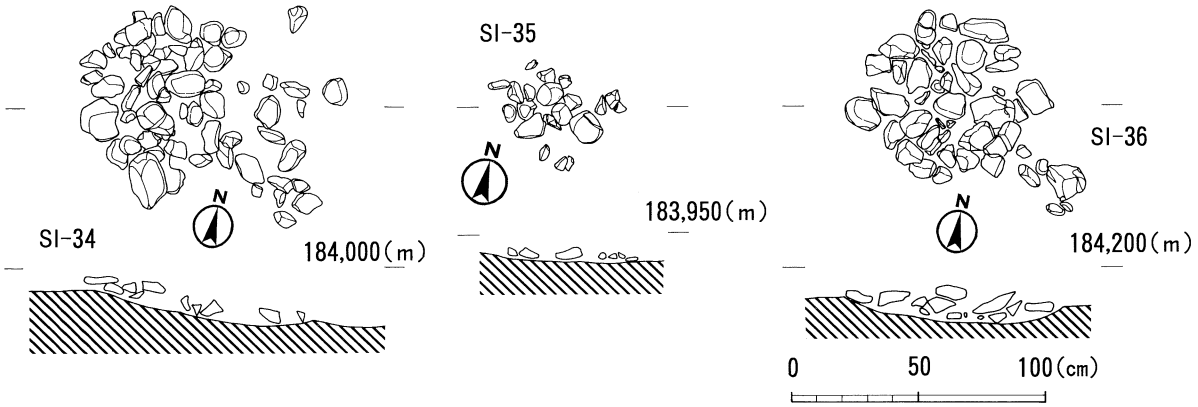
調査区の東部に当たる地点より、Ｖ層下部にて検出された。この地点は集石遺構が集中して検出さ



第19図　B区集石遺構実測図



第20図　B区集石遺構実測図（1：30）



第21図　B区集石遺構実測図（1：30）

れている。礫の分布は120㎝の範囲内であり、面的に敷かれる一方、土坑は確認されなかった。

（ＳＩ－28）

調査区の東部より、Ｖ層下部で検出された遺構である。100㎝程の範囲内に礫が面的に分布している。土坑は伴わない。

（ＳＩ－29）

東部のＶ層下部にて検出された。45㎝の範囲に少数の礫が分布している。土坑として認識すべき落ち込み等は確認されなかった。

（ＳＩ－30）

調査区の南部より、Ｖ層下部を検出面として確認された。約185㎝の範囲に礫が分布する。構成される礫は大小さまざまである。土坑は伴わない。

（ＳＩ－31）

調査区の南部の壁際に位置する。検出面はＶ層下部である。約100㎝の範囲に礫の分布が認められる。礫の集中は南側にあり、その位置には深さ10㎝程度の土坑が確認された。土坑中からも礫が検出されている。

（ＳＩ－32）

調査区の西部より、Ｖ層下部にて検出された。120㎝の範囲に礫が集中する。構成される礫は小ぶりのものが多い。下部には径１ｍ、深さ30㎝を越える土坑が確認された。土坑内に角礫が少数混入していたが、土坑の底部より大型の扁平な礫が数個検出された。

（ＳＩ－33）

調査区のやや西側より、Ｖ層下部の調査中に確認された。80㎝×130㎝の範囲内に礫が分布する。礫は大型のものが多い。下部には70㎝×80㎝の土坑を伴うが、土坑中より礫は検出されなかった。

（ＳＩ－34）

調査区の南西部、層上部には礫群が検出されたほか、集石遺構が密集する地点より、Ｖ層下部を検出面として確認された。100㎝程の範囲内に礫が分布している。礫を取り除くと僅かに落ち込みが確認されたが、輪郭が判然としなかった。

（ＳＩ－35）

小型の集石遺構である。調査区の南西部のＶ層下部を検出面とする。約40㎝の範囲内に少数の礫が分布する。土坑は伴わない。

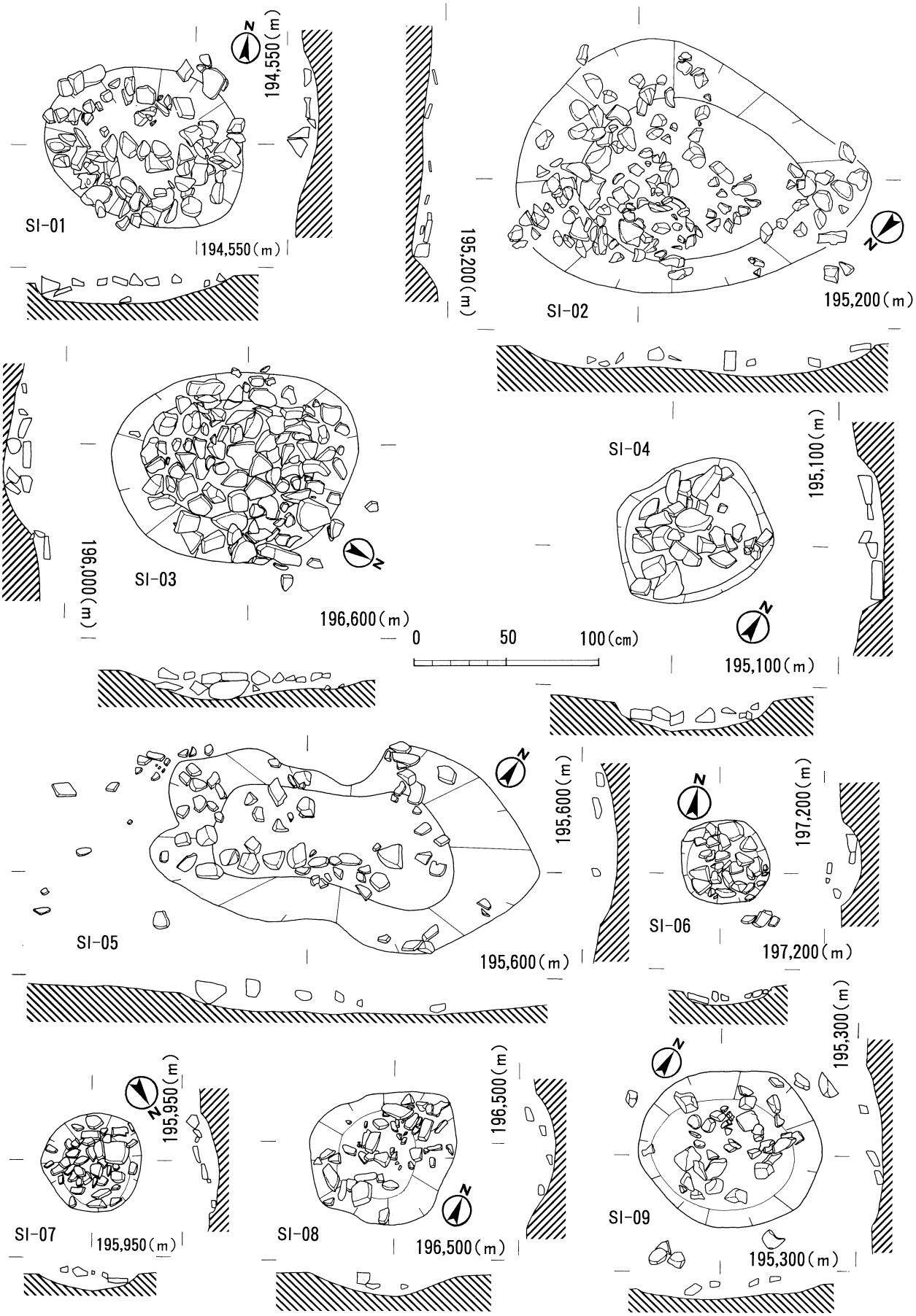
（ＳＩ－36）

調査区南西部の突出した地点より、Ｖ層下部にて検出された。約75㎝の範囲に礫が分布している。下部には深さ10㎝の土坑を伴い、土坑中から小ぶりの礫が多数検出された。

Ｃ区（第22図）

（ＳＩ－01）

調査区東部のⅣ層中部より検出された。120㎝の範囲中に大ぶりの角礫が多く分布する。下部には125㎝×100㎝の楕円形を呈する深さ15㎝の土坑を伴う。土坑中には礫は少量のみである。炭等は僅か



第22図　C区集石遺構実測図（1：30）

に認められた。

（ＳＩ－02）

調査区西部より、Ⅳ層中部を検出面として確認された遺構である。200㎝×150㎝の広い範囲内に礫が分布しているが、それは特に北東部に集中している。構成される礫は小振りのものが多い。礫の分布とほぼ同じ形態の土坑を伴う。

（ＳＩ－03）

調査区のほぼ中央部、南東部へ傾斜する地点より検出された。検出面はⅣ層中部である。径130㎝の範囲に大ぶりの角礫が多く集合する。120㎝×150㎝、深さ10㎝の土坑を伴い、土坑の検出中からも多くの礫が確認された。また、土坑中央部にはひときわ大ぶりの礫が配置されていた。

（ＳＩ－04）

調査区中央部やや南側のⅣ層下部にて検出された。85㎝程の範囲内に少量ながら扁平な礫の多い集合を見ることが出来る。径約80㎝の、やや歪んだ土坑を伴い、土坑の底部にまで礫が認められる。

（ＳＩ－05）

250㎝×100㎝の範囲内に疎らながら角礫が分布しているのが認められる。調査区北部の境界付近より、Ⅳ層上部を検出面として確認された。不定型な土坑を伴う。

（ＳＩ－06）

調査区北西部の境界付近、Ⅳ層上部を検出面として検出された。径約50㎝の範囲内に角礫の密集が見られ、下部には礫が多数確認された土坑を伴う。

（ＳＩ－07）

調査区南部の境界付近より、Ⅳ層下部にて検出された。径60㎝程の範囲に角礫が分布している。下部には礫の分布と同じ大きさの、深さ10㎝の土坑を伴うが、礫の検出は少量のみであった。

（ＳＩ－08）

調査区南西部より検出された遺構である。検出面はⅣ層下部であり、70㎝×100㎝の範囲に大小の角礫が分布するが、他の遺構と比較すると、礫のは少量である。下部には不定形の土坑を伴う。

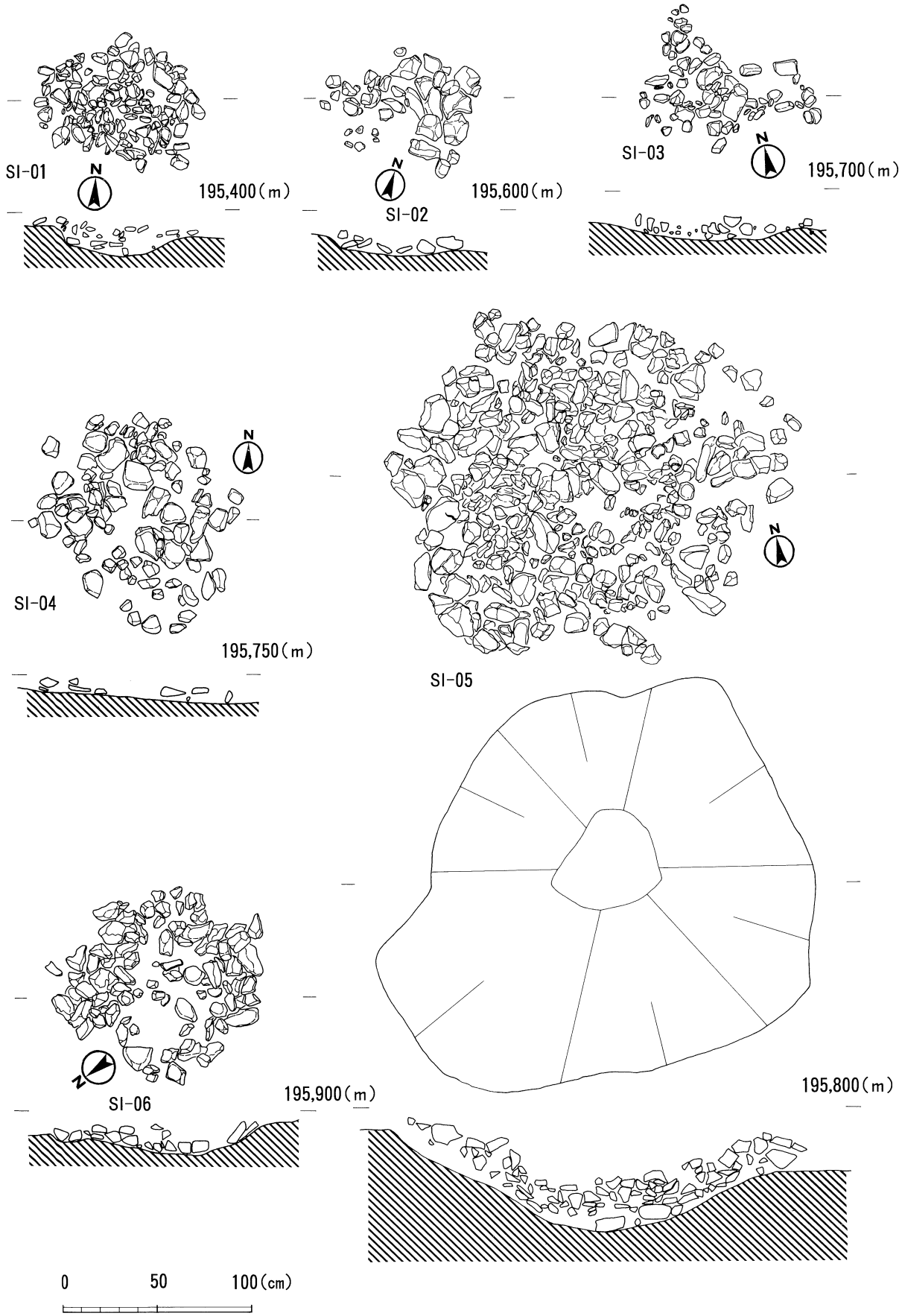
（ＳＩ－09）

調査区のほぼ中央部より検出された遺構である。検出面はⅣ層下部である。径約100㎝の不定型な土坑を伴うが、この土坑を中心として少数の礫が分布する。

Ｅ区（第23～25図）

（ＳＩ－01）

調査区西部の集石遺構の群集する中では最も東側にあたる。検出面はⅣ層中～下部100㎝×70㎝の範囲内に小ぶりの角礫が分布する。下部には深さ20㎝を越える、礫の密集した深い土坑を伴う。



第23図　E区集石遺構実測図

（ＳＩ－02）

集石遺構の群集するグループの東部、Ⅳ層中～下部を検出面とする。用いられる角礫は大ぶりのものが目立つ。径約70㎝の範囲内に礫の分布が見られ、下部には10㎝未満の浅い土坑を伴う。

（ＳＩ－03）

集石の群集からは東部に位置し、Ⅳ層中～下部を検出面として確認された。80㎝×110㎝の範囲に不定型ながら小型の角礫が分布する。下部には輪郭の判然としない深さ10㎝程の土坑を伴うが、土坑検出中も覆土より破砕したようた小ぶりの礫が多量に検出された。

（ＳＩ－04）

ＳＩ－03と同じく東部にあり、Ⅳ層中～下部にて検出された。径約120㎝の範囲に角礫がやや疎らながら分布する。下部に土坑は伴わない。

（ＳＩ－05）

本遺跡中最大の集石遺構である。Ｅ区の中央部、集石遺構のグループからは東側に構築される。径約200㎝の範囲に大小の角礫が密集する。遺構は周縁部が最も高く中心部で大きく凹む。下部には径約220㎝のやや歪な土坑を伴う。この土坑の深さは40㎝であり、覆土にも礫が密集していた。土坑の床面付近から検出された礫は、上部に配置される礫よりも大ぶりのものが多い。他にも覆土中からは炭も多く確認されている。

（ＳＩ－06）

集石グループのやや東側、上層から検出された礫群―１の東端にあたる地点より検出された。検出面はⅣ層中～下部である。深さ10㎝を超える土坑を伴っており、土坑中も礫が多く混入していた。

（ＳＩ－07）

集石の群集からはやや東側にあり、Ⅳ層中～下部より検出された。100㎝×150㎝の範囲内にやや疎らながら角礫が分布する。深さ10㎝足らずの土坑を伴うが、土坑中からの礫の検出は少量のみに留まった。

（ＳＩ－08）

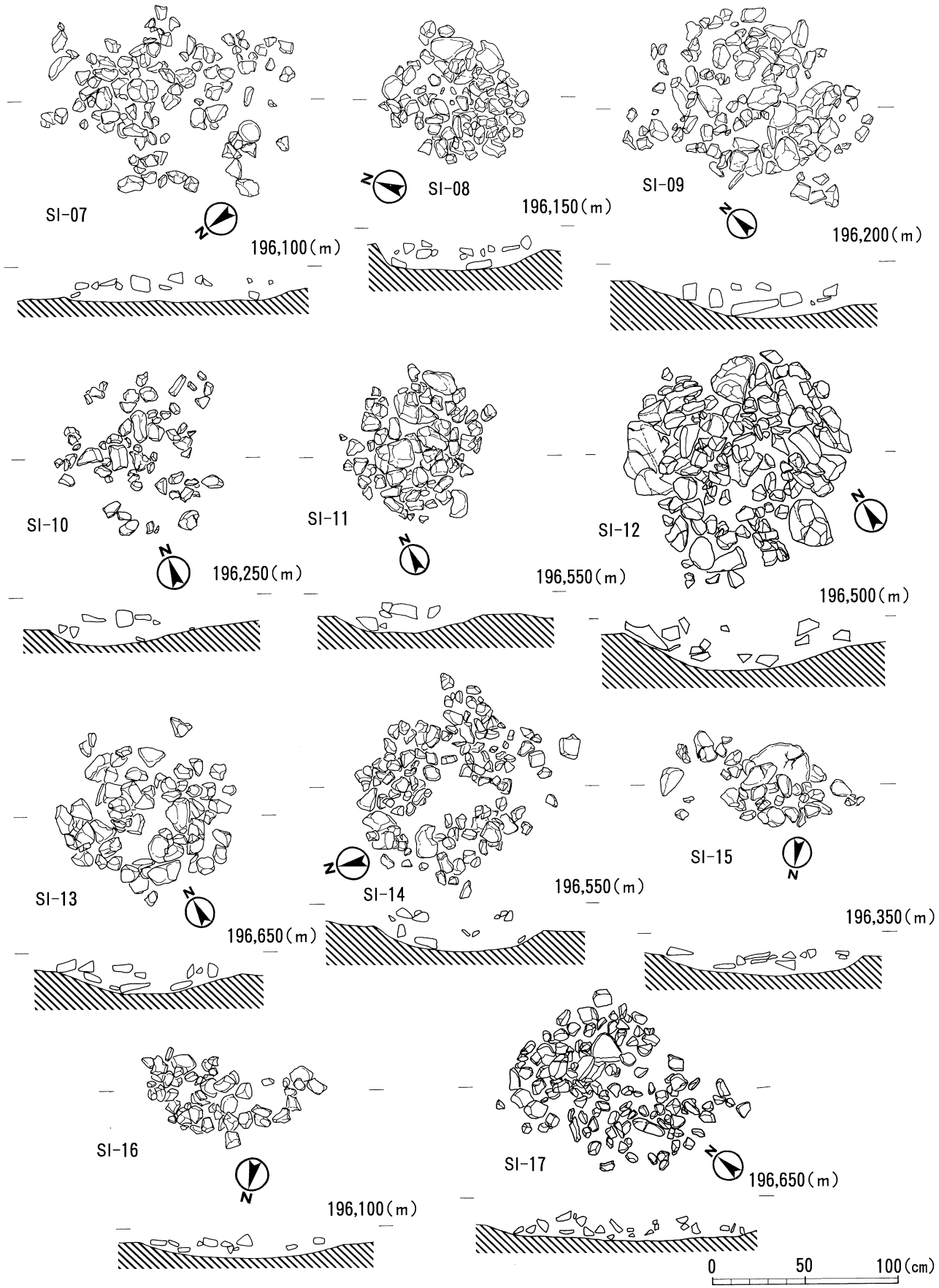
集石の群集地からは東南部にあたる。検出面はⅣ層中～下部であり、径85㎝の範囲より礫の集中が見られる。下部からは深さ20㎝近くの土坑が確認され、覆土にも多くの礫が混入していた。

（ＳＩ－09）

集石遺構のグループの中では南側に位置し、Ⅳ層中～下部より検出された。100㎝×150㎝の範囲に礫が分布する。下部には深さ15㎝の土坑を伴うが、土坑覆土中にも礫が多く検出された。殊に中央部床面付近には、扁平な礫の配置が確認された。

（ＳＩ－10）

集石遺構のグループ中ではやや東側に属するⅣ層中～下部より検出された遺構である。径約95㎝の範囲内にやや疎らながら礫が分布する。深さ約15㎝の土坑を伴う。



第24図　E区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－11）

集石遺構の群集のほぼ中央部に位置しており、Ⅳ層中～下部を検出面とする。約90㎝の範囲内に礫が密集する。下部には深さ15㎝の土坑を伴い、覆土中からも多量の礫が検出された。

（ＳＩ－12）

集石遺構のグループからは南側にあたる。上層の礫群―１を取り除いたⅣ層中～下部にて検出された。径140㎝の範囲に礫が集中しているが、周縁部に大ぶりの礫が用いられ、中央部の礫は小ぶりであったり、破砕したりしている。下部には深さ20㎝を超える土坑を伴うが、礫はその覆土からも多く検出されている。

（ＳＩ－13）

集石遺構の群集の中央部付近にあり、検出面は他のものと同じくⅣ層中～下部である。径約90㎝の範囲内に角礫が分布する。深さ15㎝の土坑を伴い、覆土からも礫が多量に検出された。

（ＳＩ－14）

集石遺構のグループの中央部寄り、Ⅳ層中～下部を検出面とする。径約130㎝の範囲内に角礫が集合するが、礫は特に周縁部に多く、中心部には空洞状である。下部に土坑を伴うが、土坑中からも多数の礫が確認されている。

（ＳＩ－15）

集石遺構の群集からは南部にあたるⅣ層中～下部より検出された。径約80㎝の範囲に礫の集合が認められるが、礫は一部周辺にも散乱している。深さ20㎝足らずの土坑を伴い、礫はそこからも検出されている。また、用いられる礫は板状のものが多いのも特徴である。

（ＳＩ－16）

集石遺構群の南部、Ⅳ層中～下部より検出された。50㎝×100㎝の範囲に礫が分布する。礫を取り除くと僅かな落ち込みが認められるが、輪郭が判然としない。

（ＳＩ－17）

集石遺構群の中央部よりやや北側、他の集石遺構より離れた位置にある。検出面はⅣ層中～下部であり、140㎝×100㎝の中に礫が分布する。下部には明確な土坑は確認されなかった。

（ＳＩ－18）

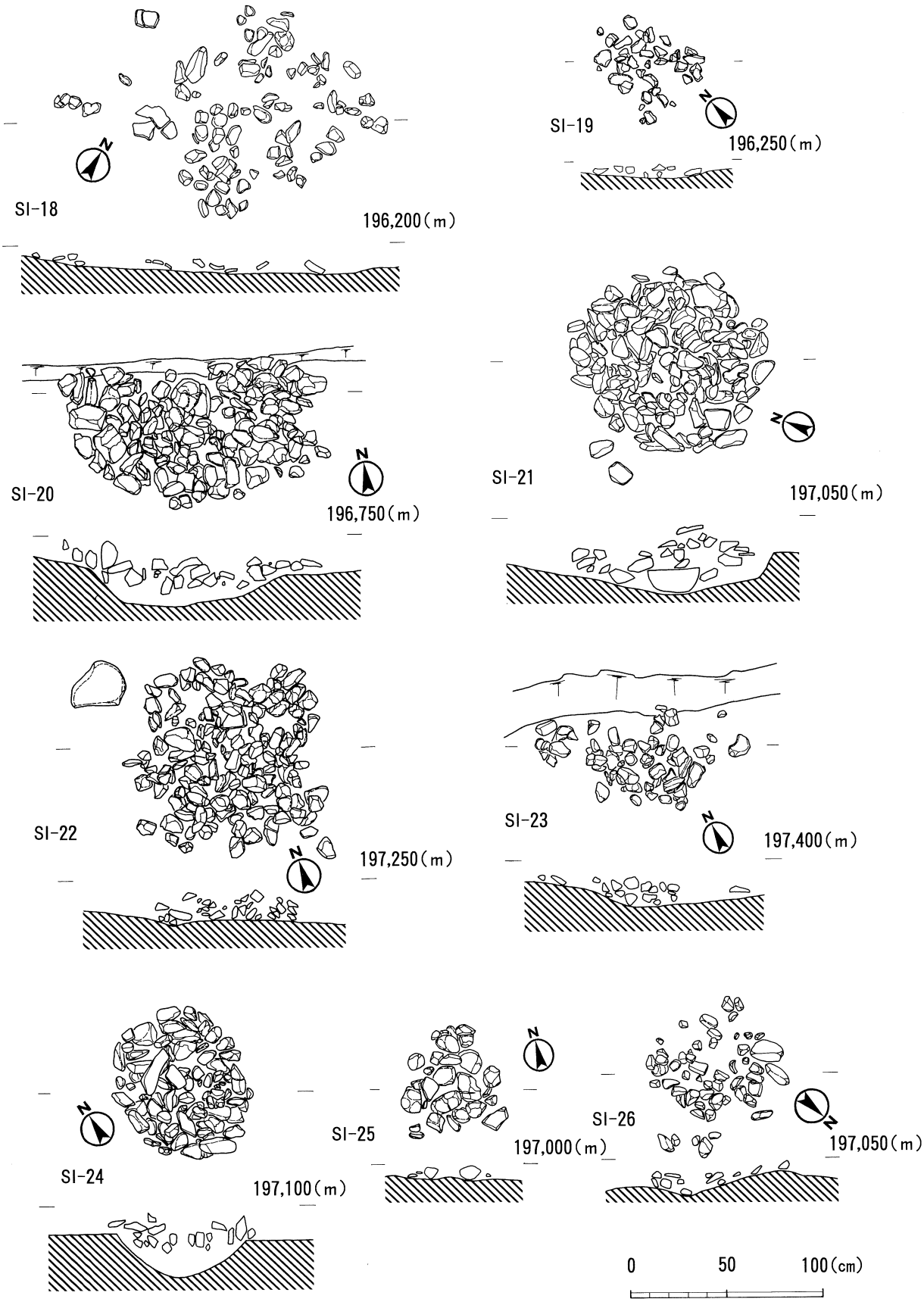
集石遺構群の北部より、Ⅳ層中～下部にて検出された。径約180㎝の範囲内に疎らながら角礫の分布が認められる。土坑は伴わない。なお遺構内から、外面に条痕が施文された、円筒状の器形を持つ土器片が検出された。

（ＳＩ－19）

集石遺構の群集の北部、調査区の境界部近くで検出された。径約60㎝の範囲に小ぶりの角礫が分布する。下部には僅かな落ち込みがあるものの、明瞭な輪郭は確認できなかった。

（ＳＩ－20）

集石遺構群の北西部より、Ⅳ層中～下部にて確認された。境界部であったため、南半分しか検出できなかった。径約150㎝の範囲内に角礫の密集が見られる。下部には深さ20㎝の土坑が検出され、覆土からも多くの礫が確認されたが、床面付近に礫は見られず、炭が検出されたのみであった。



第25図　E区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－21）

集石遺構の群集からは西側にあたる。遺構検出面はⅣ層中～下部であり、径100㎝の範囲に高密な礫の分布を見ることができる。下部には深さ20㎝を超える土坑を伴い、その検出中にも礫が多量に検出された。床面付近からは一際大型の礫が配置されていた。

（ＳＩ－22）

集石遺構の群集のうち西側にあたる。検出面はⅣ層下部であるが、礫は多くが浮き上がっており、本来ならば他の集石遺構と同じⅣ層中～下部であったと推測される。径約100㎝の範囲中に礫が分布する。また、遺構北西部には扁平な礫が配置されている。土坑は確認されなかった。

（ＳＩ－23）

検出された集石遺構の中で最も西側の、Ⅳ層中～下部で検出された。調査区の境界付近であったため、遺構の一部は調査できなかったが、径約100㎝の範囲内に礫が分布する、円形の遺構であったと考えられる。下部には土坑を伴っており、礫の混入が確認された。

（ＳＩ－24）

集石遺構のグループからは西部にあたる。検出面はⅣ層中～下部であり、径約85㎝の範囲に礫が密集していた。下部には深さ25㎝となる、断面がボウル状の土坑を伴うが、礫の検出は上部のみであり、下部からは炭が多く混入していた。

（ＳＩ－25）

集石遺構群の西側にあたる、Ⅳ層中～下部より検出された。径60㎝の範囲内に、少量ながら礫の分布が認められる。土坑は伴わない。

（ＳＩ－26）

集石遺構のグループ西側、上層に礫群―２の検出された地点にあたる。検出面はⅣ層中～下部であり、径85㎝の範囲に小ぶりの礫が分布する。礫を取り除いた時点で落ち込みを認め、不定型な深さ10㎝前後の土坑を伴うことが分かった。

Ｆ区（第26，27図）

（ＳＩ－01）

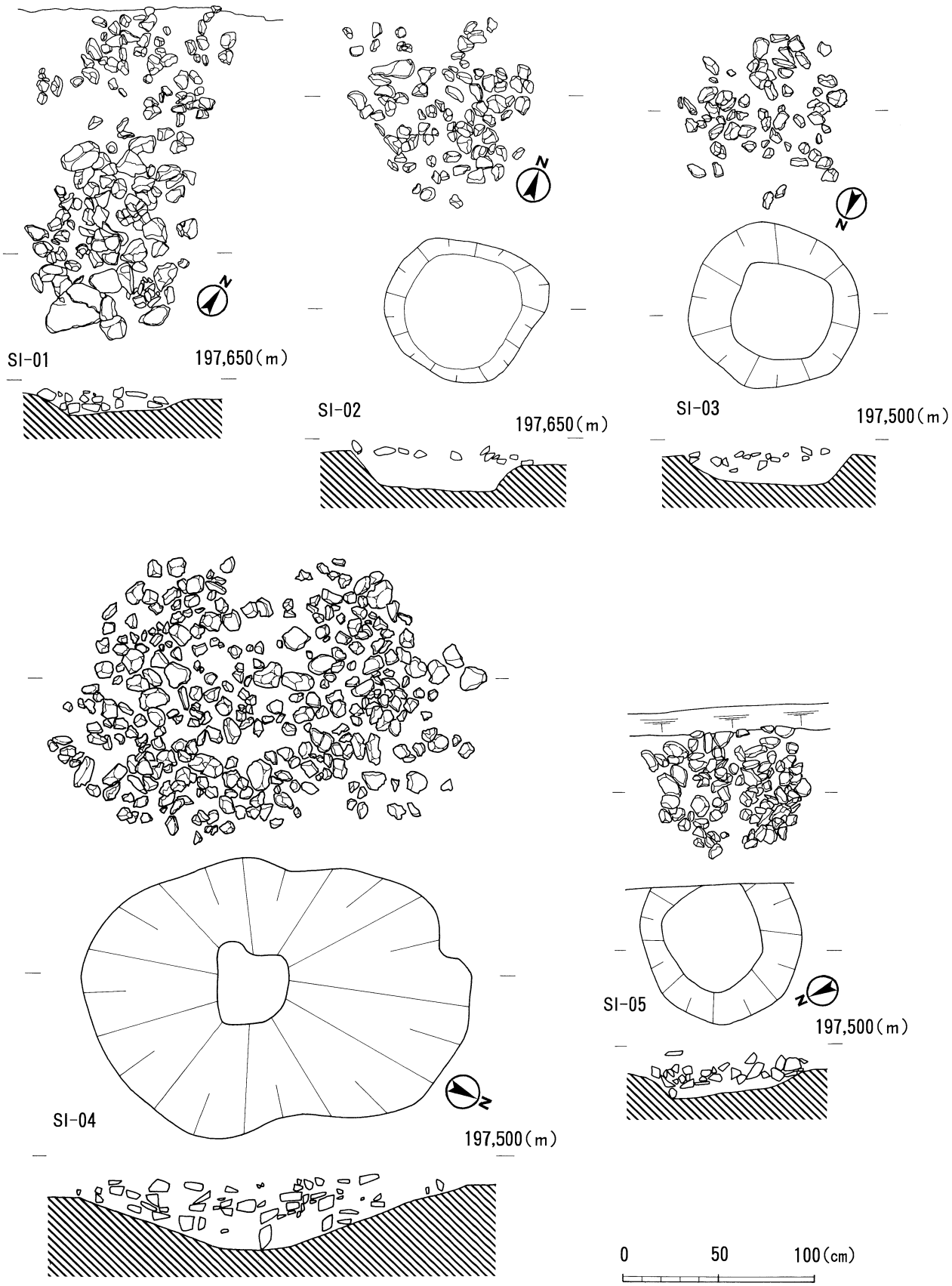
調査区北部のⅣ層中部より検出された。径約90㎝の範囲に礫の密集が認められるが、西部の境界に向かい礫が散乱する。密集地の下部には深さ10㎝を超える土坑が確認され、その覆土からも礫が多く検出された。

（ＳＩ－02）

調査区北部にて、Ⅳ層中部より検出された。径約100㎝の範囲内にやや疎らながら角礫が分布する。径約85㎝、深さ15㎝の土坑を伴うが、覆土中には炭が少量確認されたのみで礫は混入されなかった。

（ＳＩ－03）

調査区の南東部の境界部、Ⅳ層中部より検出された。径約100㎝の範囲内にやや疎らながら礫が分布している。下部には径約90㎝、深さ15㎝程の土坑を伴い、覆土から多くの礫が検出された。



第26図　F区集石遺構実測図（1：30）

（ＳＩ－04）

調査区南東部で検出された、礫群―１を取り除いたⅣ層下部より検出された。250㎝×170㎝の範囲内に礫の密集が認められる。下部には礫の密集とほぼ同じ形態の土坑を確認することが出来、Ｅ区ＳＩ－05と同じくロート状の断面を呈す。覆土からも礫の密集が確認された。

（ＳＩ－05）

調査区東側にて検出された。検出面はⅣ層下部である。遺構は調査区の境界にかかっており、全体の形態は判別しづらいが、径約90㎝の円形を呈していたものと考えられる。下部には集石部とほぼ同じ大きさの、深さ10㎝を超す土坑が確認され、覆土からも礫が多く検出された。

（ＳＩ－06）

調査区の南東部より、Ｖ層上面を検出面として確認された遺構である。径約90㎝の範囲内より大小の礫が分布する。礫は周縁部のものほど大きく、中心部に向かうほど小振りのものが多い傾向にある。下部には不定型な深さ10㎝の土坑を伴い、土坑内からは礫が多く検出された。

（ＳＩ－07）

調査区の南部のＶ層上面より検出された。径約120㎝の範囲内に角礫の密集が見られる。下部に不定型な、深さ25㎝の土坑を伴っており、土坑の調査中も多くの礫が検出された。

（ＳＩ－08）

調査区の南部、Ⅳ層下部を検出面として確認された。径約100㎝の範囲に礫が分布するが、一部北側に向けて礫が散乱する。下部には不定型な深さ10㎝未満の土坑を伴うが、土坑中から礫は検出されなかった。

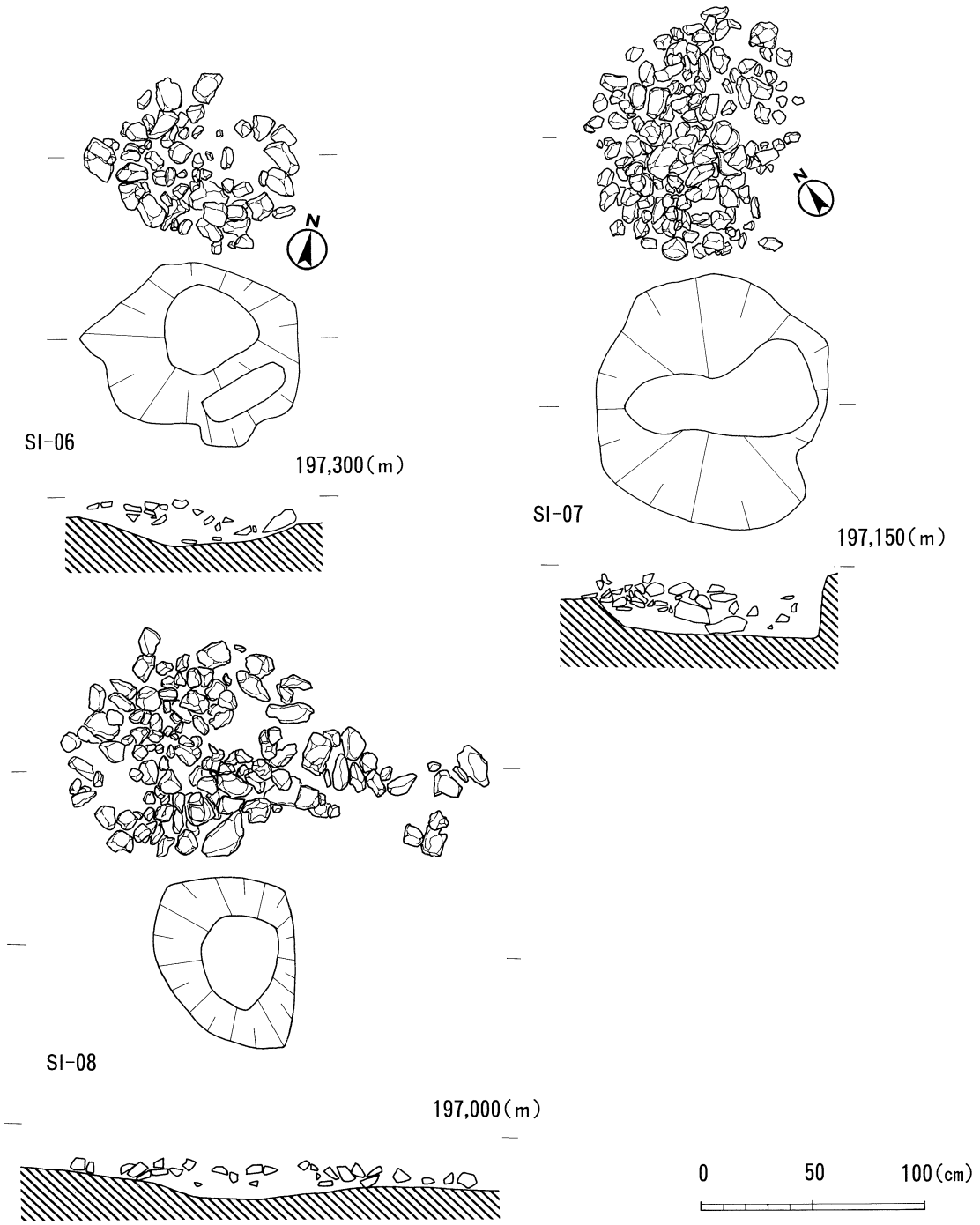
土坑（第28図～30図）

（Ａ区ＳＣ－１）

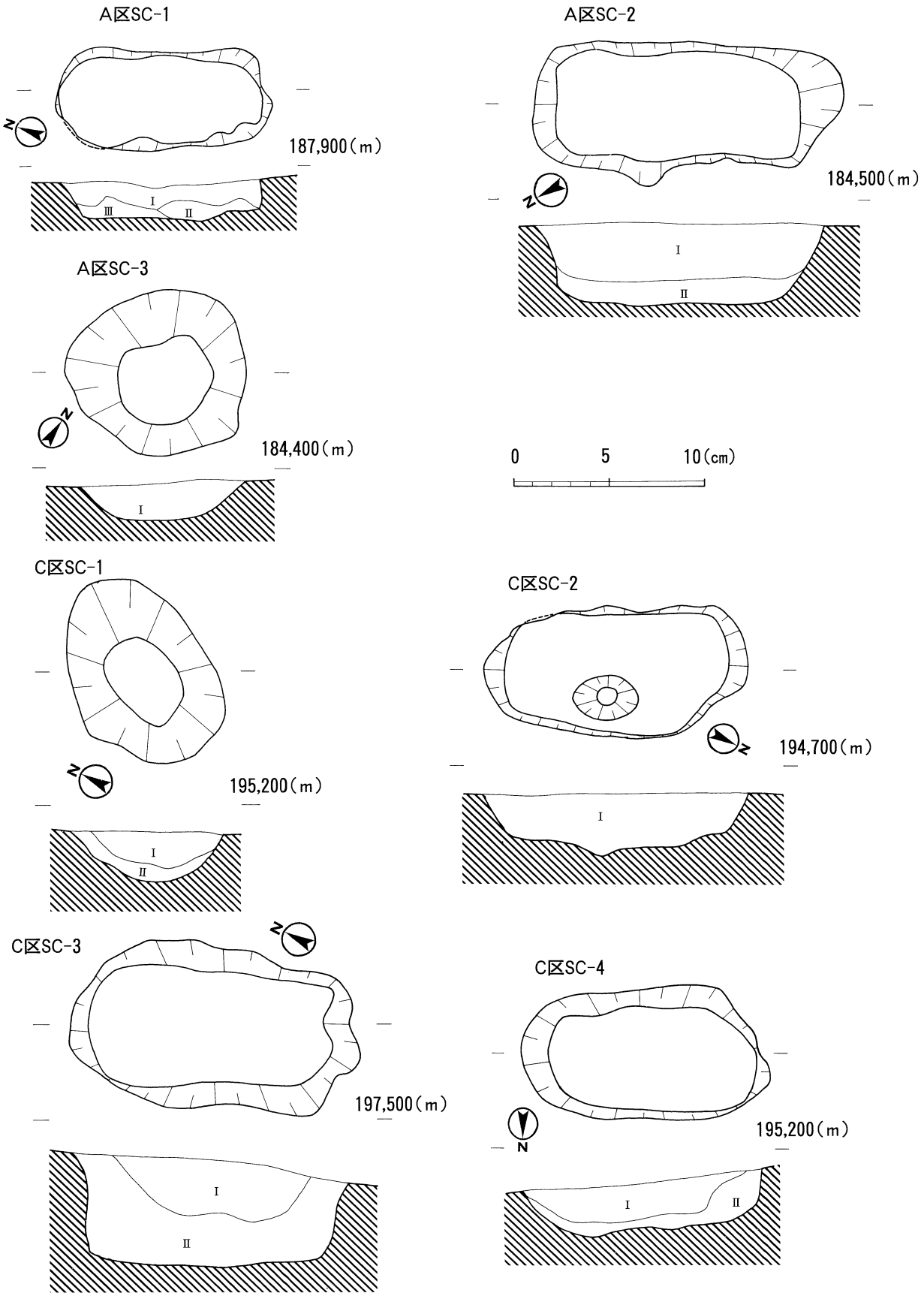
調査区中央やや東側の、Ⅳ層上面にて検出された。長軸125㎝、短軸55㎝の長円形を呈す。検出面から高い傾斜で床面に達する。深さは18㎝と浅い。床面に大きな凹凸は認められない。覆土Ⅰ層は砂粒と黄橙色の軽石が高密に混入する。Ⅱ層はⅠ層とⅢ層の漸移層であり、Ⅲ層は粘質を伴う明黄褐色の層である。Ⅲ層からは炭と共に焼礫が３個検出された。遺構と壁面及び床面の境界は極めて明瞭であるため、近世以降のものと考えられる。

（Ａ区ＳＣ－２）

調査区北部、集石遺構が密集する地点のＶ層上部より検出された。長軸175㎝、短軸70㎝の、やや歪んだ長円形を呈す遺構である。深さは約50㎝、床面は平坦である。覆土はⅠ層が黒褐色の硬質な層であり、今回の調査でⅣ層と設定した層である。Ⅱ層はその漸移層である。床及び壁面との境界は明瞭とは言い難い。なお、図面に記した点は遺物が出土した地点である。出土した石器は砂岩製であり、打面調整を密に行う。



第27図　F区集石遺構実測図（1：30）



第28図　土坑実測図（1：30）

（A区ＳＣ－３）

調査区の北部より、Ⅴ層上部にて検出された遺構である。やや不定形ながら、径約100㎝の円形に近く、土坑の断面はボウル状であり、平坦な床面を形成しない。覆土はＳＣ―02と同じくⅣ層であり、他層の堆積を観察することはない。遺物等は確認されなかった。

（C区ＳＣ－１）

調査区の南東部の傾斜地付近より、Ⅴ層中部にて検出された。長軸115㎝、短軸75㎝の楕円形を呈する。深さは約30㎝、土坑の断面形はボウル状であり、明確な床面を持たない。覆土のⅠ層は褐色の堅く締まった層である。粘性は殆ど認められない。Ⅱ層は粘土質になっており、色調はⅠ層よりも白味を帯びる。遺物や混入物は認められなかった。

（C区ＳＣ－２）

調査区の西部、Ⅴ層中部にて検出された。長軸150㎝、短軸75㎝のやや歪な楕円形である。土坑は急な傾斜を保ったまま深さ30㎝で床面に達している。床面は平坦に近いが、遺構東部に25㎝×35㎝の楕円形の落ち込みを確認することができる。覆土はＳＣ－１Ⅰ層と全く同じであり、またそれ以外の土層は確認できなかった。

（C区ＳＣ－３）

調査区の西端部に位置し、Ⅴ層中部を検出面とする。形態は長軸165㎝、短軸95㎝のやや歪な楕円形を呈する。遺構は約60㎝で平坦を保った床面に至る。覆土のⅠ層、Ⅱ層はそれぞれＳＣ－１のⅠ層、Ⅱ層と同一である。断面を見る限り、土坑の構築時の生活面は更に上層であったと考えられる。

（C区ＳＣ－４）

調査区の東側にあり、これもⅤ層中～下部を検出面とする。長軸145㎝、短軸75㎝のやや歪んだ長円形をていしており、床面までの深さは２５㎝である。覆土のⅠ層はＳＣ－１と同じであるが、Ⅱ層の色調は黒褐色であり、大変固く締まっている。調査区のⅤ層の土質に近い。

（E区ＳＣ－１）

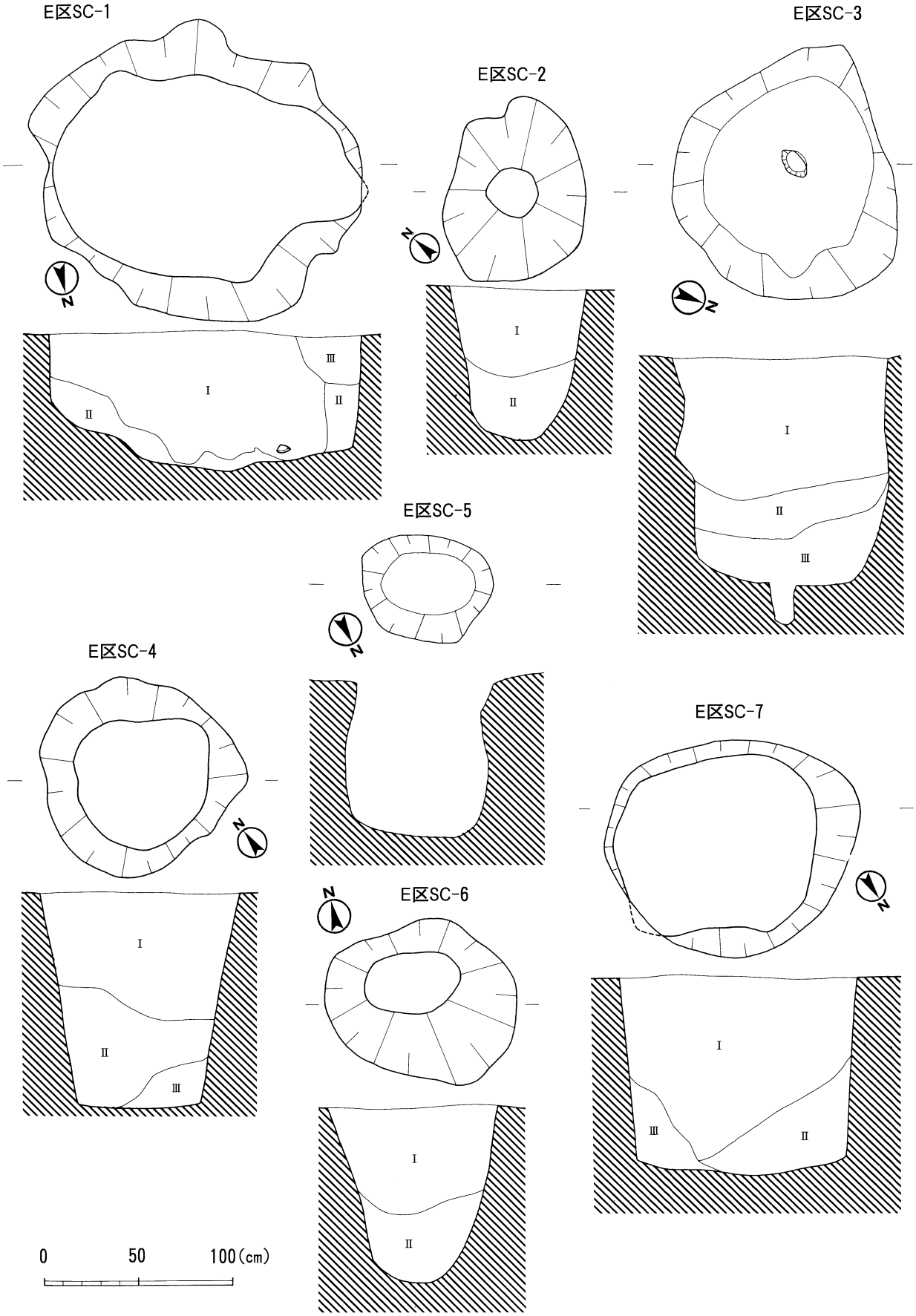
調査区の東側にある遺構であり、やや不定形ながら径約210㎝の円形に近い形態である。Ⅳ層上位を検出面とする。ほぼ垂直に掘り込まれており、検出面から70㎝のところに床面があるが、床面にはやや凹凸が見られる。覆土Ⅰ層は明黄褐色のアカホヤ火山灰（二次堆積層）である。Ⅱ層はⅠ層と壁面が混入した層である。Ⅲ層は近世以降の掘り込みである。床面付近から礫が１点確認されたが、遺物の混入はなかった。

（E区ＳＣ－２）

集石遺構の集中する地点の中でもほぼ中央に位置し、検出面はⅣ層上位である。やや歪ながら、長軸110㎝、短軸75㎝の楕円形を呈し、検出面から床面にかけて窄まりながら落ち込み、約80㎝で床面に達する。床面は球状であり平坦面を持たない。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積層）であり、Ⅱ層も褐色の火山灰層である。層中には白色粒及びガラス質粒子を少量含む。

（E区ＳＣ－３）

調査区の東部にあり、Ⅳ層上面を検出面とする。形態はやや歪んだ円形を呈しており、径は約140㎝である。遺構は湾曲しながらも概して垂直に掘り込まれ、120㎝で平坦な床面に達する。なお、平



第29図　土坑実測図（1：30）

坦部の中央には径10㎝前後、深さ25㎝の落ち込みが見られる。覆土Ⅰ層は他の遺構と同じくアカホヤ火山灰（二次堆積）である。Ⅱ層は鈍い黄褐色の軟質層であり、ガラス質粒子を含むことから、これも火山灰であると考えられる。Ⅲ層はシルト層であり、Ⅰ層、Ⅱ層と比較し硬質であり、粘性を帯びる。

（E区ＳＣ－４）

調査区の北寄り、礫群―１に隣接する位置にあり、Ⅳ層上部にて検出された。形態はやや歪ながら径110㎝の円形であり、やや窄まりながら深さ110㎝の平坦な床面に向かって直線に掘り込まれる。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）であり、Ⅱ層は褐色の火山灰層、Ⅲ層はシルト層である。床面付近から、砂岩製の石器が３点出土した。（１）は同一方向からの加撃により剥離を行う石核から作出された剥片を利用し、片側縁が鋸歯状になるよう剥離を行ったものである。（２，３）は二次的な加工は行われない。

（E区ＳＣ－５）

調査区の南側、礫群―１に囲まれた形でⅣ層上部より検出された。形態は70㎝×60㎝の長円形であり、遺構は深さ40㎝前後で一端袋状に拡がる。床面までの深さは約70㎝であり、やや傾斜しながらも平坦を保つ。遺構内からは石器が２点出土したが、二次的な加工はどちらも行われない。

（E区ＳＣ－６）

調査区の南端部、礫群―１の端部に位置し、Ⅳ層上部を検出面とする。形態は歪ながら105㎝×90㎝の楕円形であり、やや窄まりながら90㎝で床面に達する。床面は球形であり平坦面を持たない。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）、Ⅱ層は黄褐色の火山灰層である。遺物等は確認されなかった。

（E区ＳＣ－７）

調査区南西部の、調査区の境界付近より確認された。Ⅳ層上部を検出面とする。径約120㎝の円形を呈し、深さ100㎝の平坦な床面まで垂直に近い角度で掘り込まれる。覆土のⅠ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）であり、Ⅱ層は褐色の火山灰層、Ⅲ層はシルト質の硬質な層である。土坑の床面からは、縄文時代中期と思われる波状口縁を呈す土器の口縁部片が出土した。

（F区ＳＣ－１）

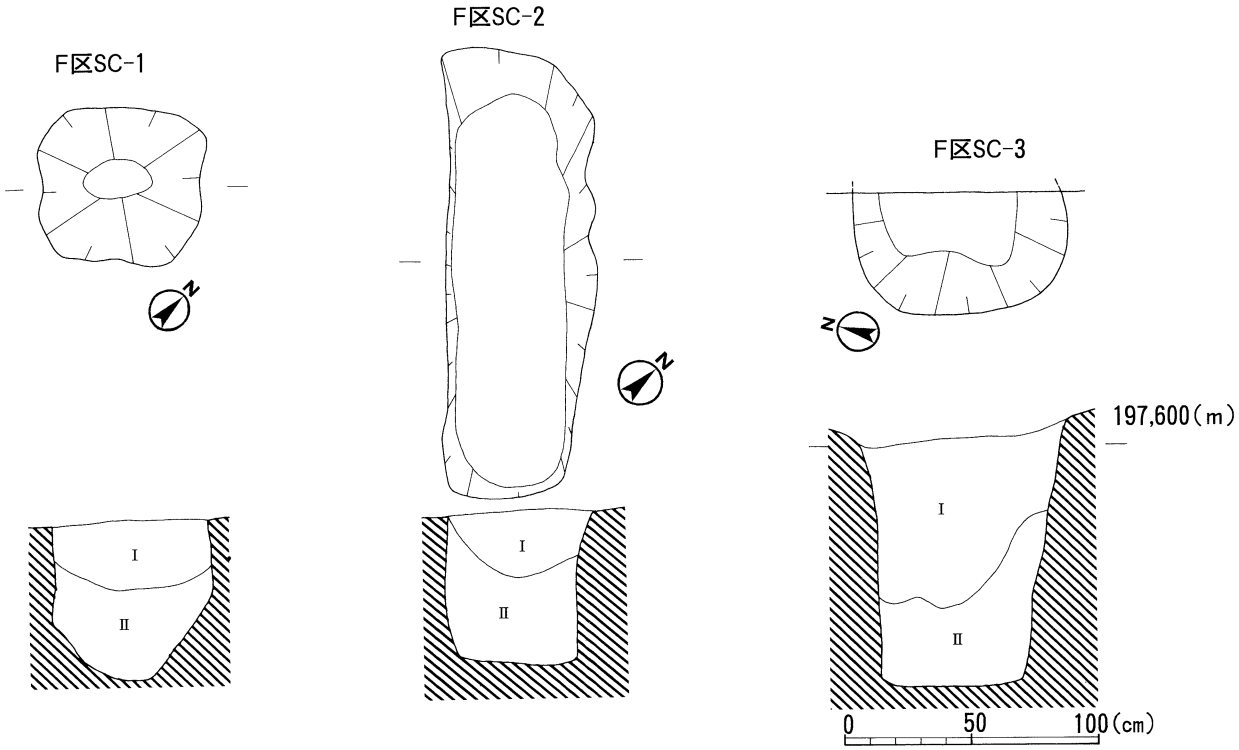
調査区北部より、ＳＣ－２と隣り合って検出された。検出面はⅣ層中位である。一辺60㎝の隅丸方形を呈しており、ほぼ垂直に掘り込まれるが深さ65㎝の床面に平坦面は見られない。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）、Ⅱ層は褐色のやはり火山灰層である。

（F区ＳＣ－２）

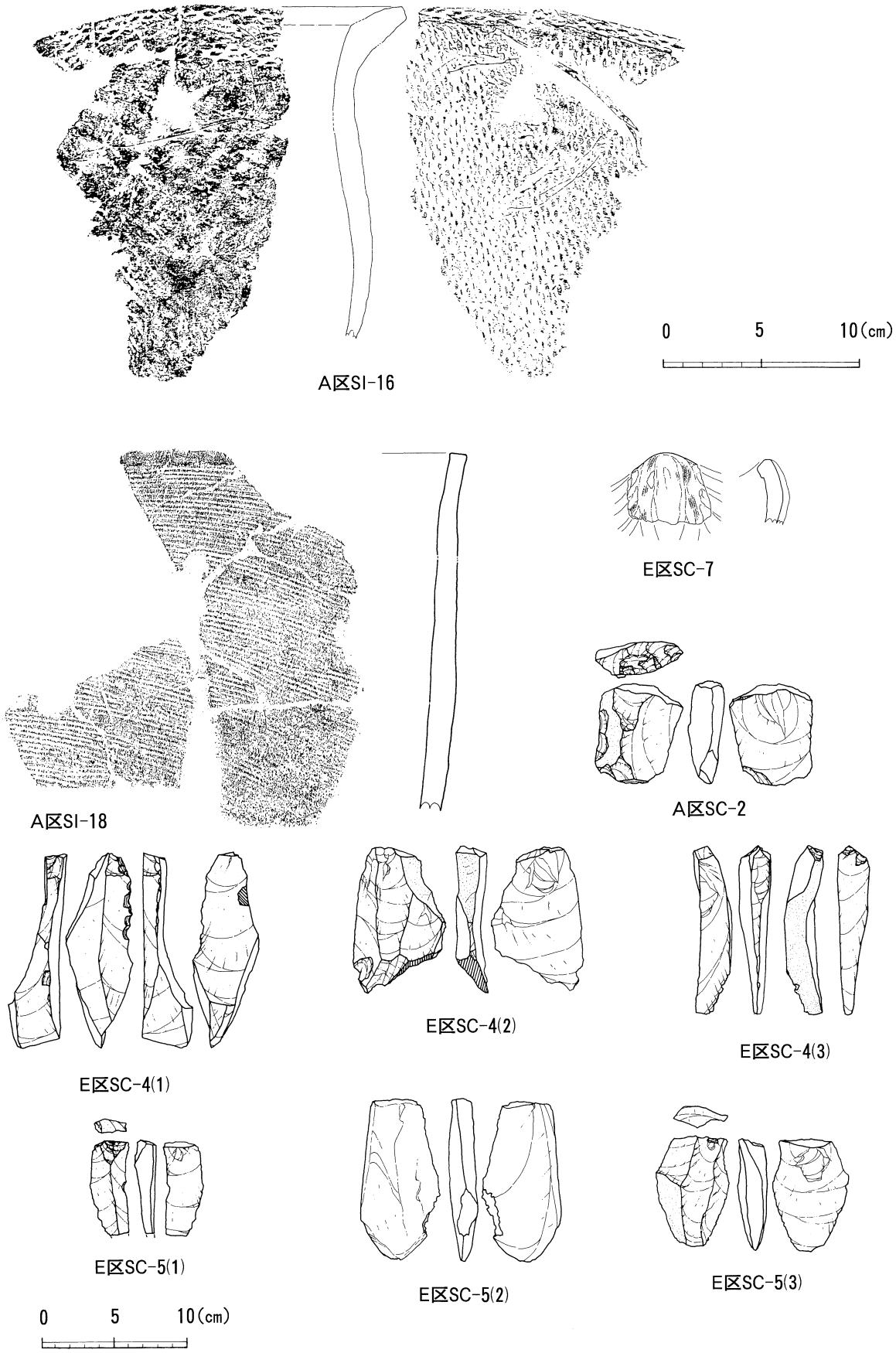
調査区北部より、Ⅳ層中位を検出面とする。長軸140㎝、短軸60㎝の方形に近い形態であり、垂直に近い角度で掘り込まれる。深さは約60㎝であり、Ⅰ層にはアカホヤ火山灰層が、Ⅱ層には褐色の火山灰が堆積する。

（F区ＳＣ－３）

東部の壁面から検出された。断面であるため形態は不明であるが、それによりⅣ層上面から掘り込まれていることが判明した。Ⅰ層にはアカホヤ火山灰層が、Ⅱ層には褐色の火山灰層が堆積する。また、E、F区の土坑より検出された褐色の火山灰は、アカホヤ火山灰層が周囲の層や水分の影響を受



第30図　土坑実測図（1：30）



第31図　遺構内出土遺物実測図

けながら遺跡内で残存したために生じたものである可能性が考えられる。

第５節　出土遺物

旧石器時代

ナイフ形石器（第32図１，２）

１は小型であり、斜軸状に剥離された剥片上部の二側縁に刃潰しを意図した調整を加え、剥片の末端部を刃部としている。２は剥片の片側縁のみに刃潰し調整を行ったものである。末端部付近の折断面を刃部に設定しているが、通常のナイフ形石器よりも急角度である。

角錐状石器（第32図３，５）

３は連続的な縦長剥片剥離技術により作出された剥片の左側縁と右側縁の下部に連続的な加工を行ったものである。この加工は、成形を意図しながらも低い角度の剥離が多いことから刃部調整と考え、角錐状石器とした。石材は大分県大野川流域で卓越する流紋岩と酷似する。５も同様の工程上により石核から剥離された剥片を用いたものであり、右側縁と左側縁下部に調整を行う。右側縁に行われる加工は角度が低いため、刃潰し調整ではなく、成形及び刃部作出によるものと判断した。

剥片尖頭器（第32図４）

礫面付近の縦長剥片を用い、剥片上部の両縁に調整を行い浅い抉りを付けることで成形したものである。剥片末端部に調整は行われない。石材は砂岩である。

三稜尖頭器（第32図６）

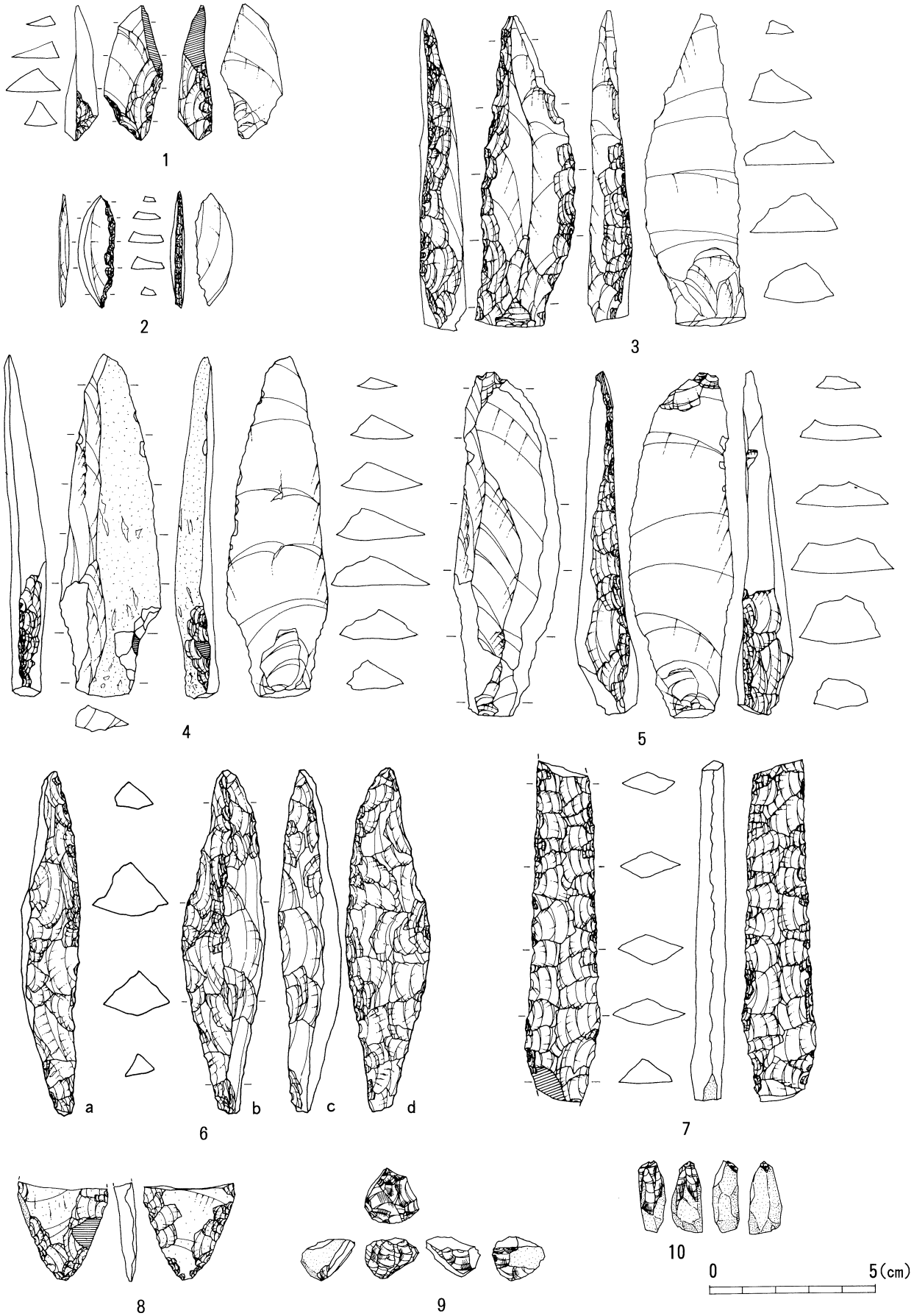
三面加工の三稜尖頭器である。うち一面は調整が疎らであり、この面に残る大規模な剥離痕は、素材時の剥離面であったと考えられる。

槍先形尖頭器（第32図７）

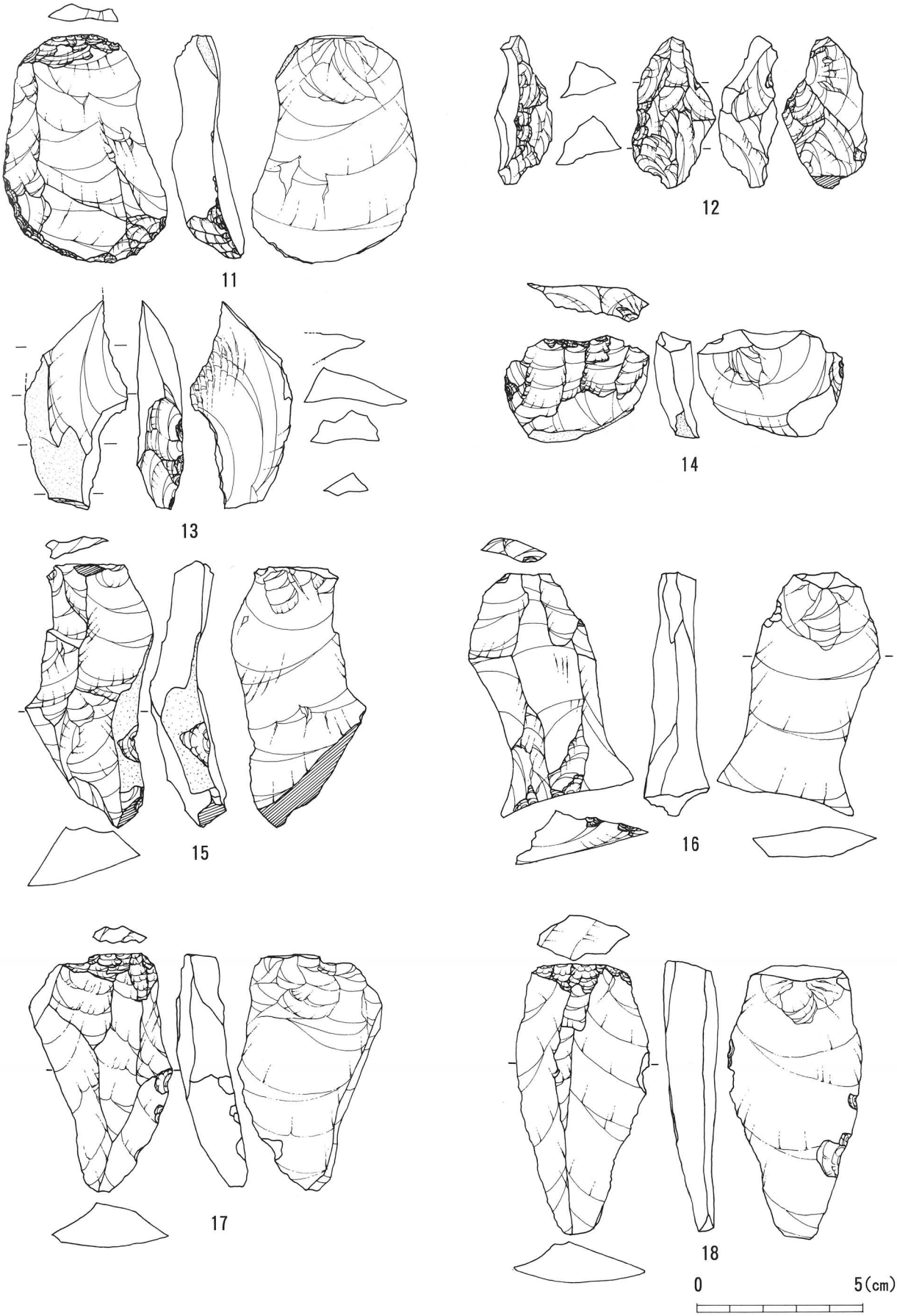
両縁より面的な剥離が連続的に行われ、断面が凸レンズ状になるよう丁寧に仕上げられる。尖端部と基部の両方を折損しているが、全体的に細長い形状を呈していたと考えられる。

尖頭器（第32図８）

縦長剥片の両縁に加工を行い成形し尖頭状に仕上げられたものである。裏面に残る剥離面は素材時のものであったと考えられる。調整は面的ではあるものの剥片の断面に影響を与えるまでには至らない。縄文時代早期の石槍である可能性も考慮される。



第32図　出土石器実測図



第33図　出土石器実測図

細石刃核（第32図９，１０）

９，10はどちらも黒曜石の小礫を用いたものである。９は打面に何度も調整を行い角度を整えた後に細石刃の剥離を行ったものである。10は打面に調整を一度加え、細石刃剥離を行ったものである。

スクレイパー（第33図11，12）

幅広の縦長剥片の末端部を用いたエンドスクレイパーである。刃部調整は裏面からのみ行われる。12は残核の一端に連続的な調整を行い刃部としたと考えられる。

二次加工剥片（第33図13）

13は斜軸状に剥離された剥片のバルブを調整により除去した剥片である。

剥片（第33図15～22）

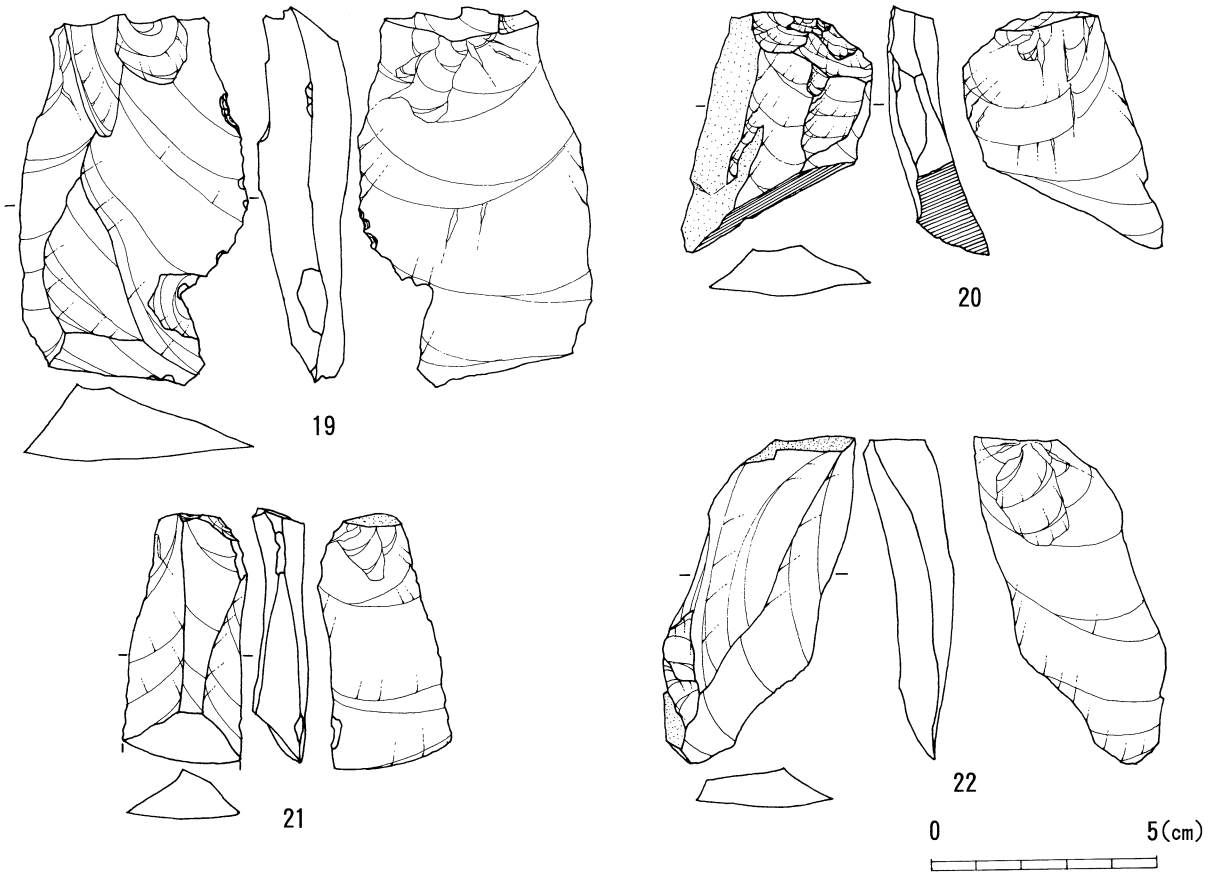
14は連続的な剥片剥離を行う工程中に剥離されたものである。急角度の加撃により作出されていることから、打面を再生する意図も窺うことができる。表面が被熱により赤変し、裏面下部は剥落が認められる。15は連続的な縦長剥片剥離技法を行う石核より剥離された剥片である。表面に残される剥離痕には、加撃が末端まで届かず途中で剥離されたものが多く、またウェーブも認められることから、これも14と同じく打面を再生する目的があったと考えられる。16は上下の両極より剥片剥離を行った石核から剥離されている。17，18は共に砂岩製であり、縦長剥片剥離工程により作出されたものである。19～22はＥ区より出土したものである。このうち19と22の表面に残る剥離痕からは、明確な目的が感じられず、縄文時代早期段階の石器である可能性も考えられる。

縄文時代

土器

草創期の土器（第35図23～33）

（23～25）は口縁部に粘土紐を貼り付けた後、爪形文を施すものである。（23）は口縁直下には大きめの爪形文を配置し、下位に二列、口縁部肥厚帯の最下部は細めのものと３種類の爪形文を使い分けるのに対し、（24）は同種のものを３列配置したものである。（26）は細い粘土紐を用い、両側に羽状の文様を施文しながら貼付を行ったものである。（29）は太めの隆帯を口縁部に２列貼付けた後、隆帯上に工具による押引文を施文したものである。30以降は草創期とは断言できないが、可能性が考えられる土器である。（30）は口縁端部に刺突と波状の条痕を行う。（31）は口縁部に貝殻腹縁による刺突を何列も施文したものである。（32）はナデにより器面を成形した後、口縁部及び口唇部に爪形状の刺突を施す。口縁部は外側に向かい傾斜する。（33）は（32）と同一個体である。



第34図　出土石器実測図

早期の土器（第35図34～45図）

Ⅰ類：条痕文土器

ａ：条痕文が浅く施文される土器（34～41）

貝殻条痕文を全面に施文し、口縁部に貝殻腹縁による刺突を行うものである。（34～37）は、口縁部に２列の刺突を行うが、（35，36）は２列とも同種の刺突文であるのに対し、（34）は上下の列で刺突の角度を変えている。また、（34）は口縁部が大きく外反しており、器形も異なる。（39）は貝殻条痕を施した後に磨きが加えられるが、（40）は磨きを行った後に条痕を施文するなど、同じ分類にありながら製作技術に幾つかの相違が認められる。（41）は口縁部に刺突が行われるほか、比べ細かい条痕が施文されるなど様相を異にする。

ｂ：条痕文が深く施文された土器（42～48、50～53）

口縁部に太い刺突を行った後、下位に深く条痕を施文したものである。このうち（44～46）の口唇部は無文であるが、（47，48）は口唇部にまで刺突を行う。53は底部であり、横位の条痕文が施文された後に縦位の条痕文を施文していたことが分かる。

ｃ：押引文を施文した土器（49，54）

（49）は僅かに外反する器形を呈しており、薄い器壁に浅い横位の押引文を数列施文したものである。（54）は厚手の外反する口縁部と口唇部に深い押引を行うものである。

Ⅱ類：沈線・刺突文土器

ａ：羽状の短沈線を施文した土器（55～58）

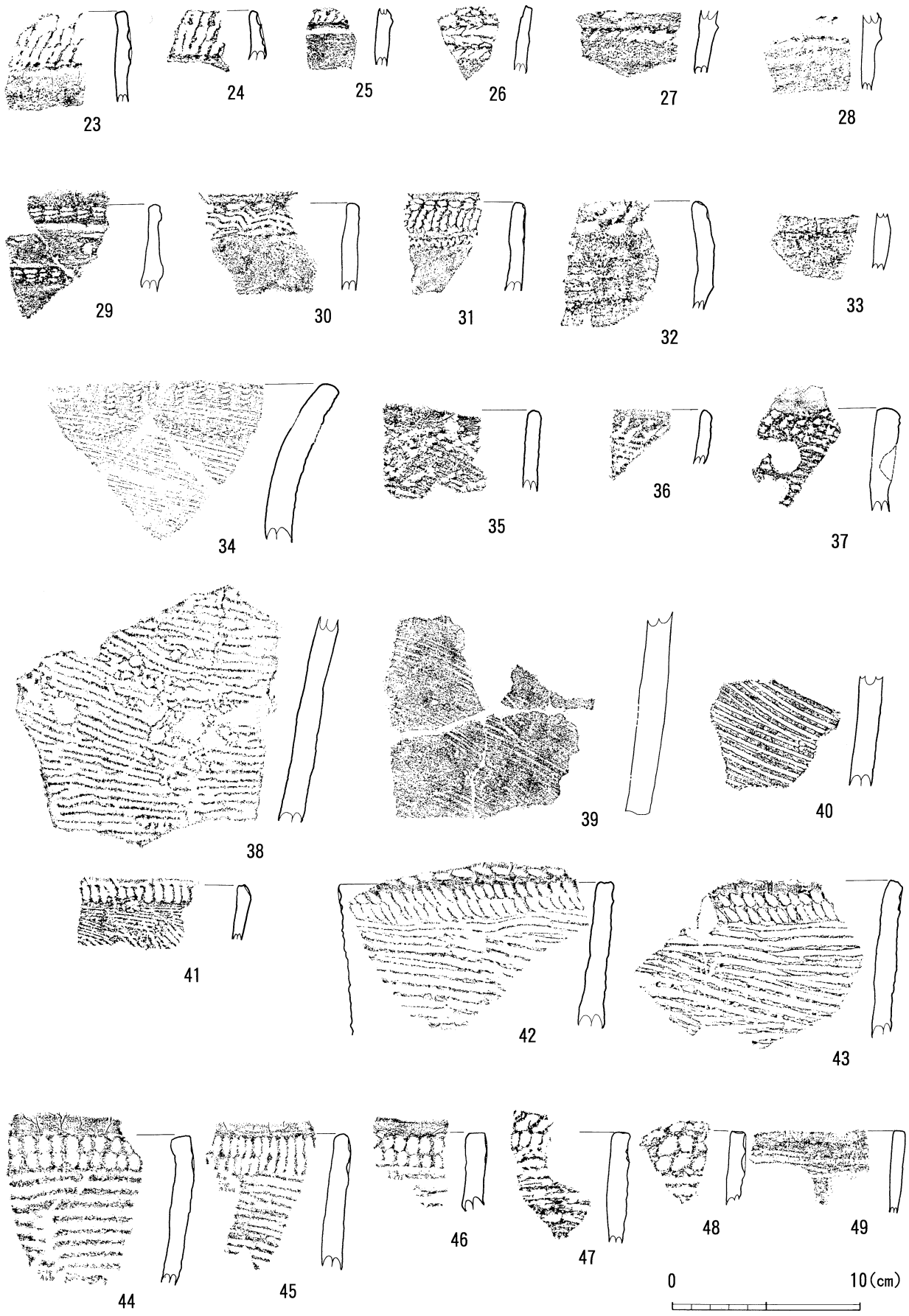
（55、56）は２叉状の工具を用い、横位の羽状文を施文した土器である。（57）は鋭利な工具により文様が付けられる。（58）の文様は縦位に施される。（56，57）は口唇部が内傾し、器壁が厚く作られる。また、いずれも口縁部断面が方形になるよう磨きによる成形が行われている。

ｂ：細かい刺突を施文した土器（59～70）

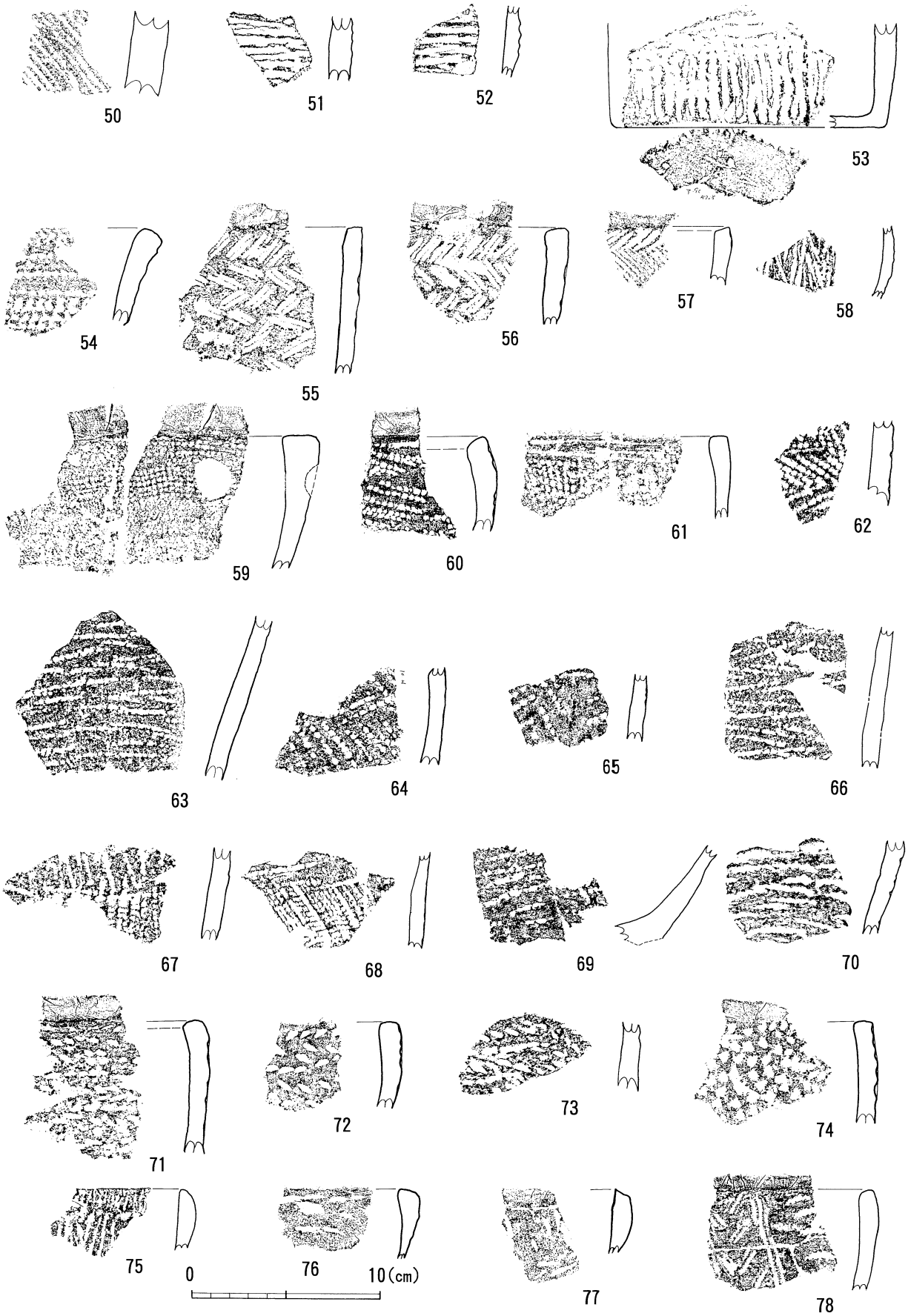
（59、63、70）は外面に横位の刺突文を巡らせた土器である。（60、62，64、69）は斜位に施文しており、（67）はやや傾けた縦位の施文を行い、（68）は斜位ながら、列ごとに角度の変更が認められる。また（61）は、口縁直下を横位、下位を縦位に施文する。このように、同類の土器にも様々な文様の変化が見られるほか、器面に残された文様より推測される施文工具も、それぞれ大きな開きがあったと考えられる。器形はどれも口縁部付近で僅かな内傾が認められる。また、（55～58）と同様口唇部に磨きによる成形が行われている点は共通するものの、（61）で口縁部が極端に厚みを増すのに対し、（60）ではほとんど厚みの変わらぬ断面形である。

ｃ：刺突を施文した土器（71～78）

（71～73）は短沈線状とも取れる沈線を羽状に施文し、（55～58）との共通点を窺うことができる。（74）は棒状工具による刺突がランダムに施文される。（75～77）は鋭利な工具を用いたものである。（78）は、２叉状の短沈線と貝殻腹縁刺突を縦位の区画の上に併用したものである。口唇部は上記の土器と同様磨きによる手法を使用するが、断面が方形になるよう入念な成形は行われない。



第35図　出土土器実測図



第36図　出土土器実測図

Ⅲ類：押型文土器

a：楕円押型文

1：楕円が細粒で、縦位の施文が行われるもの（79～89）

外面に細粒の楕円文が縦位に施文されるものであり、施文は口唇部及び内面にも及ぶ。但し外面以外は横位に文様が施される。なお、(80) の口唇部は細かい沈線が施文され、他のものとは異なる様相を示す。

2：楕円が細粒で、横位の施文が行われるもの（90～96）

(90) は内面にも楕円押型文が施されるが、その上部には沈線が施文される。器壁は薄く、口唇部は無文である。(96) は大きく傾いており、底部付近であると考えられる。

3：粗大な楕円文が施文されるもの（97～102，108）

(97) は口縁部が大きく外反しながらも、胴部が膨らみ最大径となる器形を呈す。押型文は胴部上半部までは縦位に施文されるが、下部は縦位になり、最大径付近は双方向の文様を見ることができる。内面は丁寧になでられた後、口縁部直下に横位の押型文の施文が行われる。(98) は口唇部に沈線が巡る。(99～102) は粗大な楕円文であり、施文方向を断定し難い。これらの胎土には、金色に変色した雲母片が多く混入する。(108) は粗雑な施文の痕跡を認めることができるが方向は不明である。また、口唇部にも文様が施される。

4：口縁直下に無文帯を形成するもの（103～107．109）

どれも分類上は細粒でありながら、口縁部に無文帯を持つ一群である。施文方向は縦位に近いものの、やや斜走ぎみである。(104) の原体は溝状に彫り込まれるのではなく、立体的に作出されたと考えられる。(105～107) の外面は無文であるが、これも (103) と同じく無文帯下に施文されたと判断した。器形は (103) を除けばどれも外反が目立ち、無文帯と外反部が重なる傾向にある。

5：不定方向に施文されたもの（110，111）

(110) は斜方向に数回にわたって施文されたものと考えられるが、文様の重複はそれほど認められない。(111) は複数回施文されており、その度の文様が重複し、原体の文様が判別し辛い。

b：山形押型文

1：横位の施文が行われるもの（112～119）

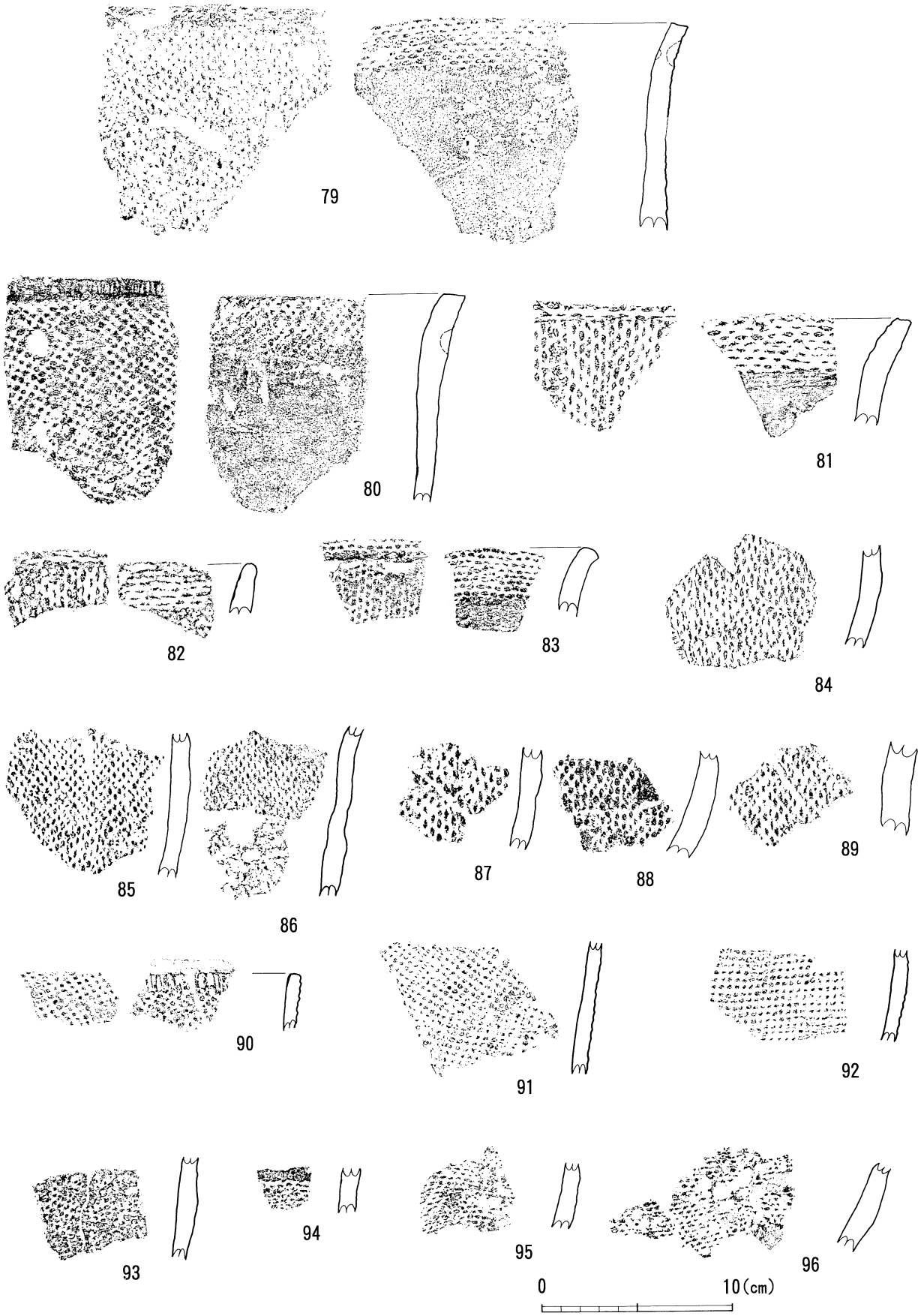
(112～115) は同一個体である。波状口縁であり、器壁は薄く、口縁部で外反する器形を呈す。内外面の押型文は細かく、口縁断面は丸くなり施文は行われない。内面には他に太い沈線も施文される。(116) の山形文は (112～115) に似通っているが山形がそれぞれ平行せず、ところにより格子目状の文様となる。また、器壁は厚手である。(117～119) は同一個体であり、厚手の器壁の外面に横位の山形押型文が浅く施文される。

2：縦位の施文が行われるもの（120）

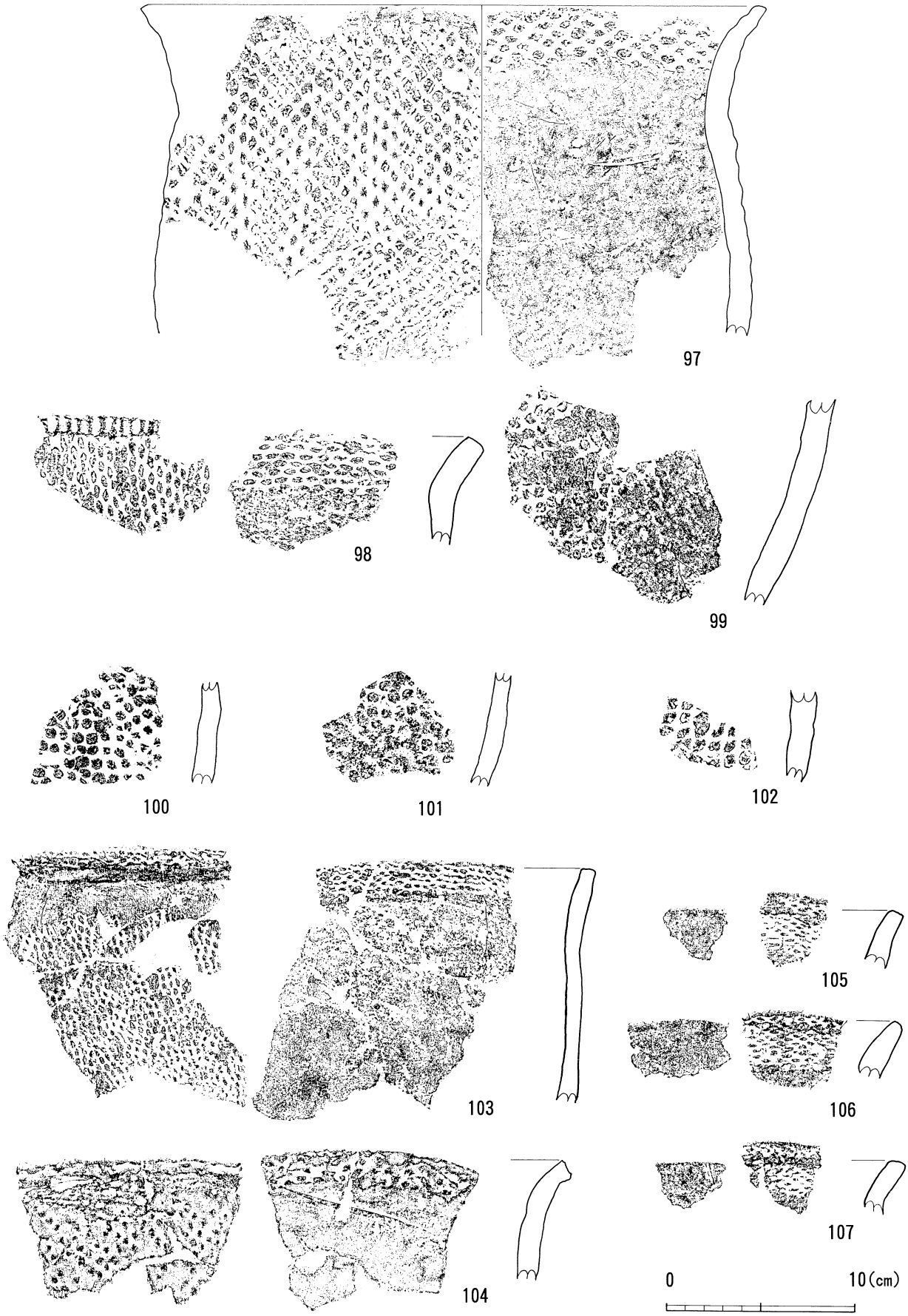
厚手の器壁の外面に、粗大な山形押型文が縦位に施文される。外面は大きく剥落しており、胴部ではあるものの全体の器形は想定しがたい。

3：上記以外の山形押型文（121～127）

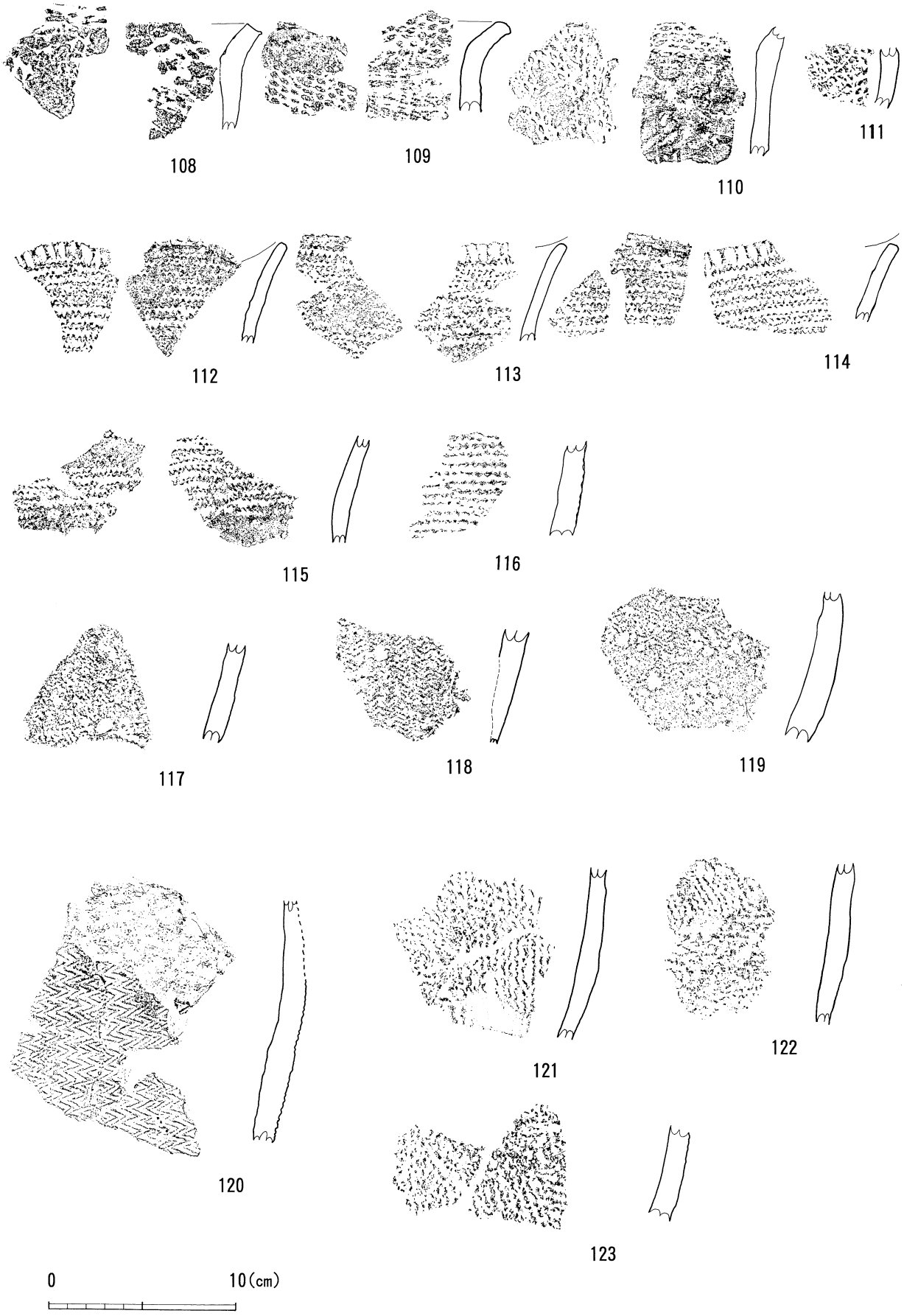
(121～123) は不定方向の施文が外面全面に施文されたものである。同一個体であるが、(123) の



第37図　出土土器実測図



第38図　出土土器実測図



第39図　出土土器実測図

胴部のみ大きな膨らみが見られる。(124) は口縁部に縦位の施文が認められ、口縁直下と胴部は横走する。口唇部は刺突とも取れる短沈線を施し、内面上部の押型文は、横走するものの何度も施文した痕跡を見ることができる。(125) は、大きく外反した厚手の口縁部である。内面及び口唇部に押型文が横走するほか、外面には斜方向の施文が行われている。(126) は傾きの度合いから底部付近と考えられるが、押型文が縦横に施文した痕跡が残される。(127) は主に横位であるが、幾重にも施文が繰り返されたことを物語る。

c：それ以外の押型文土器 (128～131)

(128) は山形押型文に類似するが、山にあたる部分が丸くカーブしているため、波状の押型文であるような印象を受ける。縦位に施文されており、器壁は厚い。(129, 130) は、残存状態が悪く判別が困難であるが、どちらも幅の広い格子目状の原体を使用したと考えられる。

Ⅳ類：手向山式土器　(131～136)

(131) は外面に菱形押型文が施文される。上部で外反が認められるため、頸部にあたると考えられる。(132) は厚手であるが、これも頸部にあたる。山形押型文が横位に施文される。(133, 134) は極めて薄手である。外面に口縁部より縦走する山形押型文が見られ、内面にも横位の山形押型文が施文されている。なお、内面上部に沈線は認められない。(135) は内外面に横位の山形押型文を施すが、外面はその上に波状の沈線を施文する。なお、口唇部には竹管状の工具による刺突が連続的に行われる。(136) は頸部から胴部にかけての屈曲部に粘土紐を貼り付け、その上に工具による刺突を行い、頸部には沈線を施文する。口縁部が大きく外反し、胴部以下が大きくすぼまる浅鉢状の器形を呈していたと考えられる。

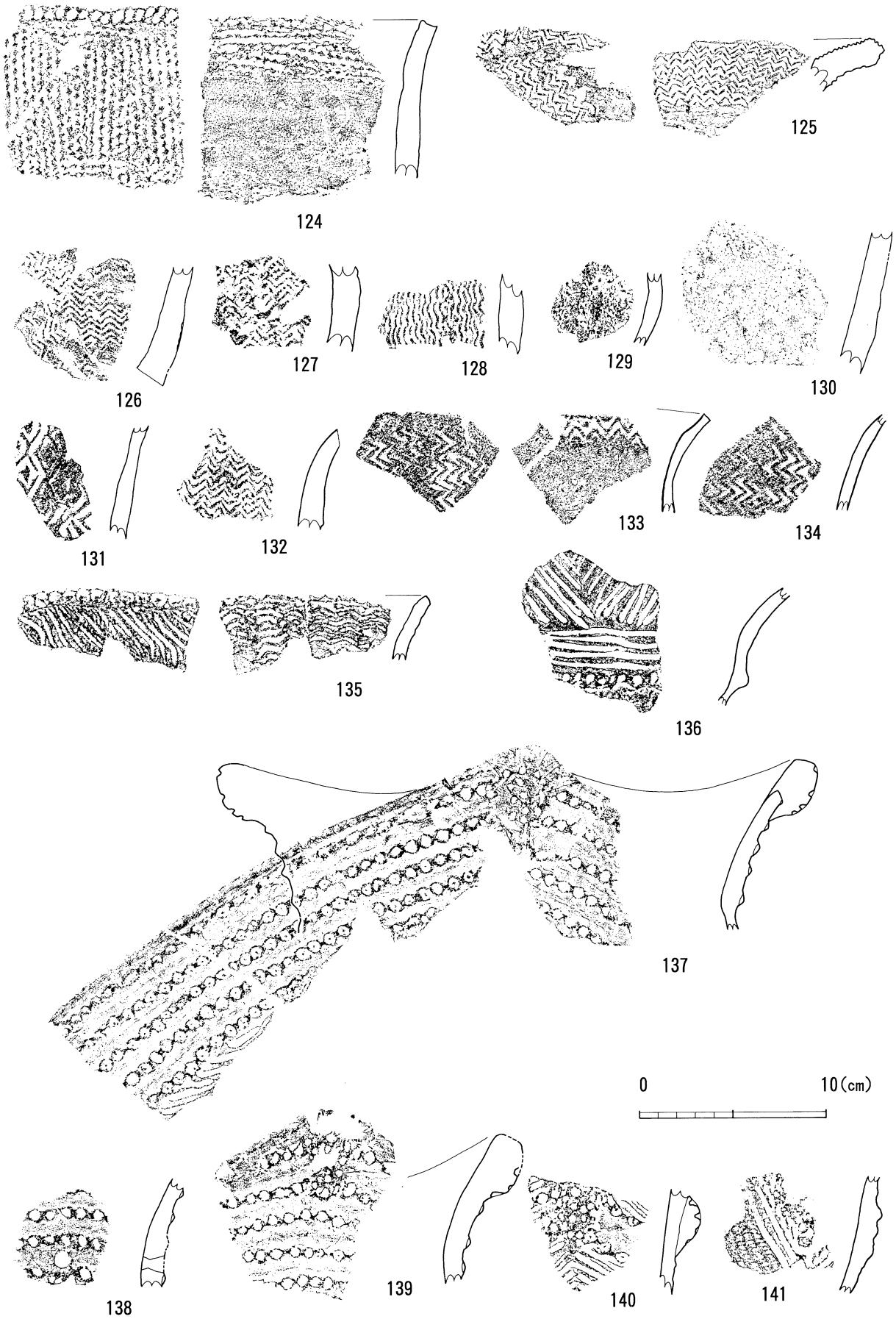
Ⅴ類：天道ヶ尾式・妙見式土器 (137～143)

a：天道ヶ尾式土器 (137～140、142～143)

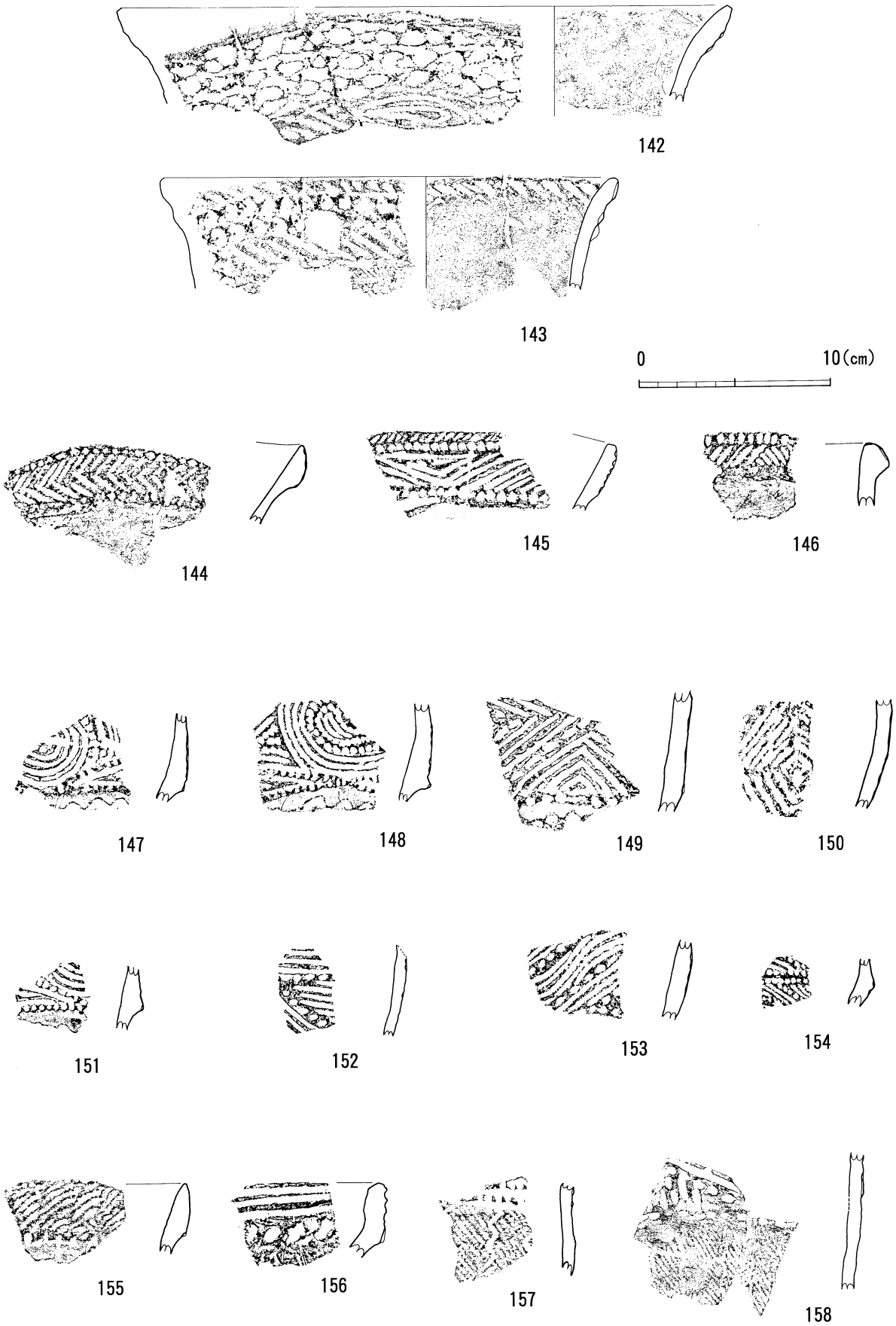
(137～140) は同一個体であり、波状口縁の波頂部に瘤状の突起を、また頸部にかけて等間隔に5本の隆帯をそれぞれ貼り付け、その上に竹管状の工具による刺突を連続的に施文したものである。(137) の下部及び (140) を観察すると、胴部以下にも瘤が貼り付けられていたほか、沈線も施文されていたようである。(142, 143) は平口縁である。(142) は隆帯が数状貼り付けられるが、前記のものと比べ隆帯間に間隔が置かれない。隆帯下には沈線による曲線が描かれる。(143) は2条の隆帯上に沈線を施文し、山形押型文を施文している。内面には山形押型文を横走させた上に工具により斜方向の沈線を施す。いずれも口縁部が大きく外反しているが、胴部以下の器形は不明である。

b：妙見式土器 (141)

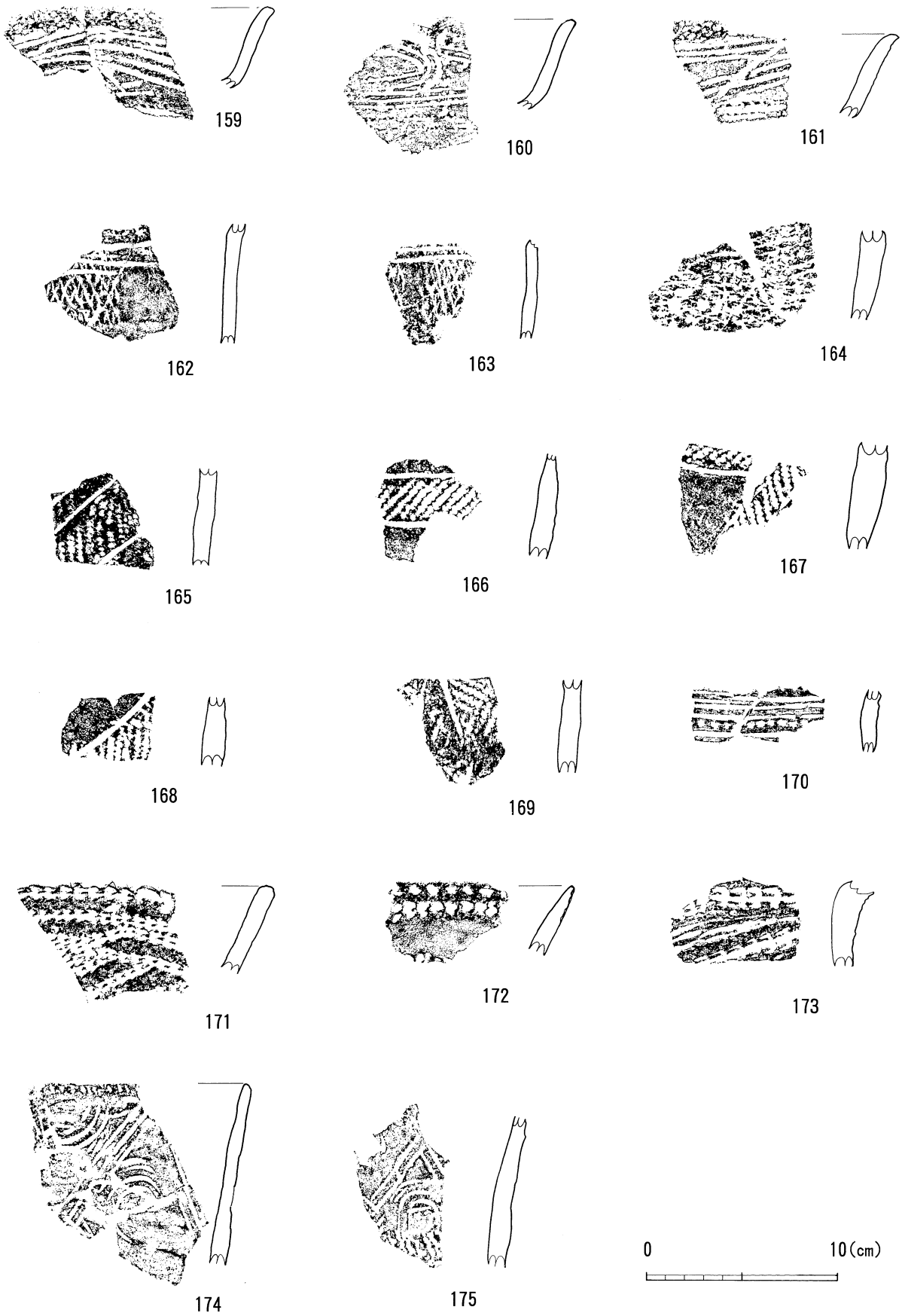
(141) は縄文地に隆帯を貼り付けた後、沈線を施文したものである。胴部片で、僅かな膨らみが認められる。地文が縄文であるため、妙見式と判断した。



第40図　出土土器実測図



第41図　出土土器実測図



第42図　出土土器実測図

Ⅵ類：平栫式土器（144～158）

（144、146）は波状口縁であり、口縁部断面は三角形状を呈す。（145）は口縁部に肥厚帯を形成す。（147，148）は口縁部から頸部にあたり、大きく屈曲した口縁部の文様帯に曲線や刺突を施文する。（155）は口縁部の肥厚帯に縄文を施文する。（156）は口縁部が屈曲して垂直に立ち上がる。（157，158）には胴部に結節縄文が縦位に施文される。（157）は胴部が若干膨らむが（158）はそれが見られず、頸部との境界も器形に変化が見られない。

Ⅶ類：塞ノ神式土器（159～175）

（159～161）は二重口縁であり、外面には沈線文が二本単位で描かれ、沈線間に刻みを付ける。（162～164）は格子目の撚糸文が施文された後に沈線が巡る。（165～169）は二本単位の平行な沈線により区画を描出し、その間に縄文を施文するものである。（170）は胴部と口縁部の境界と考えられ、沈線を数状施文した後、沈線間に刺突文を施す。（171～173）は大きく外反する口縁部に貝殻腹縁による押引を行ったものである。（174，175）は沈線を主に施文するが、口縁直下と胴部との境界には貝殻腹縁による刺突が行われている。

Ⅷ類：突帯と貝殻条痕文を施文する土器（176～178）

全て同一個体であり、F区にてアカホヤ火山灰層を挟み上下の層より確認された。隆帯を縦位に貼り付け口縁部から胴部にかけて貝殻条痕文を等間隔に施文し、その間に貝殻腹縁刺突を行ったものである。波状となる口縁部はやや外反し、胴部で僅かに膨らむ器形である。

Ⅸ類：鎌石橋式、轟Ⅰ式土器（179～189）

Ⅸ類は、条痕文を施文するａ（177～184）と、工具により微隆起線文を持つｂ（185～189）に二分した。ａは鎌石橋式土器、ｂは轟Ⅰ式土器である。

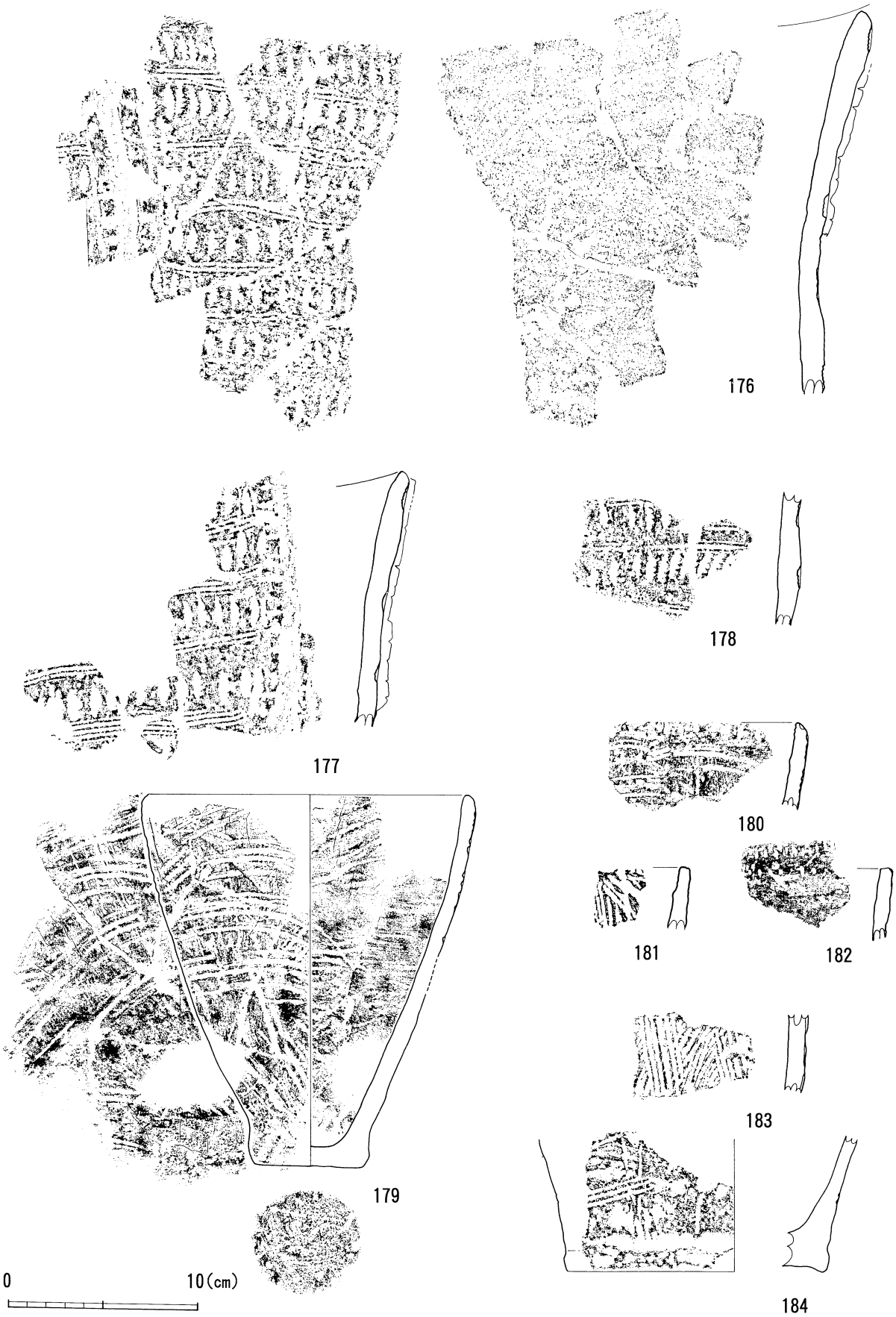
ａ：（179、180）はC区のⅣ層南東部の傾斜下部より出土したものである。底部から胴部にかけてはラッパ状に開き、口縁で僅かに内湾する器形を呈す。外面に縦方向から斜方向に条痕を施文する。内面は横位の条痕の後にナデによる成形が行われる。（181，183）も同一個体であり、条痕が縦位及び斜位に深く刻まれる。（182）には条痕文こそ認められないものの、口縁端部に刻みが入っており、同類と判断した。（184）は底部である。（179）の底部と比較し大型であるが、外面に残された条痕文より鎌石橋式土器とした。

ｂ：（185、186，189）は同一個体である。C区より、（179，180）に隣接して出土が確認された。工具による条痕文が口縁部付近は横位に、頸部以下は縦位に施文される。この条痕により微隆起が生じる。（187）にはそれが顕著に認められ、（188）はその極端な例である。

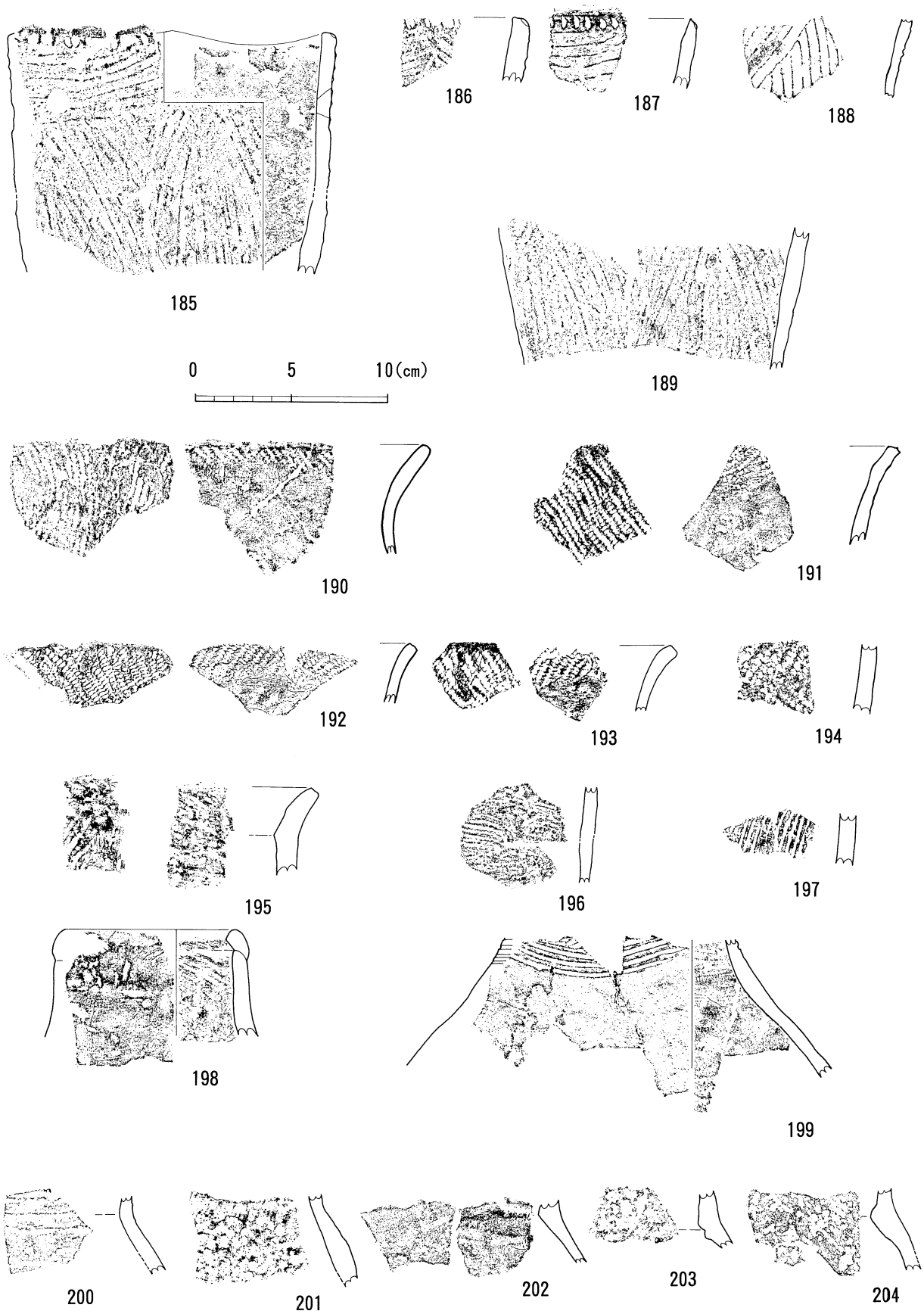
Ⅹ類：縄文土器、撚糸文土器（190～197）

ａ：縄文土器（190～194）

（190～193）は薄手であり、口縁部が大きく外反する器形を呈す。外面及び内面上部に縄文が縦位



第43図　出土土器実測図



第44図　出土土器実測図

に施文される。(194) は羽状の縄文が施文される。

b：撚糸文土器（195～197）

(195) は口縁部が外反し、内面には段を形成する。撚糸文は外面の一部に施文される。(196、197) は外面の全面に撚糸が施文される。

XI類：壺形土器（198～204）

(198) は頸部から口縁に向かいやや内湾する器形を呈す口縁部に、粘土紐を貼り付けることで内湾させたものである。(199) は頸部から肩部に至る部位であり、沈線を数条施文することで境界を作り出す。(200) も同じ部位であり、刻み目を持った微隆起を数条配置する。(201～204) は無文の壺形土器である。このうち (202) は内面に屈曲が見られる点を考慮すると上下を逆として塞ノ神式土器の破片とも考えられるが無文であることから壺形土器として分類した。また、それ以外の土器に関しても上下が定かでないが、内面の調整、特に肩部と口縁部の繋ぎ目の処理が殆ど行われていない点を考えて壺形土器として判断した。

XII類：その他の縄文時代早期の土器（205～217）

(205～208) は無文の土器である。(205) は口唇部に指頭によると思われる押圧が行われる。(206) は浅鉢状の器形を呈す。(209) は薄手の土器である。口縁部がキャリパー状に屈曲し、内面に刺突等を施文する。(210～212) は沈線が施されたものである。(213) は細めの隆帯を貼り付けた上に刻みを付け、下位に撚糸文と思われる文様を施文する。(214) は粗い条痕が施文されたものである。(215, 216) は沈線が施文される。

縄文時代前・中期の土器（第46図218～240）

I類：尾田式土器（218～226）

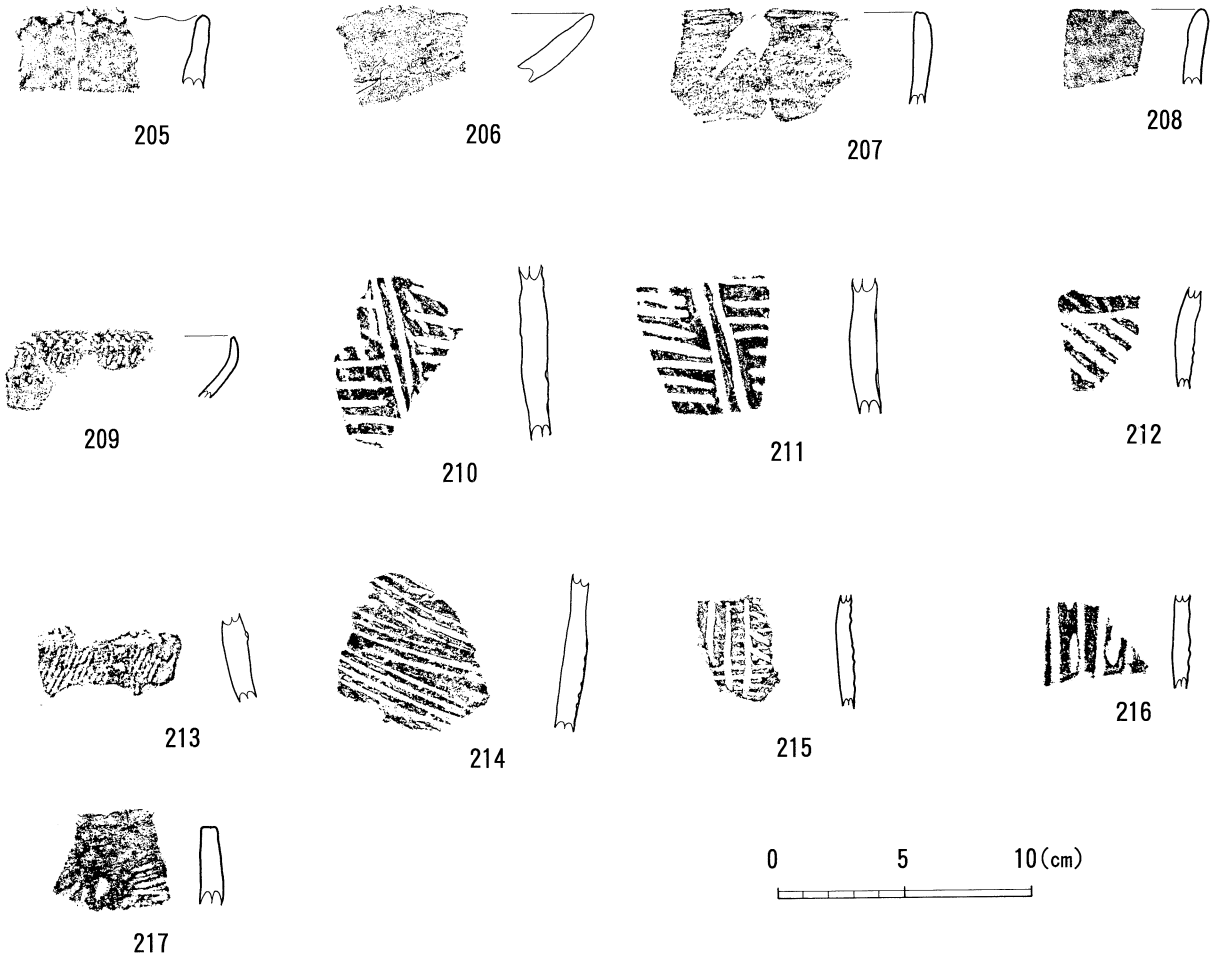
(218～221, 223～226) は同一個体である。口縁は僅かに外反し、胴部でやや膨らむ器形を呈す。口縁部に隆帯を数条貼り付けた後に刺突を行い、胴部以下に工具で押引文を縦位と斜位に施す。(222) は薄手ではあるが、同様の文様パターンであったと考えられる。なお、口縁部は主に平口縁であるものの、(220) にも見られるような突起を持っていたものと考えられる。

II類：曾畑式土器（227～230）

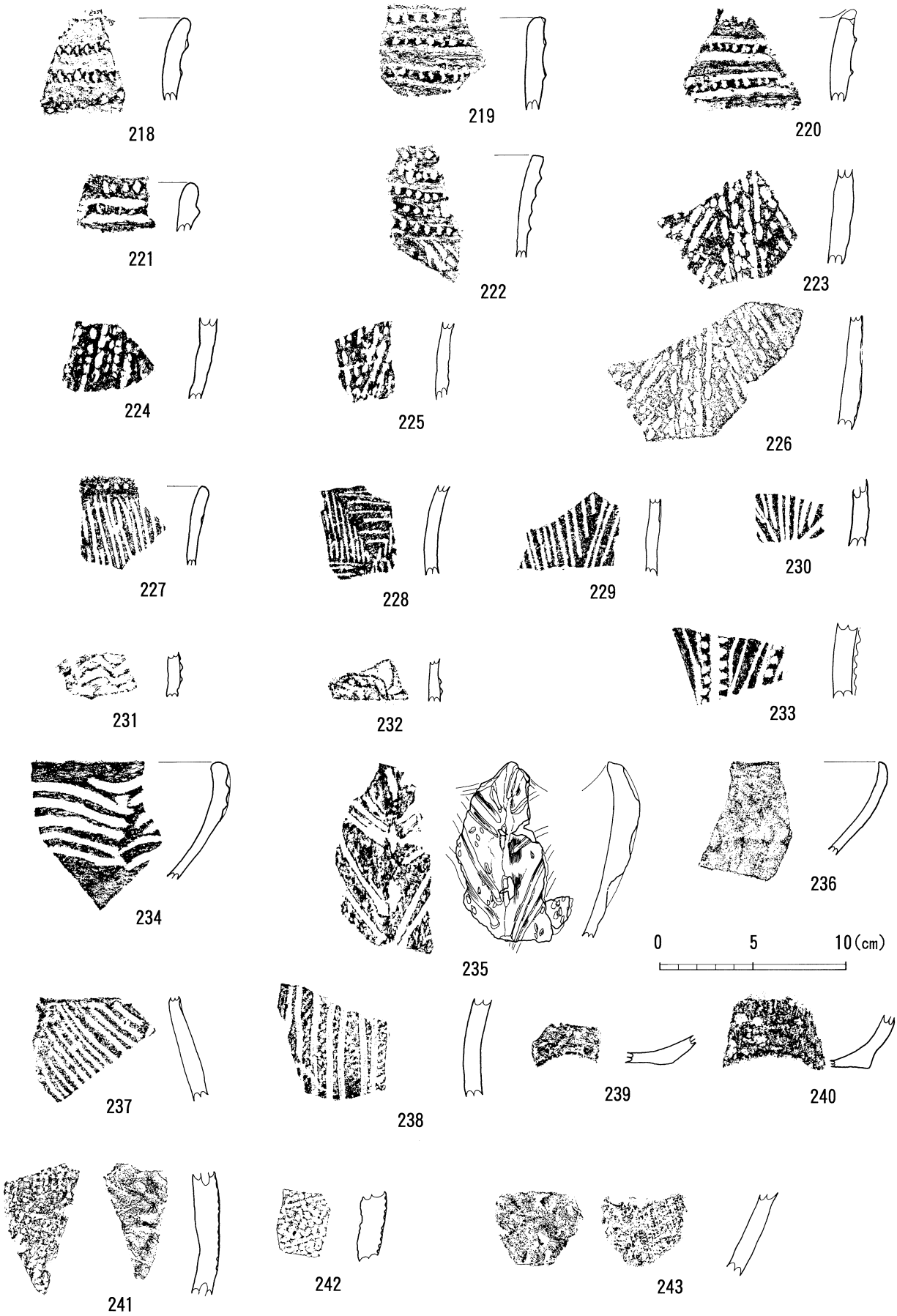
(227) は薄手であり、断面の丸い口唇部に細い棒状工具を用いた刺突を連続的に行う。内面は施文されない。(228) は鋭利な工具を用いており、幾何学的な文様が描出される。

III類：微隆起線文を有する土器（231, 232）

細いミミズ腫れ状の隆帯が貼り付けられる一群である。(231) は3条の隆帯を波状に貼り付ける。



第45図　出土土器実測図



第46図　出土土器実測図

Ⅳ類：深浦式土器（233）

（233）は縦位に隆帯を貼り付けた上に刻み目をつけ、隆帯間に鋭利な沈線を施文したものである。E区アカホヤ上層で１点のみ確認された。

Ⅴ類：春日式土器（234，235，238）

（234）は口縁部がキャリパー状の屈曲を見せ、外面に沈線により連弧文が施文される。春日式土器の中でも初期のものに分類されよう。（235）は波状口縁を呈し、波頂部には隆帯を貼り付け強調されている。器面は縄文の後に沈線が施文される。これは（238）でも共通する。文様帯が胴部にまで及んでいたと考えられることから、春日式の最古段階である北手牧段階に位置付けられる。

Ⅵ層：その他の前・中期土器（236，237，239，240）

（236）は器壁が極めて薄手であり、口縁部がキャリパー状に屈曲する。春日式土器に類する若しくは時期的に近い土器と推測される。（239，240）は底部である。僅かであるが上げ底である。

石器

石鏃（244～323）

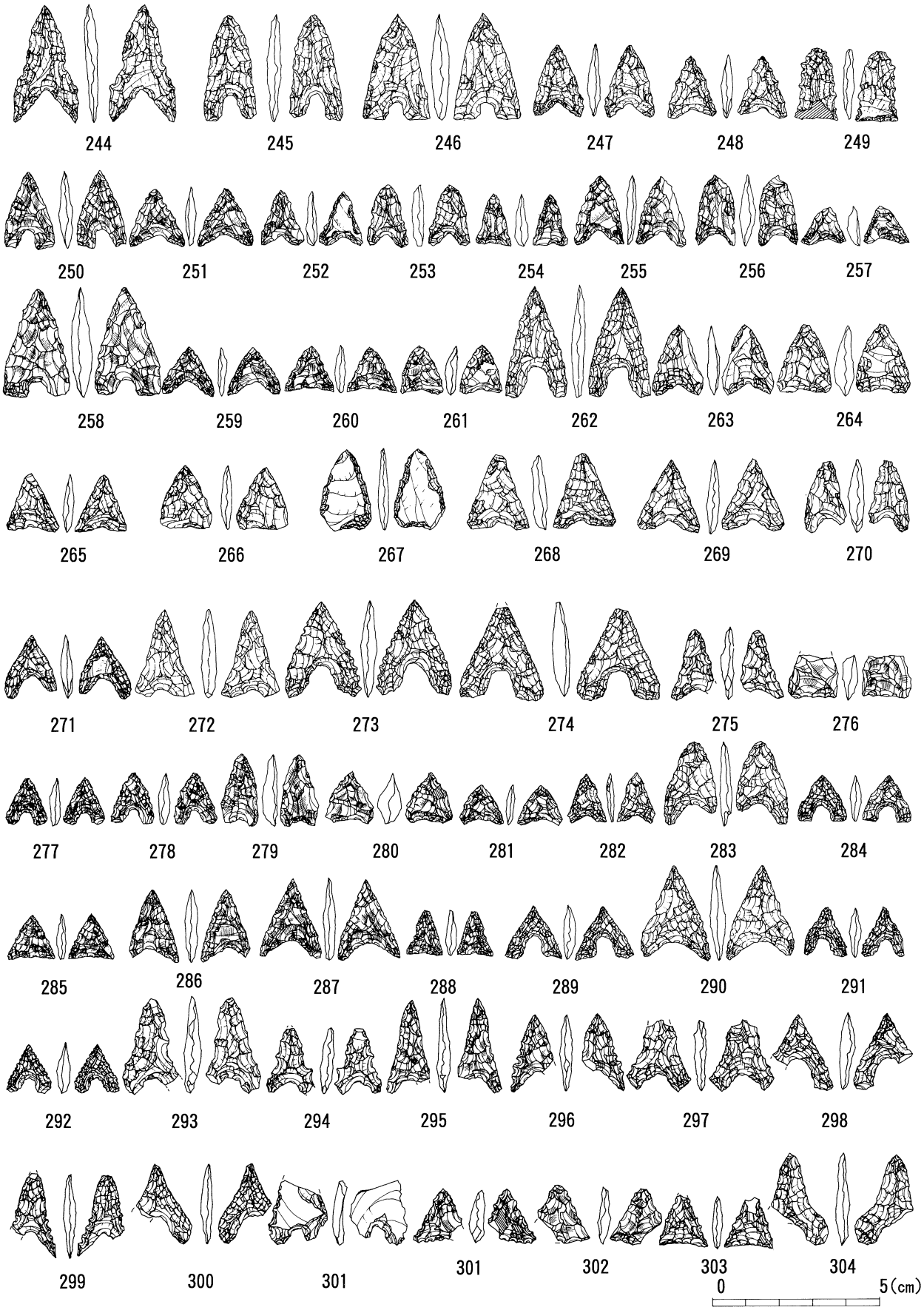
未製品や欠損品も含めると、調査区全体で138点出土した。図示されているものは、そのうち残存状態の良好なものである。出土した石器の形態は、程度の差はあれ全て基部に抉りの入るものであるが、抉りの深さや脚部の尖端の形状等、多くのバリエーションが見られる。特にA区で約半数の石鏃が出土した。また、（313～316）は欠損後に再利用の痕跡が認められるものである。（313）は尖端部に、残りは脚部にそれぞれ再利用を図った調整が行われる。（317～323）は、尖頭状石器より小型であるため石鏃の未製品とした。なお、尖頭状石器も含む石鏃類全点の石材利用頻度は以下の通りである。

調査区	黒曜石（姫島産）	黒曜石（その他）	張　質 安山岩	流紋岩（2,3含む）	チャート	その他	計
A 区	21	11	10	3	16	6	67
B 区	2	2	0	1	5	6	16
C 区	0	0	0	1	6	0	7
D 区	0	1	0	0	0	1	2
E 区	1	6	0	3	8	4	22
F 区	3	4	1	0	14	2	24
計	27	24	11	8	49	19	138

第１表　調査区別石鏃・尖頭状石器利用石材表

尖頭状石器（324～331）

厚手の剥片を利用し、両面に調整が加えられたものである。縁辺部には成形の為の小規模な剥離が行われるが、尖端部に対する目的的な意図は希薄である。



第47図　出土石器実測図

石錘（332～334）

（332）は欠損した石鏃を利用し、残存する片脚部に調整を行い尖端状に仕上げたものである。（333，334）は剥片剥離を行う際に剥離された剥片の縁辺部に両縁から加工を行う。

石匙（335～338）

周縁より面的な剥離を連続的に施し、一端に両側より剥離を行いつまみ部を作出したものである。（335）は錘状に尖端部を成形する。（336）は三角形状の尖端につまみが設けられる。対して（337）は逆三角形状であり、調整が縁辺部のみに留まっているため、裏面に素材時の剥離面が残される。（338）は弧状に刃部を作出したものである。これらは全てA区で出土しているほか、張質安山岩製である。

スクレイパー（339～347）

（339）は円礫を分割し、一端に連続的な剥離を行い刃部を作出したものである。剥離は側面にも行われるが、剥離角や部位から、刃部と考えるよりも柄に装着する際の成形によるものと考えられる。（340）は薄手の剥片の側縁及び末端に刃部を設定したものである。（342，343）は砂岩製であり、どちらも側縁に刃部調整を行っている。（346）は礫面除去の際に作出された剥片の末端部に刃部を設けたものである。（347）は石核成形の際の厚い剥片の側縁に調整を加えたものである。

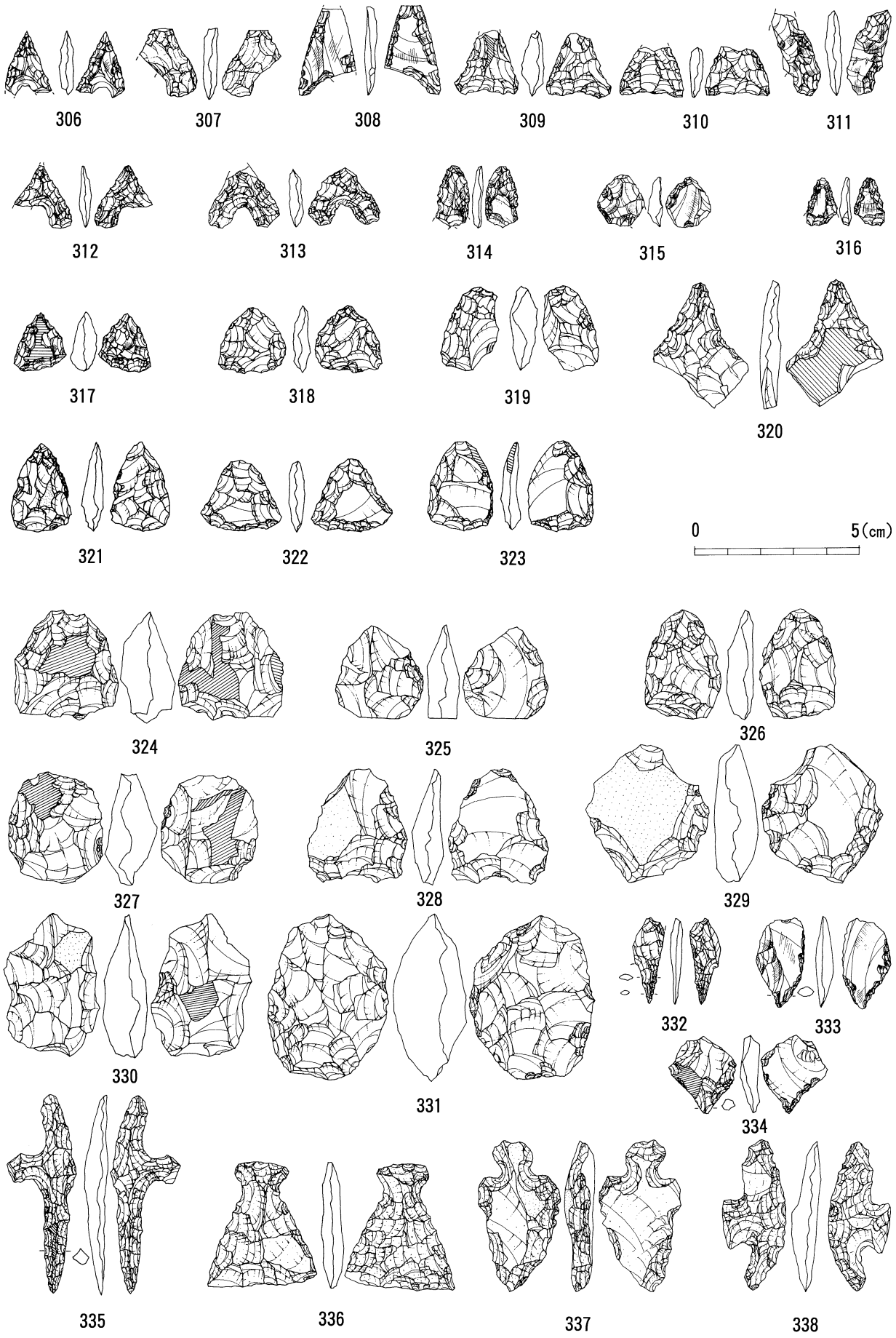
石斧（348～352）

（348）は小型の石斧である。器面はローリングが激しいものの、刃部付近は磨きによる成形が行われた痕跡が認められる。（350）は刃部に研磨痕が顕著に残される。（349，351，352）は剥離による大まかな成形を行ったのち、敲打を主に縁辺部に行い、刃部に部分的な研磨を加える。（351，352）はA区南部にて密接した位置から確認された。

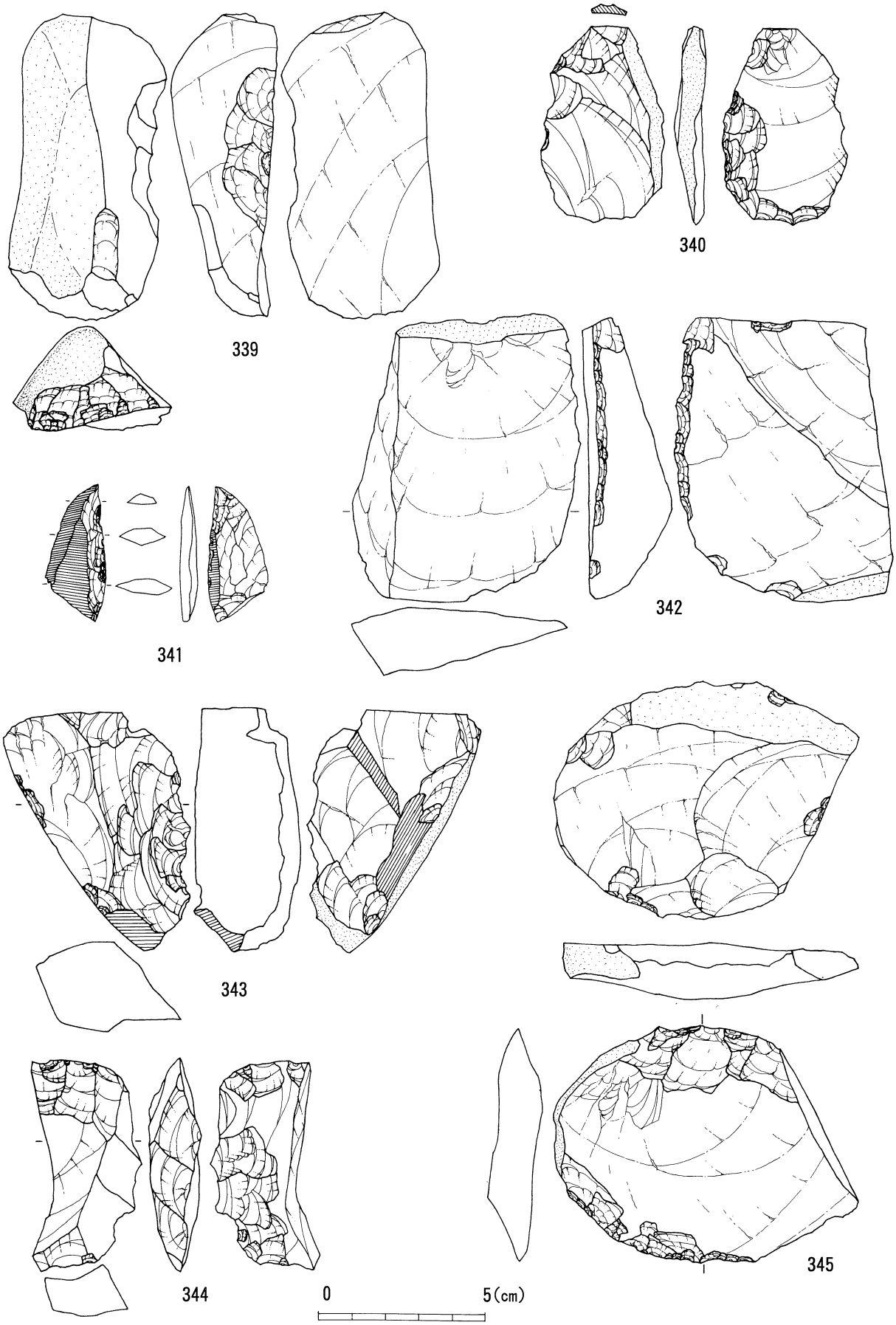
剥片（353～359、368）

剥片類は多量に確認されたが、ここではごく一部のみ図示し紹介したい。

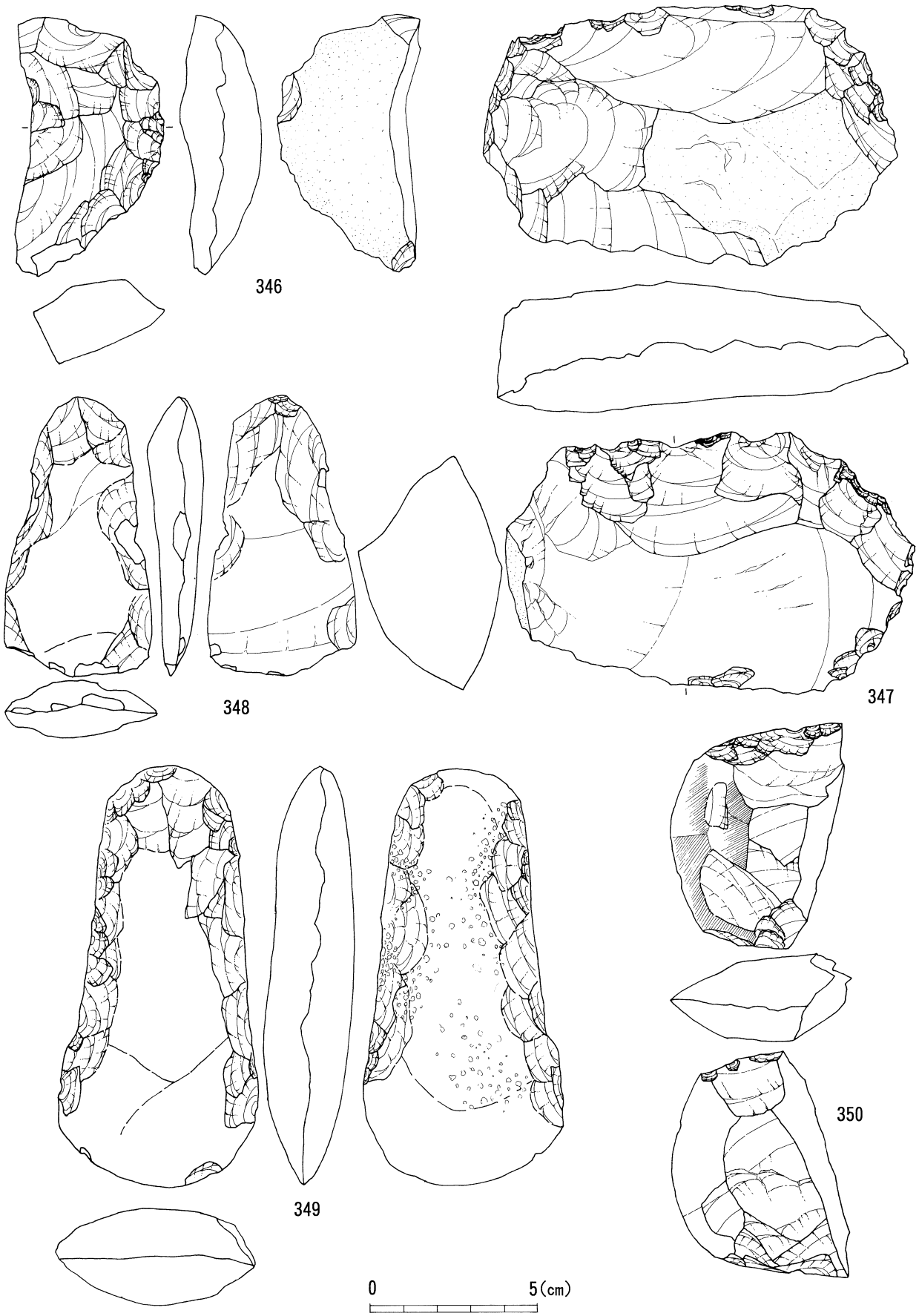
（353）は縦長剥片を連続的に剥離する際に作出されたものである。縁辺部が刃こぼれ状に剥離しており、使用痕である可能性が高い。（354、355）は二次加工が両面に行われる。（356）は薄手の剥片の側縁に刃こぼれ状の使用痕が残る。（357）の縁辺には連続的な小剥離痕が認められるが、これは使用痕ではなく、二次的な加工によるものと考えられる。（358）は厚手の剥片の両面に面的な調整を行ったものである。（359）は斜軸状に剥離された剥片である。打点が二次加工により除去されている。（368）は打面を転移しながら剥離された、極めて薄手の剥片である。二次的な加工が両面に行われる。



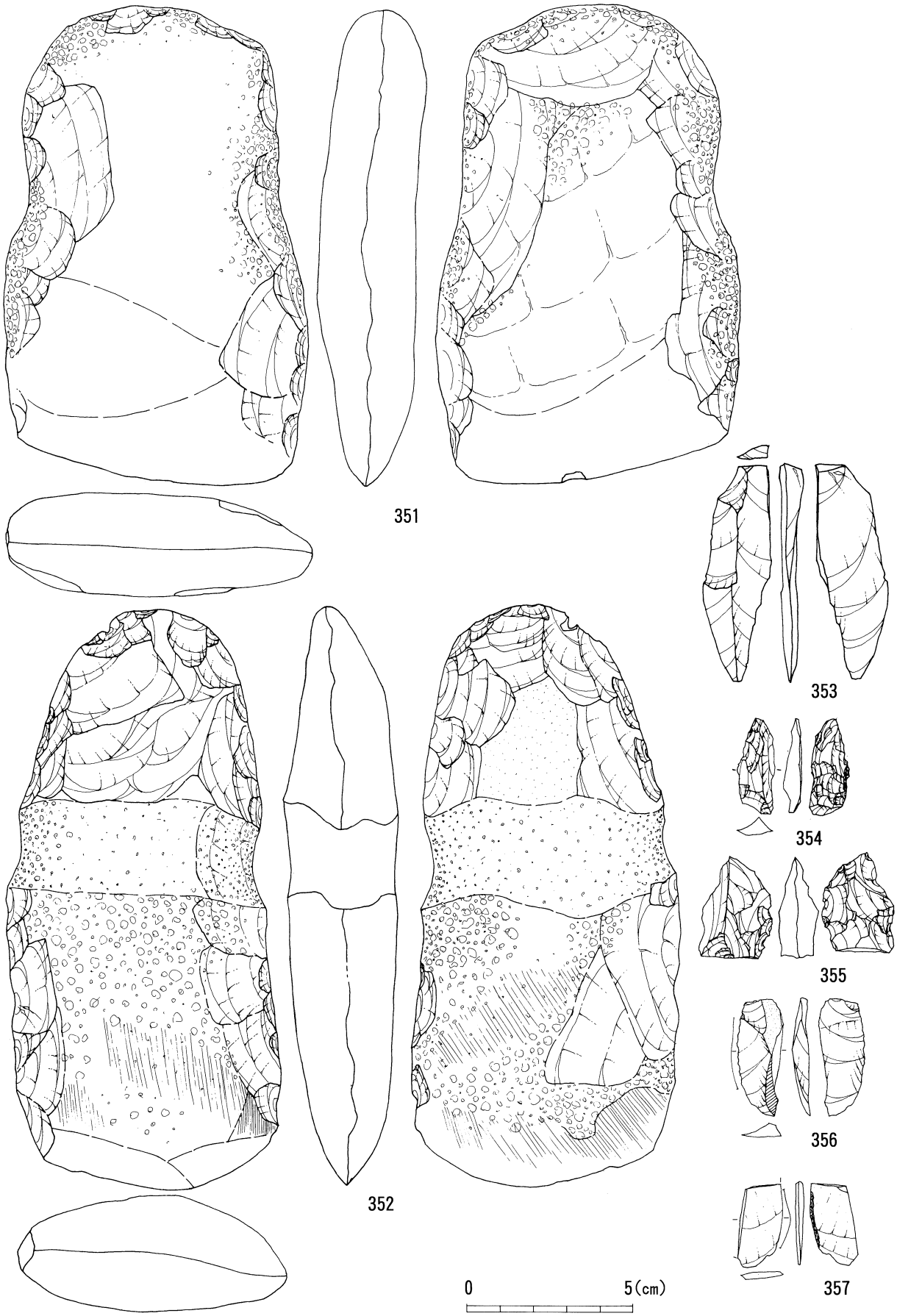
第48図　出土石器実測図



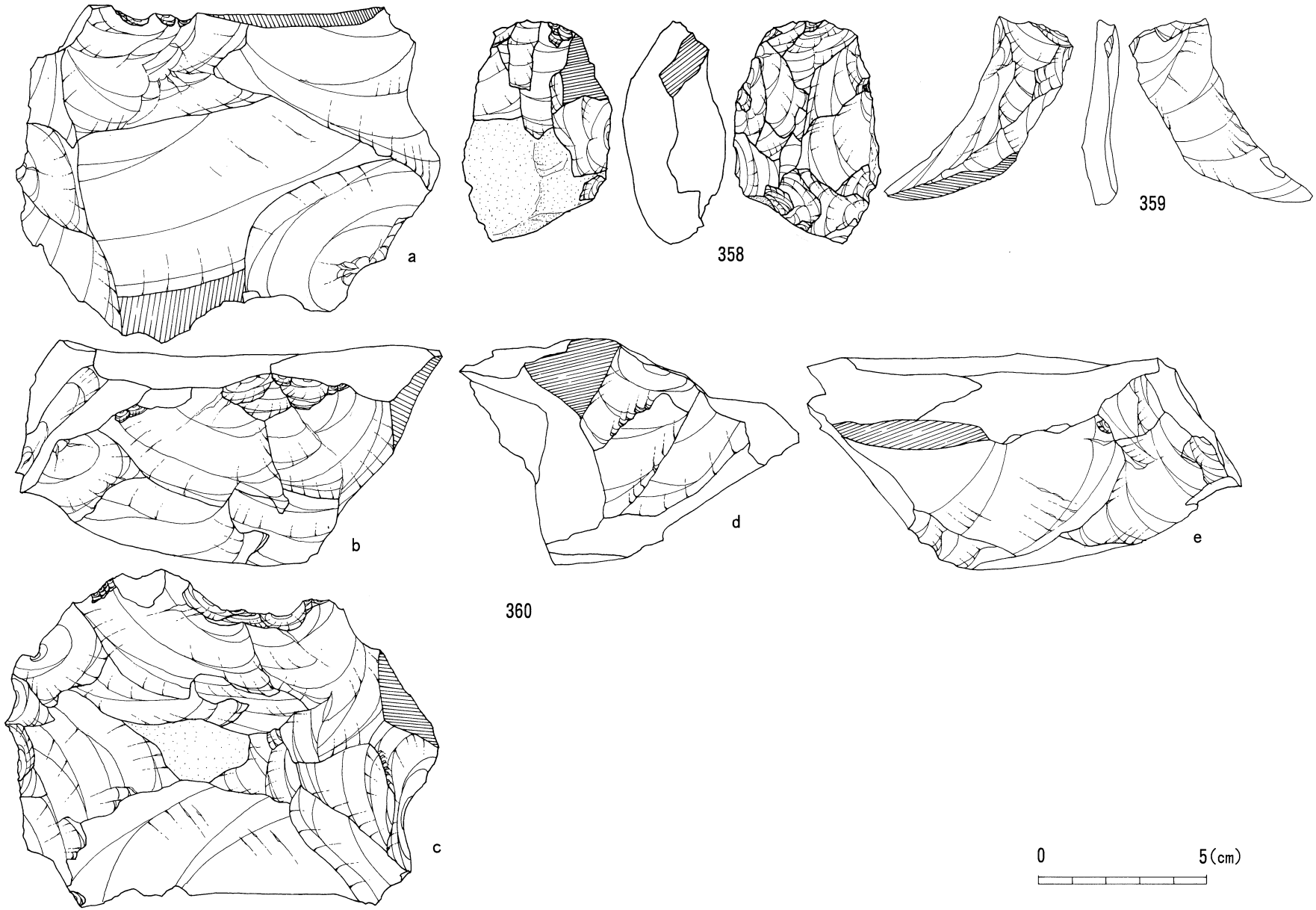
第49図　出土石器実測図



第50図　出土石器実測図



第51図　出土石器実測図



第52図　出土石器実測図

石核（360）

ａ面を打面とし、ｂ面に連続的な加撃を行いながら打点を後退させた石核である。ｃ面、ｄ面の剥離痕は、石核成形段階のものと考えられる。ｂ面に残される剥片剥離の規模はまちまちであり、目的が希薄である。

礫器（361）

円礫を用い、薄手になる一端に剥離を行い刃部としたものである。剥離は部分的に密になるものの、全体的に一定の間隔を置きながら加撃が行われており、刃部が鋸歯状になるよう配慮される。

原石（364）

張質安山岩、いわゆるサヌカイトの原石である。一端に数回の剥離が行われる以外は剥離作業を全く行わず、原礫のまま遺跡内に持ち込んだものと考えられる。

磨石（365～367）

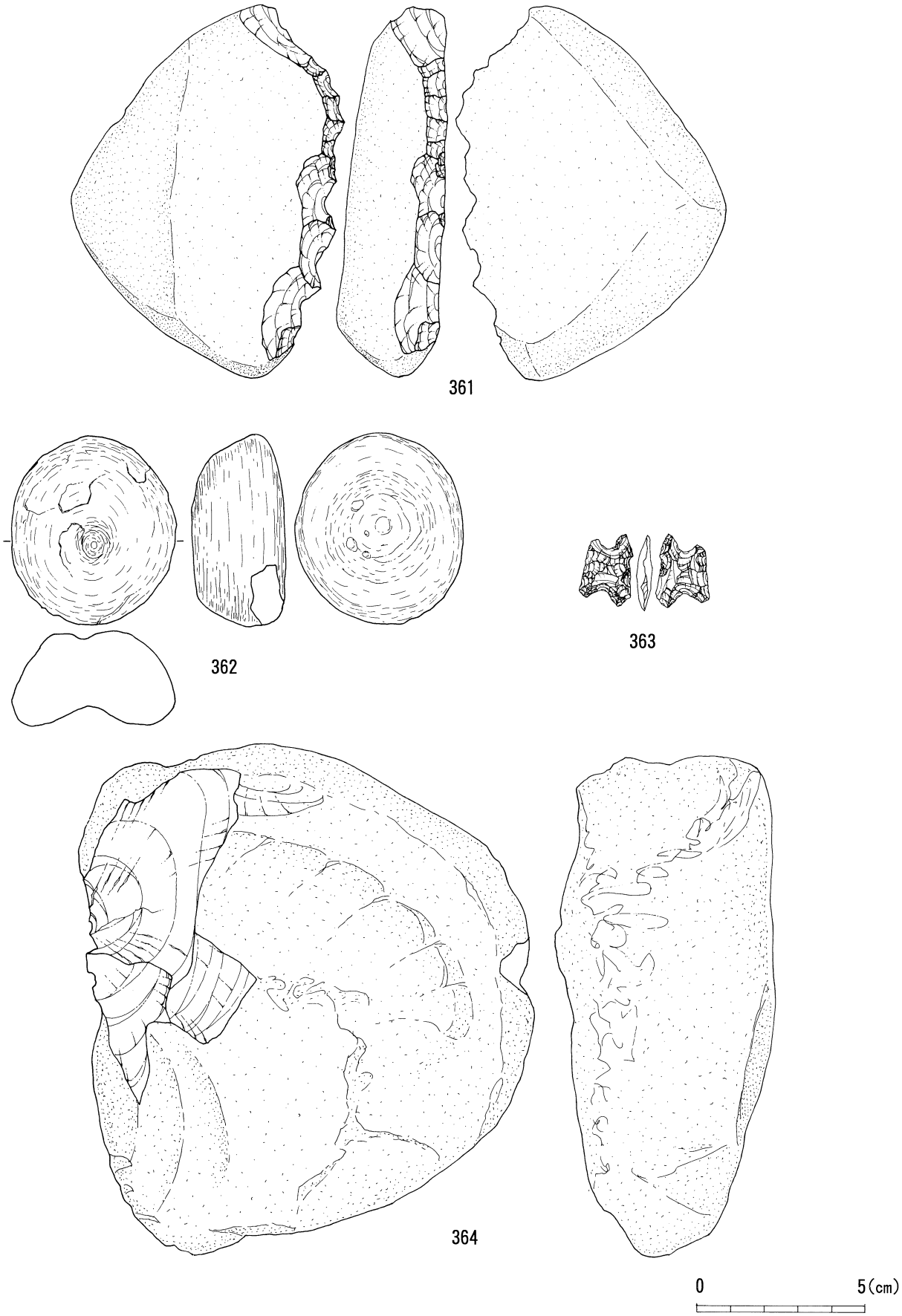
いずれも砂岩製である。（365）は円礫を用い、縁辺部に顕著に使用による敲打痕が認められる。（366）も同じく円礫であるが、縁辺部に敲打痕はなく、平坦部に研磨痕が認められる。（367）は縁辺部には敲打痕が、平坦部には研磨痕がそれぞれ顕著に残される。平坦部にはこのほか、敲打による使用痕も僅かに見ることができる。

用途不明石器（362，363，369～371）

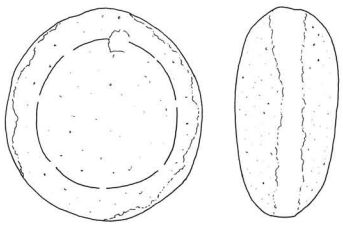
（362）は両面共に中央が窪んだものであるが、加工によるものではない。（363）は両面に剥離を行い、アルファベットのＨにも似た形状を呈すが、目的は不明である。（369～371）も人為的な加工を行った痕跡がなく、用途を伺い知ることはできない。（369）は叩き石のような形状であるが、重量が見た目以上に大きく、叩き石としての使用は不可能である。

古代の土器（第46図241～243）

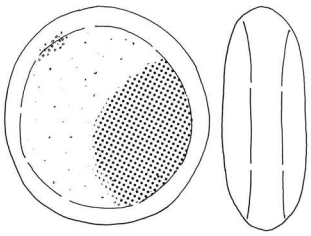
（241，242）は須恵器である。外面は格子目の叩きが行われており、内面にも叩きが行われた痕跡が残る。器壁は厚い。（243）は内面に布の痕跡が残る土師器である。



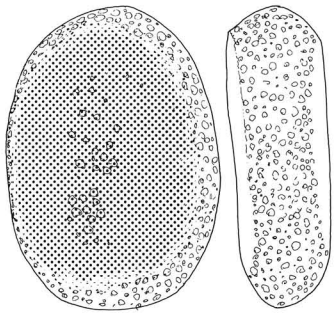
第53図　出土石器実測図



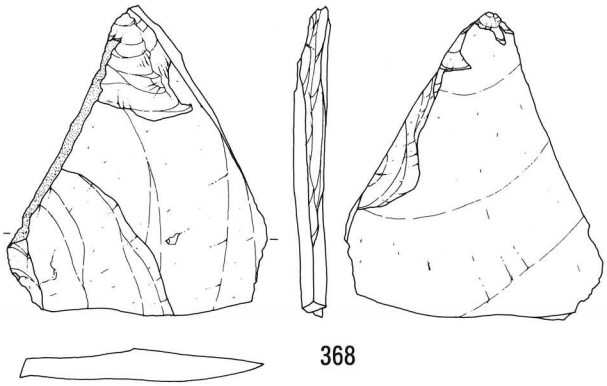
365



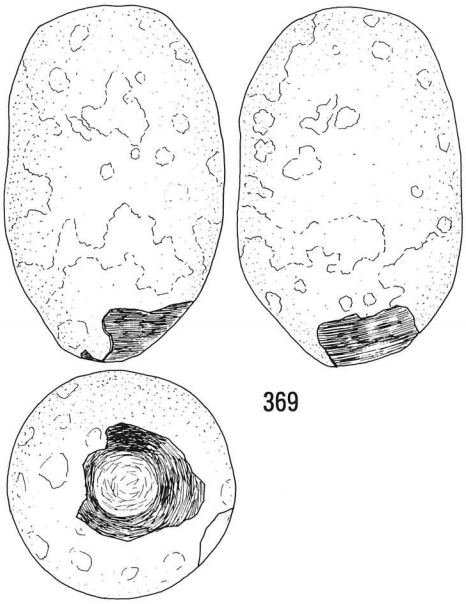
366



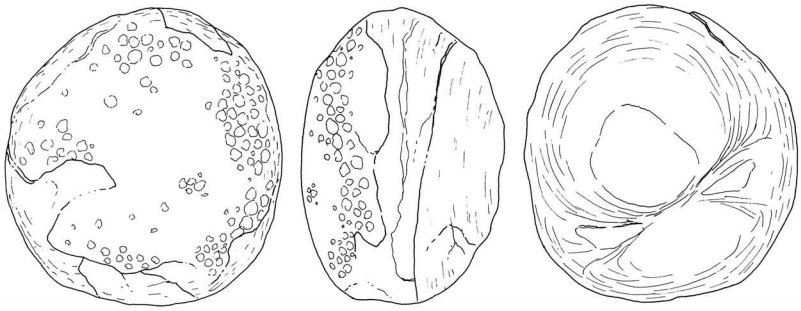
367



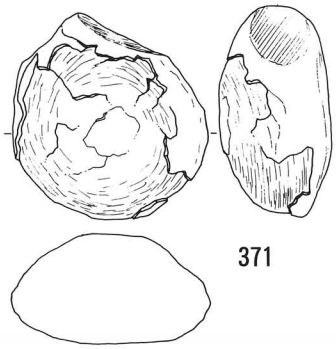
368



369



370



371

0　5　10(cm)

第54図　出土石器実測図

No.	出土区	品　種	長さ（打面長）	幅（打面幅）	厚さ（作業面長）	石　材	備　考
1	F区	ナイフ形石器	4，2	1，8	1，1	チャート	
2	E区	ナイフ形石器	3，4	1，2	0，5	流紋岩－2	
3	C区攪乱	角錐状石器	9，4	3，05	0，95	流紋岩－1	
4	C区攪乱	剥片尖頭器	10，3	3，15	1，3	砂岩	
5	C区攪乱	角錘状石器	10，3	3，2	1，9	硬質頁岩	
6	E区表採	三稜尖頭器	10，3	2，6	1，9	張質安山岩	三面加工
7	E区	槍先形尖頭器	11，4（欠損）	2，25	1，1	流紋岩－1	
8	B区	尖頭器	2，55（欠損）	2，2	0，65	安山岩質	
9	A区	細石刃核	1，5	1，6	1，1	黒曜石	
10	E区	細石刃核	2，2	0，65	0，5	黒曜石	
11	C区攪乱	スクレイパー	6，9	4，95	2，2	硬質頁岩	刃部は短軸
12	C区攪乱	スクレイパー	4，6	2，5	1，75	チャート	石核転用
13	C区攪乱	二次加工剥片	6，85（欠損）	3，1	1，9	硬質頁岩	
14	C区攪乱	剥片	3，3	4，3	1，4	不明	表面被熱
15	C区攪乱	剥片	7，9	4，05	2，35	硬質頁岩	
16	C区攪乱	剥片	7，4	5，0	1，95	流紋岩－1	
17	C区攪乱	剥片	7，3	4，3	2，1	砂岩	
18	C区攪乱	剥片	8，15	3，95	1，7	砂岩	
19	E区	剥片	8，2	5，1	2，1	硬質頁岩	
20	E区	剥片	5，3	4，25	2，2	硬質頁岩	
21	E区	剥片	5，6	3，0	1，3	硬質頁岩	
22	E区	剥片	7，25	4，3	1，9	硬質頁岩	

＊石材の名称については
金丸武司1999「宮崎平野の旧石器時代の石材利用状況について」
『九州地方における石器石材と旧石器時代文化研究（Ⅰ）』
九州旧石器文化研究会　第24回研究会　発表要素集　に従う。

表２　出土石器観察表（１）

胎土（長石：A．角閃石：B．白色粒：C．石英：D．砂粒：E．雲母片：F．多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
23	E区	口縁部	ナデ→爪形刺突	横ナデ	5Y7／1	A：多、B：少、C：多	
24	E区	口縁部	突帯貼付→爪形刺突	ナデ	2，5Y6／2	A：多、B：少、C：多	23と同一個体
25	E区	胴部	突帯貼付→爪形刺突	ナデ	2，5Y7／3	A：多、B：少、C：多	23と同一個体
26	A区	胴部	突帯貼付→爪形刺突	不明	10YR8／4	A：少、B：微、C：多	
27	F区	胴部	微隆帯貼付→刺突→ナデ	横ナデ	2，5Y8／3	A、B、C：多、E：少	
28	E区	胴部	微隆帯貼付→刺突→ナデ	ナデ	10YR8／4	A、B、C：多、E：少	
29	A区	口縁部	突帯貼付→貝殻腹縁押引	ナデ	10YR7／3	A、B：多、C：少	
30	F区	口縁部	ナデ→条痕、刺突	横ナデ	5YR5／6	A：多、C：多、E：多	
31	F区	口縁部	横ナデ→貝殻腹縁刺突	横ナデ	7，5YR5／4	A：多、C：少	
32	E区	口縁部	横ナデ→爪形刺突	横ナデ	10YR6／4	A：多、B：少、C：多	
33	E区	胴部	横ナデ	ナデ	10YR6／4	A：少、B：少、C：多	
34	B区	口縁部	斜二枚貝条痕→刺突	横ケズリ	2，5Y5／2	A：多、B、C：少	
35	B区	口縁部	斜二枚貝条痕→刺突	横ケズリ	10YR8／4	A：多、C：少	
36	F区	口縁部	斜二枚貝条痕→刺突	ナデ	2，5Y8／4	A：多	
37	E区	口縁部	斜二枚貝条痕→刺突	ナデ	10YR8／4	A、B：多、C：少	
38	A区	胴部	斜方向条痕	縦ナデ	10YR7／4	A、B、C：多	
39	E区	胴部	斜方向条痕→ミガキ	ミガキ	10YR8／4	A、B、C：多	
40	F区	胴部	ミガキ→斜二枚貝条痕	横ミガキ	2，5Y7／3	A：多、E：少	
41	E区	口縁部	横条痕→貝殻腹縁刺突	斜条痕	7，5YR6／8	A：多、B：少、C：多	
42	A区	口縁部	連点→深い条痕	横ナデ	2，5Y8／4	AB：多,C：少,E：少	
43	A区	口縁部	連点→深い条痕	横ナデ	2，5Y8／4	AB：多,C：少,E：少	41と同一個体
44	A区	口縁部	連点→横方向深い条痕	斜条痕→ナデ	10YR7／6	A：少、B、C：多	
45	A区	口縁部	連点→斜方向条痕	横条痕→ナデ	10YR7／4	AB：多、C：少	
46	A区	口縁部	連点→横方向条痕	縦ナデ	2，5Y7／4	A：多、B、C：少	
47	E区	口縁部	工具刺突→横条痕	縦条痕	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：多	
48	A区	口縁部	連点→横方向条痕	横ナデ	5YR7／8	A，B：多、C：少	
49	E区	口縁部	横ナデ→押引	不定方向ナデ	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	
50	F区	胴部	斜方向条痕→ナデ	ナデ	10YR8／4	A：多、B：少、C：多	
51	A区	胴部	斜方向深い条痕	縦ナデ	2，5Y8／4	A：多、B：少、C：多	
52	A区	胴部	斜方向深い条痕	縦ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：多	51と同一個体
53	A区	底部	横方向条痕→縦方向条痕	縦粗いナデ	5YR6／6	A：多、B、C：少	
54	F区	口縁部	横ナデ→貝殻腹縁押引	横丁寧なナデ	10YR7／6	A：多、B、C：少	
55	E区	口縁部	ナデ→羽状沈線	ナデ	10YR6／6	B：微、CF：多、E：少	
56	E区	口縁部	ナデ→羽状沈線	横ナデ	7，5YR5／6	B：微、CF：多、E：少	
57	A区	口縁部	羽状沈線	横ナデ	2，5Y8／4	A：多、B、C：少	
58	E区	胴部	ナデ→羽状沈線	縦ケズリ	7，5YR4／4	A：多、B：少、C：多	
59	A区	口縁部	ナデ→刺突	ミガキ	5YR6／6	ABD：少、CE：多	
60	A区	口縁部	横ナデ→斜位の刺突	入念なミガキ	10YR4／2	A、C：多、F：少	
61	F区	口縁部	ナデ→横位の刺突	横ミガキ	7，5YR5／6	A、C、F：少	
62	F区	胴部	ナデ→羽状刺突	横ナデ	7，5YR6／4	A：少、B：少、C：多	
63	E区	胴部	刺突→ケズリ	縦ケズリ	7，5YR6／6	A、E：少、C、F：多	
64	A区	胴部	ナデ→羽状刺突	ナデ	10YR5／4	C：多、E：少	
65	A区	胴部	ナデ→羽状刺突	ミガキ	10YR5／3	C：多、E：多	
66	E区	胴部	刺突→ケズリ	縦ケズリ	7，5YR6／6	A、E：少、C、F：多	63と同一個体
67	E区	胴部	刺突→ケズリ	縦ケズリ	7，5YR6／6	A、E：少、C、F：多	63と同一個体
68	F区	胴部	ナデ→刺突	横ミガキ	7，5YR6／6	A：多、B：少、C：多	
69	F区	底部	ナデ→刺突	横ミガキ	7，5YR6／6	A：多、B：少、C：多	
70	A区	胴部	縦ナデ→貝殻腹縁刺突	縦入念なナデ	5YR6／6	A：多、B：少、C：多	
71	E区	口縁部	ナデ→羽状刺突	横ミガキ	5YR6／8	A：多，B：多、C：少	
72	F区	口縁部	ナデ→羽状刺突	入念なミガキ	5YR5／6	A：多、B：少、C：多	
73	F区	胴部	ナデ→刺突	横ミガキ	7，5YR6／6	A：多、B：少、C：多	

表3　出土土器観察表（1）

胎土（長石：A．角閃石：B．白色粒：C．石英：D．砂粒：E．雲母片：F．多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
74	F区	口縁部	ナデ→棒状工具刺突	入念なミガキ	5YR5／6	A：多、B：少、C：多	
75	E区	口縁部	横ナデ→沈線	縦ミガキ	7，5YR5／8	A：少、B：少、C：多	
76	F区	口縁部	横ナデ→貝殻腹縁刺突	横ナデ	2，5Y6／3	A、B：少、C、E：多	
77	F区	口縁部	粗い横ナデ→刺突	ミガキ	10YR7／6	A：少、C：多、F：多	
78	E区	口縁部	ナデ→沈線、刺突	横ナデ	7，5YR7／6	A：多、B、C：少	
79	F区	口縁部	縦位の楕円押型文	横ナデ→押型	10YR7／4	A、B、C：多、F：少	穿孔有り
80	F区	口縁部	縦位の楕円押型文	横ナデ→押型	10YR2／1	A：多、B：多、C：多	穿孔有り
81	F区	口縁部	縦位の楕円押型文	横位楕円押型	10YR5／6	A：多、B、C、E：少	口唇部押型
82	A区	口縁部	縦位の楕円押型文	横位楕円押型	2，5Y5／2	A：多、B：少、C：多	口唇部押型
83	F区	口縁部	ナデ→縦位楕円押型文	横ナデ→押型	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	口唇部押型
84	A区	胴部	縦位の楕円押型文	縦粗いナデ	10YR6／4	A：少、C：多、F：多	
85	F区	胴部	縦位の楕円押型文	横ナデ	7，5YR7／6	A：少、B：少、E：少	
86	A区	胴部	縦位の楕円押型文	ナデ	10YR7／6	A、D：少、B、E：多	
87	F区	胴部	縦位の楕円押型文	ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	内面に煤付着
88	F区	胴部	縦位の楕円押型文	ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	
89	F区	胴部	縦位の楕円押型文	横ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：多，C：多	
90	E区	口縁部	横位の楕円押型文	押型→沈線	2，5Y7／3	A：多、B：少、C：多	口唇部無文
91	E区	胴部	横位の楕円押型文	横ナデ	2，5Y7／4	A：多、B：多、C：少	
92	E区	胴部	横位の楕円押型文	横ナデ	2，5Y7／4	A：多、B：多、C：多	91と同一個体
93	F区	胴部	横位の楕円押型文	横ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：多，C：多	
94	A区	胴部	ナデ→横位の楕円押型文	ナデ→押型	5YR5／6	C：多、D：少、E：少	
95	A区	胴部	横位の楕円押型文	横ナデ	7，5YR6／6	A：少、C：多、F：多	
96	A区	胴部	横位の楕円押型文	縦ナデ	5YR6／8	A：多、B、C、E：少	
97	A区	口縁～	縦位の粗大な楕円押型文	横ナデ→押型	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	穿孔有り
98	F区	口縁部	縦位の粗大な楕円押型文	横粗いナデ	7，5YR6／4	B：少、C、D、F：多	口唇部刻目
99	F区	胴部	粗大な楕円押型文	粗いナデ	2，5Y4／6	A：多、D：少、F：多	
100	F区	胴部	粗大な楕円押型文	粗いナデ	10YR6／4	A、F：多、C、E：少	
101	F区	胴部	粗大な楕円押型文	粗いナデ	10YR6／4	A、F：多、C、E：少	100と同個体
102	A区	胴部	粗大な楕円押型文	ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	
103	F区	口縁～	横ナデ→斜位の楕円押型	横ナデ→押型	7，5YR7／6	A、C：多、B、D：少	口唇部押型
104	F区	口縁部	ナデ→楕円押型文	横ナデ→押型	5YR6／8	A：多、B：少、C：多	口唇部押型
105	F区	口縁部	横ナデ	横位の楕円文	7，5YR7／3	A：少、E：多	口唇部押型
106	F区	口縁部	横ナデ	横位の楕円文	7，5YR7／3	A：少、E：多	105と同個体
107	F区	口縁部	横ナデ	横位の楕円文	7，5YR7／3	A：少、E：多	105と同個体
108	F区	口縁部	不定方向ナデ→楕円押型	横ナデ→押型	5YR4／4	A：少、C：多、F：少	口唇部押型
109	F区	口縁部	横ナデ→斜位の楕円押型	横ナデ→押型	5YR4／6	A、C、E：多、B：少	口唇部押型
110	F区	頚部	ナデ→楕円押型文	ケズリ→押型	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	
111	F区	胴部	斜位の楕円押型文	横ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	
112	E区	口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	波状口縁
113	E区	口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7／4	A、C、F：多、B：少	112と同個体
114	E区	口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7／4	A、C、F：多、B：少	112と同個体
115	E区	口縁部	横位の山形押型文	山形押型	10YR7／4	A、C、F：多、B：少	112と同個体
116	A区	胴部	横位の山形押型文	横粗いナデ	5YR6／8	D：多、F：多	
117	A区	胴部	横位の山形押型文	ナデ	2，5Y8／4	A：少、B：多、C：多	
118	A区	胴部	横位の山形押型文	ナデ	2，5Y8／4	A、B、C：多、E：少	118と同個体
119	A区	胴部	横位の山形押型文	不明	2，5Y8／4	A：少、B：多、C：多	
120	A区	胴部	縦位の山形押型文	ナデ	7，5YR6／4	A：少、C：少、F：少	
121	E区	胴部	主に縦位の山形押型文	横ナデ	7，5YR6／6	A、B、E：多、C：少	
122	E区	胴部	主に縦位の山形押型文	横ナデ	7，5YR6／6	A、B、E：多、C：少	121と同個体
123	E区	胴部	主に縦位の山形押型文	横ナデ	7，5YR6／6	A、B、E：多、C：少	121と同個体
124	A区	口縁部	上縦、下横の山形押型	横ナデ→押型	7，5YR6／6	C：多、E：少、F：多	

表4　出土土器観察表（2）

胎土（長石：A．角閃石：B．白色粒：C．石英：D．砂粒：E．雲母片：F．多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
125	F区	口縁部	横ナデ→斜位の山形押型	横ナデ→押型	10YR4／4	B：少、E：少、F：多	口唇部押型
126	F区	胴部	不定方向山型押型文	横ナデ	10YR8／4	A：少、B：少、F：多	
127	F区	胴部	横位の山型押型文	ナデ	10YR7／4	A：多、B：少、E：少	
128	E区	胴部	縦位の山型に近い押型文	ナデ	10YR8／4	A：少、B：少、F：多	
129	E区	胴部	ナデ→斜位の押型文	横粗いナデ	7，5YR7／6	C：多、F：少	
130	C区	胴部	押型文	不明	7，5YR8／6	A：少、B：多、C：少	
131	F区	頸部	縦位の菱形押型文	横ナデ	5Y4／2	A：多、C：多、E：少	
132	F区	頸部	縦位の山型押型文	ナデ→押型	10YR7／3	A：多、B：多	
133	B区	口縁部	縦位の山型押型文	山型押型文	7，5YR3／3	A：多、B：多、C：多	口唇部不明
134	B区	頸部	縦位の山型押型文	不明	7，5YR3／3	A：多、B：多、C：多	
135	F区	口縁部	山型押型→棒状工具沈線	横ナデ→押型	2，5Y7／3	A：多、F：少	口唇部刺突
136	F区	頸部	突帯貼付→刻み目、沈線	ナデ	2，5Y8／6	A：多、B：多、C：多	器形は浅鉢形
137	A区	口縁部	突帯貼付→横条痕→刺突	ナデ	10YR6／4	A、B、C：多、E：少	波状口縁
138	A区	口縁部	突帯貼付→横条痕→刺突	ナデ	10YR6／4	A、B、C：多、E：少	137と同個体
139	A区	口縁部	突帯貼付→横条痕→刺突	ナデ	10YR6／4	A、B、C：多、E：少	137と同個体
140	A区	頸部	ナデ→突帯貼付→沈線	ナデ	7，5YR7／6	A、B、C：多、E：少	137と同個体
141	A区	胴部	縄文→突帯貼付	粗いナデ	10YR4／6	AB：少、C：多F：微	
142	A区	口縁部	突帯→沈線・刻目→ナデ	ナデ	10YR8／4	A：多、B、C、E：少	
143	F区	口縁部	突帯→沈線・刻目→押型	刻目→押型	10YR7／4	A：少、B：少、E：少	
144	A区	口縁部	突帯→ナデ→沈線・刺突	入念なナデ	10YR7／4	A、D：少、C、F：多	口唇部刺突
145	A区	口縁部	横ナデ→刺突→沈線	横ナデ	5Y6／6	A：多、BC：少F：微	口唇部刻目
146	A区	口縁部	突帯貼付→ナデ→沈線	横ナデ	7，5YR6／6	D：多、F：多	口唇部刻目
147	E区	頸部	ナデ→沈線、刺突	横ナデ	2，5Y8／4	A：多、B、C、E：少	
148	E区	頸部	突帯貼付→沈線・刺突	ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	147と同個体
149	A区	胴部	隆帯→沈線・連点	横ナデ	7，5YR7／6	A：少、B：少、C：多	
150	D区	胴部	沈線	ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：多	
151	F区	胴部	突帯貼付→沈線、刺突	ナデ	10YR7／4	A、C、E：多、F：少	
152	F区	胴部	沈線、刺突	ナデ	10YR7／4	A、C、E：多、F：少	
153	F区	胴部	沈線、刺突	横粗いナデ	10YR7／4	A、C、E：多、F：少	
154	A区	頸部	沈線、刺突	横粗いナデ	10YR7／4	A、C、E：多、F：少	
155	A区	口縁部	縄文→刻目	不明	2，5Y6／2	A：多、B：多、C：多	
156	F区	口縁部	横ナデ→沈線・刻目	ナデ	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	
157	A区	胴部	突帯貼付→刻目→撚糸	横ナデ	10YR5／3	A：多、B：少、E：少	
158	C区	胴部	沈線・刺突→撚糸	ナデ	7，5YR5／8	A：少、B：多、E：多	
159	A区	口縁部	ナデ→沈線	横ナデ	5YR6／8	A：多、B：少、C：多	口唇部刻目
160	A区	口縁部	ナデ→沈線	横ナデ	5YR6／8	A：多、B：少、C：多	159と同個体
161	A区	口縁部	ナデ→沈線	横ミガキ	5YR6／8	A：多、B：少、C：多	159と同個体
162	E区	胴部	横ナデ→撚糸→沈線	横ナデ	10YR8／4	A：多、B：少、E：少	
163	E区	胴部	ナデ→撚糸→沈線	横入念なナデ	10YR6／4	A：多、B：少、C：多	
164	F区	胴部	横ナデ→撚糸	横ナデ	10YR7／3	A：多、B：少、E：少	
165	F区	胴部	ナデ→沈線→縄文	不明	10YR6／3	A：多、B：少、C：多	
166	F区	胴部	ナデ→沈線→縄文	不明	2，5Y7／4	D：多、F：多	
167	F区	胴部	ナデ→沈線→縄文	不明	10YR7／4	D：多、F：多	
168	F区	胴部	ナデ→沈線→縄文	不明	2，5Y8／4	A：少、C：多、F：多	
169	F区	胴部	沈線→ナデ→縄文	ナデ	2，5Y3／2	AF：少、B：微C：多	
170	A区	頸部	ナデ→沈線→刺突	横ミガキ	10YR6／2	C：多、D：少、F：多	
171	A区	口縁部	貝殻腹縁押引	横入念なナデ	2，5Y8／6	C：少、E：多	口唇部刻目
172	E区	口縁部	横ナデ→貝殻腹縁刺突	横ナデ	5YR6／6	A：多、B、C、E：少	口唇部刻目
173	A区	頸部	横条痕→貝殻腹縁押引	横ミガキ	7，5YR6／6	A：多、B：少、C：多	
174	A区	口縁部	沈線→ナデ	横ナデ	10YR6／4	A：多、B：多、C：少	口唇部刻目
175	A区	口縁部	沈線→ナデ	横ナデ	10YR6／4	A：多、B：多、C：少	174と同個体

表5　出土土器観察表（3）

胎土（長石：A．角閃石：B．白色粒：C．石英：D．砂粒：E．雲母片：F．多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
176	F区	口縁～	突帯→櫛場沈線→刺突	横条痕→ナデ	7，5YR6／3	A、C：多、B、E：少	波状口縁
177	F区	口縁～	突帯→櫛場沈線→刺突	横条痕→ナデ	7，5YR6／3	A、C：多、B、E：少	176と同個体
178	F区	胴部	突帯→櫛場沈線→刺突	横条痕→ナデ	7，5YR6／3	A、C：多、B、E：少	176と同個体
179	C区	口縁～	縦位条痕→横位条痕	斜条痕→ナデ	7，5YR8／4	A：多、B：少、C：少	口縁部刻目
180	C区	口縁～	縦位条痕→横位条痕	斜条痕→ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	179と同個体
181	B区	口縁部	不定方向条痕	横条痕	7，5YR7／6	A：少、B：少、C：多	
182	A区	口縁部	横ナデ→刺突	横ナデ	5YR5／6	A、B、E：多、C：少	
183	B区	胴部	斜方向条痕	ナデ	7，5YR7／6	A：少、B：少、C：多	
184	C区	底部	ナデ→横条痕	ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	
185	C区	口縁～	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	7，5YR7／6	A：少、B：多、C：少	口縁部刻目
186	C区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	7，5YR7／6	A：少、B：少、D：多	185と同個体
187	A区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	横ナデ→条痕	10TR6／3	A：多、B：微、D：少	
188	C区	胴部	工具ナデによる微隆帯か	丁寧なナデ	10YR7／4	A：多、B：少、C：少	
189	C区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	10YR8／3	A：少、B：少、D：多	185と同個体
190	F区	口縁部	ナデ→縄文	横ナデ→縄文	2，5Y7／3	A：多、B：少、C：少	口唇部縄文
191	F区	口縁部	ナデ→縄文	横ナデ→縄文	”2,5Y1,7／1”	A：多、B：少、C：少	口唇部縄文
192	F区	口縁部	縄文	横ナデ→縄文	2，5Y4／2	A：多、C：少	口唇部縄文
193	F区	口縁部	ナデ→縄文	横ナデ→縄文	”2,5Y1,7／1”	A：多、B：少、C：少	191と同個体
194	F区	胴部	ナデ→縄文	ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：多	
195	F区	口縁部	ナデ→撚糸	横ナデ	7，5YR8／4	A：多、B：少、C：少	口唇部無文
196	F区	胴部	粗いナデ→撚糸	不明	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	
197	F区	胴部	ナデ→撚糸	横入念なナデ	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	
198	A区	口縁部	入念なナデ	ミガキ→条痕	10YR7／4	C：多、C：少、F：多	器形は壺形
199	A区	肩部	ナデ→沈線	ナデ	7，5YR6／6	A：多、B：少、C：多	器形は壺形
200	A区	肩部	不明	不明	7，5YR7／6	A：多、B：多、C：少	器形は壺形
201	A区	肩部	不明	不明	10YR7／4	A：多、B：多、C：少	器形は壺形
202	A区	肩部	不明	不明	2，5Y4／2	A：多、B：多、C：少	器形は壺形
203	A区	肩部	不明	不明	2，5Y4／2	A：多、B：多、C：少	器形は壺形
204	A区	肩部	不明	不明	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	器形は壺形
205	A区	口縁部	不明	不明	2，5Y7／3	A：少、C：少	口唇部押圧
206	A区	口縁部	ナデ	ナデ	7，5YR8／6	A：多、C：多、E：多	
207	E区	口縁部	横ナデ	横入念なナデ	10YR7／4	A：多、C：多	
208	A区	口縁部	横ナデ	横ナデ	10YR8／6	A：多、B：少、C：少	
209	A区	口縁部	横ナデ	横ナデ→沈線	10YR2／2	A：多、B：少、C：少	
210	A区	胴部	沈線→ナデ	ナデ	10YR5／3	A：多、B：多、C：少	
211	A区	胴部	沈線→ナデ	ナデ	10YR8／3	A：多、B：多、C：少	
212	E区	胴部	斜位条痕→沈線	横ナデ	10YR7／4	A：多、B：少、C：少	
213	A区	胴部	斜方向条痕→突帯貼付	横ナデ	2，5Y8／4	A：多、B：多、C：少	
214	A区	胴部	斜位の深い条痕	横ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：少	
215	A区	胴部	斜方向沈線	ナデ	10YR7／4	A：多、B：少、C：多	
216	A区	胴部	ナデ→沈線	横ナデ	10YR6／3	A：多、B：少、C：多	
217	E区	口縁部	横位条痕→横ケズリ	横ナデ	10YR8／4	A：多、B：微、C：少	口唇部ケズリ
218	F区	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刻目	横ナデ	10YR8／4	A：多、C：多	外面に煤付着
219	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刻目	条痕→横ナデ	5Y5／2	A：多、B：少、C：多	220と同個体
220	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刻目	横ナデ	10YR8／4	A：多、B：少、C：多	口縁部突起有
221	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刻目	条痕→横ナデ	5Y5／2	A：多、B：少、C：多	220と同個体
222	F表	口縁部	突帯→ナデ→刻目・押引	横ナデ	10YR8／4	A：多、C：多	
223	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2，5Y8／3	A：多、C：多	外面に煤付着
224	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2，5Y8／3	A：多、C：多	223と同個体
225	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2，5Y8／3	A：多、C：多	223と同個体
226	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2，5Y8／3	A：多、C：多	223と同個体

＊出土区に”表”とあるものは
表面採集による遺物である。

表6　出土土器観察表（4）

胎土（長石：A．角閃石：B．白色粒：C．石英：D．砂粒：E．雲母片：F．多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
227	D区	口縁部	沈線文	横ナデ	5YR6／6	A：多、B：多、C：多	
228	D区	胴部	ナデ→沈線	ナデ	10YR8／3	A：多、B：少、C：少	外面に煤付着
229	D区	胴部	ナデ→沈線	ナデ	7，5YR7／6	A：多、B：少、C：多	
230	E区	胴部	ナデ→沈線	横ナデ	7，5YR6／6	A：多、C：多	
231	B表	胴部	ナデ→突帯貼付	ナデ	7，5YR7／4	A：多、B：少、C：少	
232	D区	胴部	ナデ→突帯貼付	不定方向条痕	7，5YR6／4	C：多、D：少、F：少	
233	E表	胴部	突帯→ナデ→刻目・沈線	横ナデ	7，5YR5／4	A：多、B：多、C：多	
234	D区	口縁部	ナデ→沈線	刷目状の条痕	5YR6／8	A、C、D：少、B：多	
235	D区	口縁部	突帯→縄文→沈線	ナデ	2，5Y8／3	C：少、D：多、E：少	
236	D区	口縁部	縦ケズリ→口縁部横ナデ	横ナデ	10YR5／4	A：多、B：少、C：少	
237	D区	胴部	沈線文	ナデ	7，5YR6／6	A：少、B：少、C：多	
238	D区	胴部	縄文→沈線	横ナデ	10YR6／3	A：多、B：少、C：多	
239	D区	底部	ナデ	ナデ	7，5YR7／4	A：少、C：少	
240	D区	底部	横ナデ	ナデ	2，5Y8／4	A：多、B：少、C：多	
241	E表	胴部	格子目の叩き	叩き	10Y6／1		須恵器
242	E表	胴部	格子目の叩き	叩き	10Y6／1		須恵器
243	E表	胴部	ナデ	布圧痕	10YR8／4		布痕土器

＊出土区に”表”とあるものは
表面採集による遺物である。

表7　出土土器観察表（5）

No.	出土区	品　種	長さ（打面長）	幅（打面幅）	厚さ（作業面長）	石　材	備　考
244	A区	石鏃	3，55	1，95	0，45	張質安山岩	
245	A区	石鏃	3，7	1，6	0，45	張質安山岩	
246	A区	石鏃	3，2	2，1	0，55	張質安山岩	
247	A区	石鏃	2，2	1，6	0，4	張質安山岩	
248	A区	石鏃	1，9	1，55	0，5	張質安山岩	
249	A区	石鏃	2，15	1，3	0，35	張質安山岩	
250	A区	石鏃	2，3	1，45	0，45	姫島黒曜石	
251	A区	石鏃	1，7	1，6	0，4	姫島黒曜石	
252	A区	石鏃	1，65	1，3	0，4	姫島黒曜石	
253	A区	石鏃	1，6	1，35	0，35	姫島黒曜石	
254	A区	石鏃	1，8	1，3	0，3	姫島黒曜石	
255	A区	石鏃	1，5	1，05	0，45	姫島黒曜石	
256	A区	石鏃	2，1	1，2	0，5	姫島黒曜石	
257	A区	石鏃	1，05	1，4	0，4	姫島黒曜石	
258	A区	石鏃	3，3	2，0	0，6	姫島黒曜石	
259	A区	石鏃	1，55	1，55	0，35	姫島黒曜石	
260	A区	石鏃	1，45	1，6	0，35	姫島黒曜石	
261	A区	石鏃	1，45	1，3	0，4	黒曜石	
262	A区	石鏃	3，3	1，85	0，45	黒曜石	
263	A区	石鏃	2，15	1，55	0，35	黒曜石	
264	A区	石鏃	1，95	1，6	0，6	チャート	
265	A区	石鏃	1，65	1，6	0，35	チャート	
266	A区	石鏃	1，9	1，55	0，35	チャート	
267	A区	石鏃	2，95	1，55	0，35	砂岩	
268	A区	石鏃	2，25	1，9	0，5	砂岩	
269	B区	石鏃	2，2	1，85	0，45	砂岩	
270	B区	石鏃	2，2	1，3	0，45	流紋岩－2	
271	B区	石鏃	1，9	1，56	0，4	姫島黒曜石	
272	B区	石鏃	2，55	1，65	0，5	硬質頁岩	
273	C区攪乱	石鏃	2，9	2，2	0，5	チャート	
274	C区攪乱	石鏃	2，7（欠損）	2，5	0，55	チャート	
275	D区攪乱	石鏃	2，1	1，3（欠損）	0，35	硬質頁岩	
276	D区攪乱	石鏃（未製品）	1，3（欠損）	1，45	0，45	黒曜石	
277	E区	石鏃	1，45	1，25	0，35	黒曜石	
278	E区	石鏃	1，5	1，3	0，35	黒曜石	
279	E区	石鏃	2，2	1，15	0，5	黒曜石	
280	E区	石鏃	1，6	1，4	0，7	黒曜石	
281	E区	石鏃	1，2	1，3	0，35	黒曜石	
282	E区	石鏃	1，5	1，15	0，25	チャート	
283	E区	石鏃	2，45	1，55	0，4	チャート	
284	F区	石鏃	1，4	1，5	0，35	チャート	
285	F区	石鏃	1，35	1，4	0，3	姫島黒曜石	
286	F区	石鏃	2，2	1，5	0，4	姫島黒曜石	
287	F区	石鏃	2，4	1，95	0，4	姫島黒曜石	
288	F区	石鏃	1，35	1，05	0，3	黒曜石	
289	F区	石鏃	1，6	1，75	0，45	チャート	
290	F区	石鏃	2，9	2，1	0，55	チャート	
291	F区	石鏃	1，5	1，3	0，4	チャート	
292	F区	石鏃	1，45	1，35	0，45	チャート	
293	A区	石鏃	2，9	1，65（欠損）	0，55	張質安山岩	
294	A区	石鏃	2，0（欠損）	1，5（欠損）	0，45	張質安山岩	

表8　出土石器観察表（2）

No.	出土区	品　種	長さ（打面長）	幅（打面幅）	厚さ（作業面長）	石　材	備　考
295	A区	石鏃	2，8	1，4（欠損）	0，45	姫島黒曜石	
296	A区	石鏃	3，4	1，25（欠損）	0，5	姫島黒曜石	
297	A区	石鏃	2，15（欠損）	2，0	0，4	チャート	
298	A区	石鏃	2，3	1，8（欠損）	0，5	チャート	
299	A区	石鏃	2，05（欠損）	1，3（欠損）	0，4	チャート	
300	A区	石鏃	2，45	1，75（欠損）	0，4	チャート	
301	A区	石鏃	1，95	1，8	0，45	チャート	
302	A区	石鏃	1，65	1，45（欠損）	0，5	黒曜石	
303	A区	石鏃	1，75	1，55（欠損）	0，4	黒曜石	
304	A区	石鏃	1，55（欠損）	1，4	0，3	硬質頁岩	
305	A区	石鏃	2，8	1，65（欠損）	0，4	チャート	
306	B区	石鏃	1，95（欠損）	1，45（欠損）	0，45	黒曜石	
307	B区	石鏃	2，1（欠損）	1，8（欠損）	0，45	張質安山岩	
308	B区	石鏃	2，7（欠損）	1，75（欠損）	0，4	姫島黒曜石	
309	E区	石鏃	2，0（欠損）	1，85	0，75	チャート	未製品か
310	E区	石鏃	1，55	1，95（欠損）	0，4	チャート	
311	E区	石鏃	2，5（欠損）	1，5（欠損）	0，4	黒曜石	
312	E区	石鏃	1，9（欠損）	1，85（欠損）	0，35	硬質頁岩	
313	A区	石鏃	1，8（欠損）	2，25	0，45	チャート	再加工有り
314	A区	石鏃	1，85（欠損）	1，2（欠損）	0，35	姫島黒曜石	再加工有り
315	A区	石鏃	1，55（欠損）	1，45（欠損）	0，45	姫島黒曜石	再加工有り
316	F区	石鏃	1，5（欠損）	1，55（欠損）	0，4	黒曜石	再加工有り
317	B区	尖頭状石器	1，8	1，65	0，8	黒曜石	
318	B区	尖頭状石器	2，0	2，1	0，5	チャート	
319	B区	尖頭状石器	2，6	1，8	0，85	蛋白石	
320	B区	両面加工石器	3，85	2，9	0，65	硬質頁岩	
321	E区	尖頭状石器	2，7	1，8	0，65	硬質頁岩	
322	E区	尖頭状石器	2，2	2，55	0，5	流紋岩－2	
323	E区	尖頭状石器	2，7	2，0	0，6	流紋岩－2	
324	E区	両面加工石器	3，4	3，7	1，7	チャート	
325	E区	両面加工石器	2，85	2，7	1，0	流紋岩－2	
326	E区	両面加工石器	3，35	2，3	0，8	流紋岩－1	
327	E区	両面加工石器	3，4	2，85	1，95	流紋岩－1	
328	E区	両面加工石器	3，45	3，05	0，95	流紋岩－2	
329	E区	両面加工石器	4，2	3，8	1，3	流紋岩－3	
330	E区	両面加工石器	4，4	2，95	1，35	硬質頁岩	
331	E区	両面加工石器	5，1	3，65	2，25	流紋岩－2	
332	A区	石錘	2，65	0，9	0，35	チャート	
333	A区	石錘	2，65	1，5	0，55	姫島黒曜石	
334	F区	石錘	2，25	2，05	0，6	チャート	
335	A区	石匙	6，1	2，05	0，7	張質安山岩	
336	A区	石匙	3，8	3，4	0，75	張質安山岩	
337	A区	石匙	4，55	2，5	0，95	張質安山岩	
338	A区	石匙	4，55	1，9	0，9	張質安山岩	
339	A区	スクレイパー	9，25	4，7	3，25	砂岩	
340	F区	スクレイパー	5，9	3，7	1，0	流紋岩－2	
341	E区	スクレイパー	3，65	0，85	0，5	硬質頁岩	
342	A区	スクレイパー	8，6	6，8	2，65	砂岩	
343	E区	スクレイパー	6，6	5，65	3，2	硬質頁岩	
344	E区	スクレイパー	6，4	3，25	1，6	頁岩	
345	E区	スクレイパー	9，1	7，05	1，7	砂岩	

表9　出土石器観察表（3）

No.	出土区	品　種	長さ（打面長）	幅（打面幅）	厚さ（作業面長）	石　材	備　考
346	F区	スクレイパー	7，8	4，4	2，45	頁岩	
347	E区	スクレイパー	11，85	7，8	4，3	硬質頁岩	
348	A区	石斧	8，3	5，05	1，7	頁岩	
349	A区	石斧	12，5	6，0	2，7	硬質頁岩	
350	F区	石斧	5，3（欠損）	6，8	2，65	頁岩	
351	A区	石斧	14，45	9，15	3，8	硬質頁岩	
352	A区	石斧	18，0	8，2	3，45	硬質頁岩	
353	E区	剥片	6，5	2，05	0，8	頁岩	
354	A区	二次加工剥片	2，9	1，2	0，55	チャート	
355	B区	二次加工剥片	3，1	2，15	1，2	チャート	
356	A区	使用痕剥片	3，55	1，45	0，55	硬質頁岩	
357	A区	使用痕剥片	2，0（欠損）	1，35	0，25	張質安山岩	
358	E区	二次加工剥片	6，65	4，4	3，1	流紋岩－2	
359	A区	剥片	6，85	2，7	1，1	硬質頁岩	
360	F区	石核	7，5	9，5	12，7	硬質頁岩	
361	A区	礫器	11，2	7，2	2，85	砂岩	
362	A区	用途不明石器	5，75	5，0	2，85	不明	
363	A区	用途不明石器	2，25	1，65	0，6	チャート	
364	A区	原石	15，3	13，5	6，5	張質安山岩	
365	A区	磨石	7，8	7，9	3，74	砂岩	
366	A区	磨石	8，1	7，8	3，1	砂岩	
367	A区	磨石	11，4	9，5	1，3	砂岩	
368	B区	剥片	9，5	7，85	3，65	張質安山岩	
369	E区	叩石	13，3	8，0	8，3	不明	
370	A区	用途不明石器	11，0	10，0	7，4	不明	
371	A区	用途不明石器	8，55	7，1	4，15	不明	

表10　出土石器観察表（4）

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査は、当初調査区南部に流れる、元野地区を横断する少河川より離れた位置にあるため、遺跡は小規模であると考えられていた。ところが本調査では多くの遺構・遺物が出土し、先史時代、この地点において生活が営まれていることが明らかとなった。これは、調査区を東西に横断する湿地が、かつては河川として水利を供給していたことを裏付けるものである。この河川は、調査区南西よりＡ区の北部を隣接しながら流れるものと、調査区北西よりＥ区の南部に深い谷を刻みながら流れる二つの河川があり、調査区周辺は二つの河川の合流点であったと考えられる。

旧石器時代は、その殆どがＣ区及びＥ、Ｆ区にて出土している。このうちＣ区は表土層下の攪乱層より出土しているが、これは西部にある台地の一部が崩落した際の流れ込みと考えられる。この地点は既に大規模な削平を受けているため、遺跡の規模等を図り知ることはできないが、出土した石器はナイフ形石器文化期に相当し、編年的に大きなずれは認められない。Ｅ、Ｆ区は少量ではあるもののナイフ形石器文化期と細石刃文化期の遺物が確認された。なお、Ｅ区表面より採集された三稜尖頭器と、Ｆ区より確認されたナイフ形石器は時期差が考えられ、ナイフ形石器文化期の中でも、幾つかの時期にわたって遺跡が形成されたことを窺わせる。
細石器文化期の遺物は２点のみであり、黒曜石の小礫を利用したものである。型式上は野岳型細石刃核に分類され、細石器文化期の古相に位置づけられる。また、Ｅ区からは槍先形尖頭器が出土しているが、これは両縁から規則的な調整が行われており、旧石器時代終末から縄文時代草創期に東日本を中心に分布する長者久保・神子柴文化段階に位置づけられる。槍先形尖頭器は、町内では井手ノ尾遺跡等でも出土が確認されているが、両縁からの規則的な剥離は行われない。縄文時代早期の包含層からの出土であるとはいえ、貴重な遺物と言える。

縄文時代は、草創期より遺物の出土が確認された。主にＥ区に分布するが、一部Ａ、Ｆ区にも及んでいる。Ｅ区から出土した（23～25）は爪形文土器である。これは井手ノ尾遺跡ほか、芳ヶ迫第３遺跡でも類例を見ることができる。（26～28）は隆帯に爪形文を残しながら貼り付けたもので、周辺では宮崎市堂地西遺跡や、同椎屋形第１遺跡で確認されている。また、（29）の隆帯上押引文は、鹿児島県中種子町奥ノ仁田遺跡に類似する。このように、草創期の土器は少量ながらも幾つかに分類が可能である。旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての遺物はこれらの土器と、槍先形尖頭器があるが、出土層位が同じであるため両者の関係は不明である。

早期は、遺構・遺物を通し調査区内に最も多くの痕跡が残される。全ての調査区で出土が確認されたが、Ｄ区は西部からの流込みであると考えられる。前葉から後葉にかけて、川を挟んだ両岸であるＡ区とＥ、Ｆ区、また川の中州と考えられるＢ区に集中的に痕跡が残される。以下、これら早期の土器について、時期的に順を追って検討を加えたい。

Ⅰ類は、円筒形の器形を呈し条痕を施した土器である。

Ⅰ類ａは、貝殻条痕文土器である。これらの土器は町内の縄文時代早期の遺跡で頻繁に出土が確認されている土器であり、町内では田野町鹿村野地区ズクノ山第２遺跡Ｅ地区にて多量に確認されたほか、県内では西都市別府原遺跡でも多く確認されている。本遺跡ではごく少量に留まり、その多くがＥ、Ｆ区からの出土である。なお、(41) については、前平式土器に該当する。

Ⅰ類ｂは、深い条痕文を持つ前平式土器と考えられる。これも芳ヶ迫、札ノ元遺跡をはじめ、町内に多くの出土例がある。殆どＡ区から出土したものである。

Ⅰ類ｃに分類された２点のうち (54) は吉田式土器である。町内の遺跡から出土が確認されるのはごく稀であり、この時期の大規模な遺跡密集地である前平遺跡群でも出土は数点のみである。

Ⅱ類は、円筒形の器形を呈し沈線及び刺突を施文した土器である。

Ⅱ類ａは桑ノ丸３類に該当する。札ノ元遺跡や井手ノ尾遺跡、昨年調査が行われたズクノ山第２遺跡Ｆ地区からも出土が確認されている。

Ⅱ類ｂは下剥峰式土器である。町内の出土遺跡を見ると、桑ノ丸３類とほぼ重なる傾向にある。うち (70) は器面の成形時に貝殻腹縁を粗く刺突したものであり、磨き等の処理が行われず、他の分類の土器とは様相を異にする。

Ⅱ類ｃには多種の文様があるが、この中で (71～73) は羽状の短沈線が連続する文様構成であり、近年辻タイプと呼称される一群に該当する。また、それ以外の土器も、刺突を行うことや口縁部断面形より、それに類するものと考えられる。

以上Ⅱ類は、大部分がＥ、Ｆ区で出土しているが、一部Ａ区でも確認されている。

Ⅲ類は、押型文土器である。ａ類は、そのうち楕円押型文が施文された一群である。

Ⅲ類ａ１は、内面及び口唇部には外面と同じ原体が横位に施文されるが、(80) の口唇部は、浅い刻みが見られる。他の分類の土器にもしばしば見られるが、これは原体条痕の名残りであると考えられる。器形は口縁部で外反する器形を呈す。(79、80) は、胴部には僅かな膨らみがある程度だが、(84) の胴部は若干強調されている。多くはＦ区より出土したものであるが、一部Ａ区からも確認された。細粒ではあるが、縦位に施文されていることや器壁の厚さから、押型文土器の編年中ではやや後出である可能性も考えられる。

Ⅲ類ａ２は、出土数は少量であるものの、Ａ、Ｅ、Ｆ区に分散して出土した。(90) は内面上部に原体条痕が巡る。これらの特徴は、東九州において設定される早水台式土器のそれに近い。他の分類の楕円押型文土器と比較すると、最も古い時期と考えられる。

Ⅲ類ａ３は、Ａ区とＦ区より出土が確認された。このうち (97) は縦方向への施文が口縁～胴部に至ることや、粗大な楕円文を持つこと、原体条痕の省略等、下菅生Ｂ式と同じ特徴を持つ。また、(98) は屈曲気味に外反する口縁部を持つことや、口唇部に原体条痕を行うなど、(97) とは異なった属性が見られる。(99～101) は器形が不明ではあるものの、粗大な楕円文は田村式土器のそれと酷似する。また、この土器には胎土に雲母片が多く含まれることも特徴として挙げられる。

Ⅲ類ａ４は口縁部の断面形及び傾きはまちまちである。全てＦ区でのみ確認された。(103) の施文方向は縦位の崩れたものと考えられる。但し押型文は細粒の部類に入り、東九州における押型文の編

年を以て特定の型式に分類することはできない。

Ⅲ類ａ５もＦ区のみの出土である。幾重にも施文を行っており、下菅生Ｂ式土器またはその前後の時期と考えられる。

ｂ類は山形押型文が施文された一群である。

Ⅲ類ｂ１のうち、器壁の薄い（112～115）は同一個体であり、Ｅ区から出土した。波状口縁を呈し、内面には外面と同じ原体の施文が見られるが、その上部には短沈線（原体条痕）を行う。編年的には東九州における早水台式土器の段階に属する。残りは全点Ａ区から出土したものである。横位施文ではあるものの、器壁が厚く、上記の土器よりは後出と考えられる。

Ⅲ類ｂ２はＡ区からの出土であるが、１点のみしか確認されなかった。山形押型文を縦位に施文する点は、押型文土器編年の終末期にあたるヤトコロ式土器に類似する。

Ⅲ類ｂ３となる（124）は、口縁部から下へ横→縦→横という方向で施文される。内面施文も複数回にわたって施文が行われる。また、口唇部には刺突とも思われる刻みが行われる。これらの様相は、押型文の編年の中でも後出にあたる。またこの他の土器も、それに前後する時期が予想される。

Ⅲ類ｃのうち（129，130）の外面に施文される幅広の格子目は、近隣では天ヶ城跡に類例がある。

Ⅳ類は、胴部で「く」の字に屈曲する手向山式土器である。（131～134）の外面は山形や菱形の押型文が施文されるが、これらは手向山式土器の中でも初期のものと考えられる。（135）は押型文の施文の後に沈線による曲線が施文される。（136）の外面に押型文は見られず、沈線と隆帯により構成される。なお、器形は浅鉢形であり特異である。

Ⅴ類は刻み目を有す突帯が連続して巡る一群である。

このうち、Ⅴ類ａとした（137～140，142，143）は天道ヶ尾式土器である。（137～140）は４単位の波頂部には瘤が貼り付けられる。この瘤の貼付は、えびの市妙見遺跡を標識とする妙見式土器にも行われており、両者の密接な関係を示す。（142）の口縁部は隆帯が密に貼り付けられているが、この隆帯とその間隔は、天道ヶ尾遺跡の出土資料に近い。（143）は器面には押型文の施文も見られるが、隆帯を数条貼り付ける点を考慮し、天道ヶ尾式土器の範疇とした。

Ⅴ類ｂの（141）は縄文を地文とし、突帯を貼り付ける特徴から妙見式土器と考えられる。町内ではこの他に高野原遺跡（Ａ区）、前ノ原第２遺跡からも出土している。なお、このⅤ類は（143）を除く全てがＡ区より出土した。

Ⅵ類は平栫式土器である。このうち（144、146）の断面が三角形を呈す幅狭となる口縁部の特徴は、高橋信武氏の設定する平栫Ⅰ式の内容に近い。また、口縁部文様帯の幅が広がった（147～150）はⅢ式に、Ⅰ式とⅢ式の中間である（145，155）はⅡ式にそれぞれ文様構成が類似する。Ⅰ式はＡ区のみから出土するが、それ以降はＡ、Ｄ、Ｅ、Ｆ区からそれぞれ少量ずつ出土する。

Ⅶ類は塞ノ神式土器である。これも同様に、高橋氏の論考中で行われた分類に従い分類を行いたい。

（159～161）は口縁部が「く」の字状に屈曲し、沈線文を施文したものである。これらは塞ノ神Ⅰ式古段階のそれに近い。これらは同一個体であり、Ａ区から集中して出土した。また、胴部に撚糸文を縦位に施文した（162～164）も、Ⅰ式のいずれかに属すると考えられる。Ｅ、Ｆ区から出土した。（165～169）の、二本の沈線による区画内に縄文を施文したものや、（170）に見られる頸部～胴部の

境界に沈線・刺突を施文する点は、塞ノ神Ⅱ式に相当する。(170) がA区から確認された以外は、全てF区から出土したものである。また、(172〜173) の口縁部の傾きや貝殻腹縁による押引きは塞ノ神Ⅲ式中段階と考えられる。A、E区から出土した。また、(174, 175) は口縁部に沈線による曲線が施文されるが、これは塞ノ神Ⅲ式新段階からⅣ式に該当すると思われる。どちらもA区からの出土である。

Ⅷ類は特異であり、既存の型式名で判断するのは困難が生じる。但し「隆帯を貼り付け、貝殻条痕による曲線が横位に施文する。」という外面施文の手法のみに着目すれば、鹿児島県中種子町苦浜貝塚を標識とする苦浜式土器に共通点を見ることができる。この土器型式は、隣町の橋山第1遺跡A地区から確認され、宮崎県央部も分布域であることが明らかとなったているほか、近隣では平成12年度に調査が行われた黒草第2遺跡からも出土している。

Ⅸ類は、一部を除きC区のⅣ層中から出土した。

Ⅸ類aの (181, 183) は、器面に斜方向からの粗い条痕文が深く刻まれており、鎌石橋式土器に該当する。(179, 180) の外面の条痕文は、一般的な鎌石橋式土器と比べ条痕に規則性があり、また内面も条痕の後にナデが行われている点も特異であるが、バリエーションとして範疇に含めた。この土器型式は、調査区近隣の黒草第2遺跡でも出土が確認されている。

Ⅸ類bは轟Ⅰ式土器である。付近では清武町赤坂遺跡や橋山第1遺跡からも確認されているが、町内では初の出土例である。施文によって微隆起線文を作出する。

X類である縄文土器、撚糸文土器は、押型文土器と同時期若しくはその前後の時期と考えられる。全てF区から出土した。

XⅠ類は壺形土器である。(198) の口縁部は肥厚部を貼り付けるものであり、こうした製作手法は鹿児島県鹿屋市前畑遺跡の資料に類例を見ることができる。(200) の頸部〜胴部の境界部にある微隆起は鹿児島県知覧町西垂水遺跡のものと共通する。

検出された集石遺構は、全てこの早期に構築・使用されたものである。

A区からは最も多くの集石遺構が検出されたが、それは調査面積が広大であったためであり、B、E区と比較すると密度は疎らであった。検出面はⅣ層〜V層と幅広く、出土した遺物からも分かるように、早期の全般にわたってこの地で生活が営まれていたことを示している。この調査区からは石器の出土が多く、石鏃をはじめ石錘、石匙、石斧等の製品も多くがこのA区にて出土したものである。また、特筆すべきは張質安山岩、いわゆるサヌカイトの比率であり、その高い使用頻度は表1の石鏃の石材比率にも反映されている。A区からはこの石材の原石も出土しているが、この他にもサヌカイトの持ち込みが恒常的に行われていたことを示している。

B区の集石遺構の検出面はV層の上部と下部にあり、36基と最も多く検出された。しかし、出土遺物は土器、石器共に時期は多彩である反面量的には少なく、中州である地形を活かし、獲物を陸上に引き上げる場所として利用されたことを窺わせる。

C区は傾斜面上にあり、傾斜面からは集石遺構が若干検出された。また、C区の南東部からは鎌石橋式土器や轟Ⅰ式土器が集中的に出土しており、対岸のA区等で遺物の出土が殆ど見られなかった早期末に、河川の対岸であるこの地に集落が築かれた可能性が考えられる。

Ｄ区は崩落により少量の遺物が混入する程度であるが、攪乱層からの出土は、西側の高地にも早期の段階に遺跡が形成されたこと示す。

Ｅ、Ｆ区は調査区の中で最も高台にあり、面積からすると最も遺物・遺構の集中が見られた区域である。特にＶ層上面より確認された大規模な礫群や、下位から検出された集石遺構の集中は、ここが生活を行う上で重要な地点であったことを表しており、またその下位より検出されたＳＩ－05のような大型の集石は、宮崎県央部の縄文早期の遺跡において、しばしば検出される遺構である。

縄文時代前・中期はⅡ類の曽畑式土器が最も古く、Ⅰ類の尾田式土器、Ⅳ類の深浦式土器が後続する。Ⅲ類の微隆起線文は轟Ｂ式土器のものに類似するが、文様の構成が異なっており、前期から中期にかけて南九州において見られる微隆起線文を持つ一群に属すると考えられる。Ⅴ類は春日式土器であるが、段階的には古いもののみである。

前・中期の土器は、Ｆ区のアカホヤ上面で少量確認されたもの以外は、Ｄ区の攪乱層からの出土であり、遺物包含層や生活面は確認されなかったため、当時の集落の様子を伺い知ることはできなかった。ただしＥ、Ｆ区で検出された土坑の構築時期は、若干の時期差を置きながらも縄文時代前・中期に構築されたと考えられる。

また、古代の須恵器等も表面採集されているが、調査区内から包含層や遺構等は確認されなかった。

（参考文献）

鎌田洋昭　「ナイフ形石器文化の終末の様相と細石器文化の開始期について」『九州の細石器文化』　九州旧石器文化研究会　1997

杉原敏之　「福岡地域における細石刃核の研究」『九州の細石器文化』　九州旧石器文化研究会　1997

桑波田武志　「細石器の生産技術」『九州の細石器文化』　九州旧石器文化研究会　1998

高岡町教育委員会　「天ヶ城跡　上巻」『高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集』　1998

宮崎県教育委員会　「野久首遺跡　平原遺跡　妙見遺跡」『九州縦貫道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書第２集』　1994

高橋信武　「平栫式・塞ノ神式土器再論」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会　1998

八木澤一郎　「平栫式土器様式の再検討」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会　1998

大分県教育委員会　「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」　1993

荻町教育委員会　「右京西遺跡」　『荻台地の遺跡Ｘ』　1986

東和幸　「春日式土器」『縄文時代』　第10号　縄文時代研究会　1999

元野河内遺跡調査前遠景（西より）

図版 2

A区近景（西から）

A区遺構検出状況（西から）

A区SI-01 検出状況

A区SI-01 完掘状況

A区SI-02 検出状況

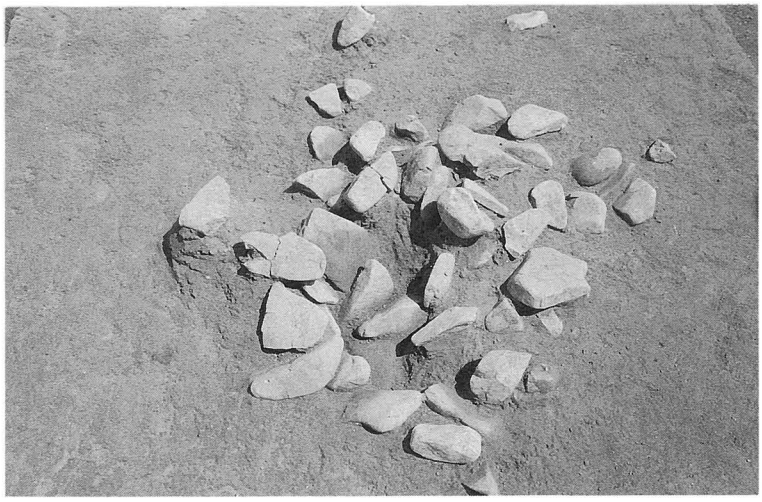
A区SI-02 完掘状況

図版 4

A区SI-03 検出状況

A区SI-04 検出状況

A区SI-05 検出状況



A区SI-06 検出状況

A区SI-06 完掘状況

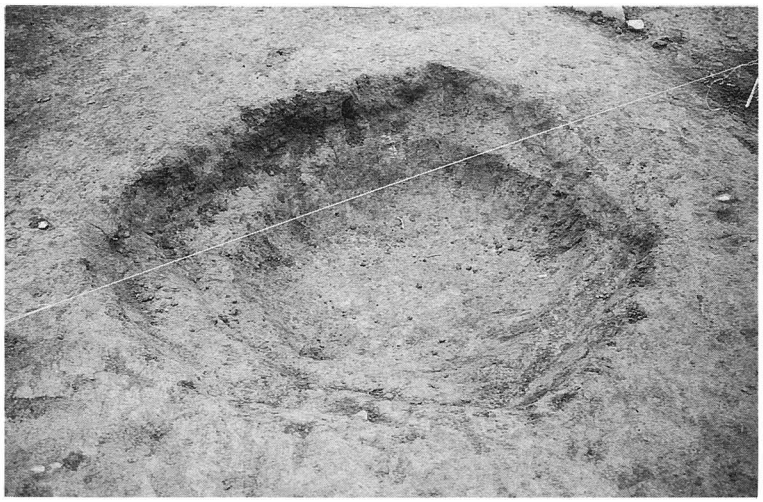
A区SI-07 検出状況

図版 6

A区SI-08 検出状況

A区SI-08 完掘状況

A区SI-11 検出状況



A区SI-11 完掘状況

A区SI-12 検出状況

A区SI-14 検出状況

図版 8

A区SI-14 完掘状況

A区SI-16 検出状況

A区SI-17 検出状況

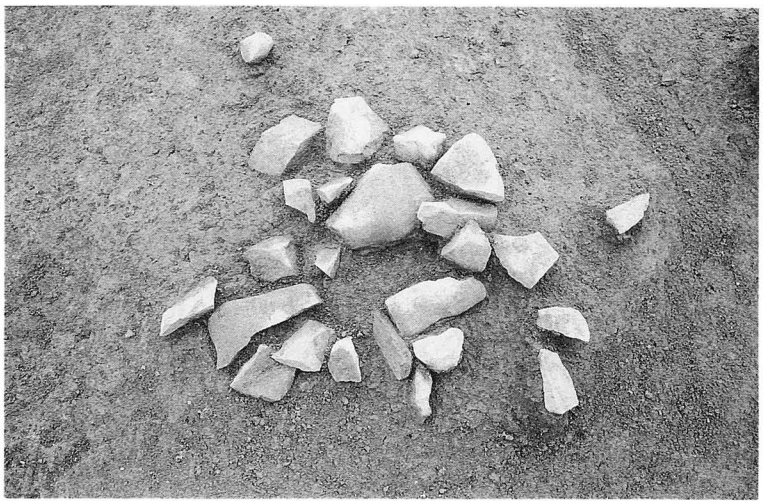
A区SI-17 完掘状況

A区SI-18 検出状況

A区SI-19 検出状況

図版10

A区SI-20 検出状況

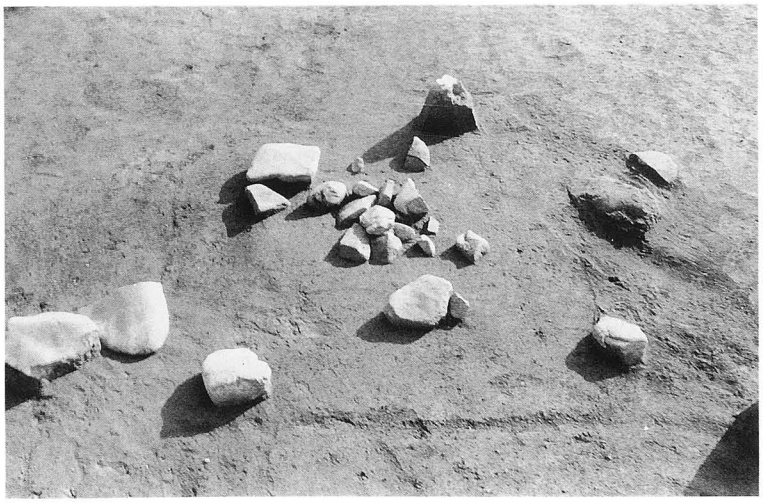


A区SI-21 検出状況

A区SI-22 検出状況

A区SI-23 検出状況

A区SI-23 完掘状況

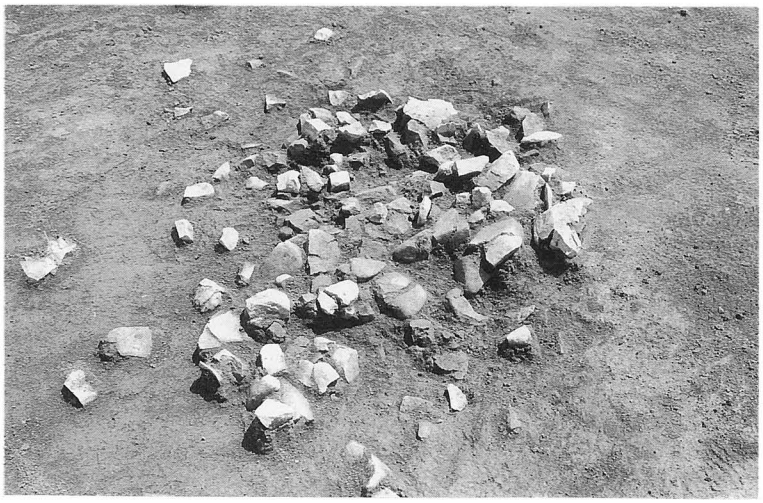


A区SI-24 検出状況

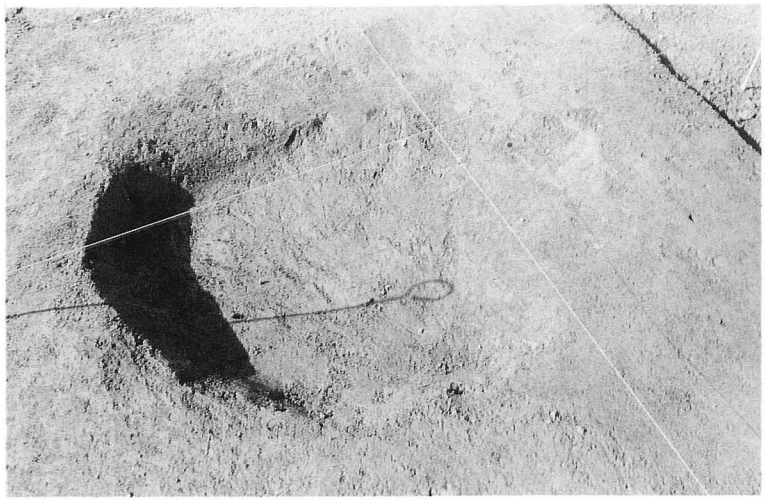
図版12

A区SI-25 検出状況

A区SI-26 検出状況



A区SI-27 検出状況

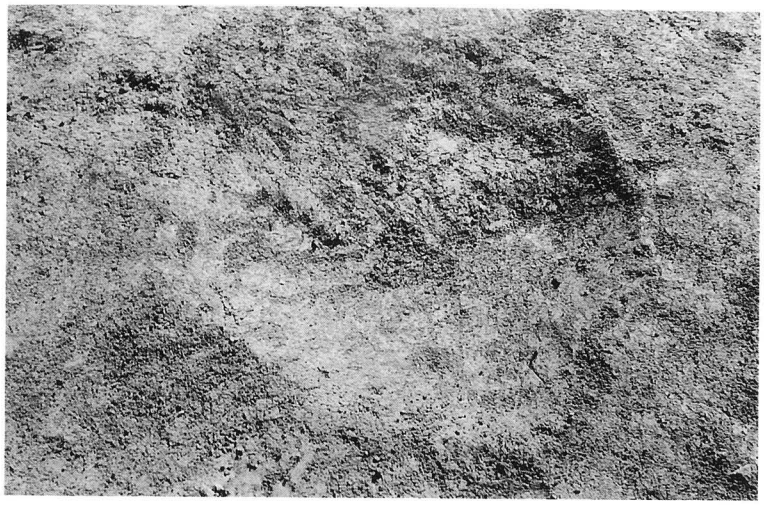


A区SI-27 完掘状況

A区SI-28 検出状況

A区SI-29 検出状況

図版14



A区SI-29 完掘状況

A区SI-30 検出状況

A区SI-31 検出状況